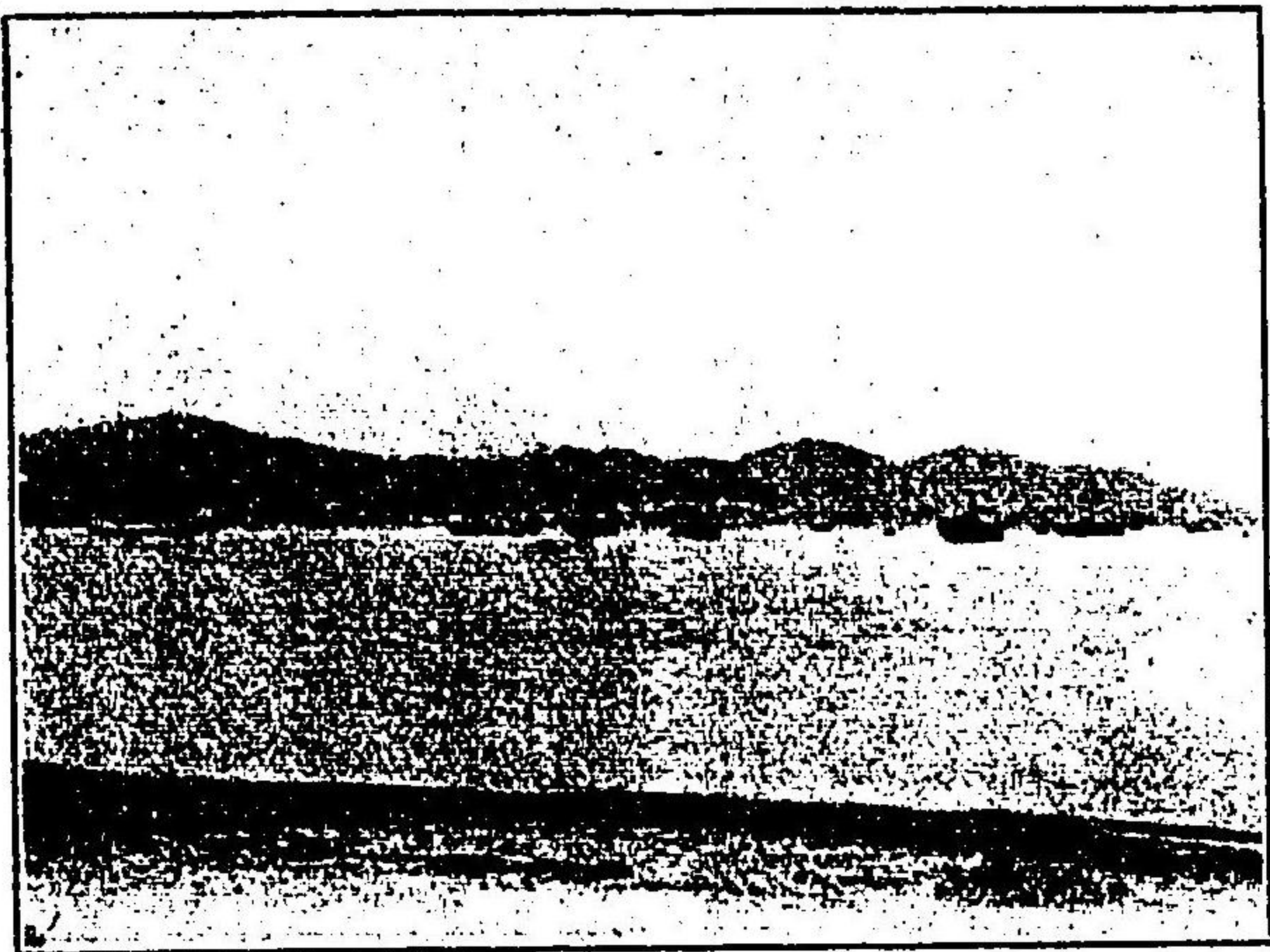


東西六町、南北三町、戸數八百、人口六千を有す。沙水川を以て北條の町と對し、武相往復の船舶常に輻湊し、勝山、及び相州浦賀を経て東京靈岸島に往來する東京灣汽船あり。銀行會社の設置も充分にして、市街は對岸北條と共に國中第一の繁榮をなせり。灣上二島あり。東なるは鷹の島にして周圍六七町、草木緑を蔽ひて中に辨天の社あり。之れと十町を距て港上半里の處に沖の島あり。前者よりも少しく北に、形また相似たり。島上常に數名の蟻婦ありて、身を水底に投じ、遊客の欲するに従ひ、鮑、榮螺の類を獲來る。町の字館山に榮喜溫泉あり。豊房村字神餘の鹽井溫泉と共に冷泉にして鹽味を帯び特效多し。



龍伏の松 館山町の西方一里許、西岬村大字鹽見の沙見崎の岬上なる一偏刹の庭前にあり。松の高さ八九尺、蜿蜒蟠屈、臥龍の枝勢地の百坪を蔽へり。樹下一茶亭あり。雅人の吟咏にまかす。古來、地を沙見の夜雨と稱せり。

鉦切明神 地は西岬村字濱田と見物二村の中間に位す。又手斧切船越神社と稱し、稻田媛命を祀る。社に長さ二間許の船あり、丸木を穿ちて造りたるもの、無論太古のものに屬す。社背なる巨巖は、恰と利刀を採つて斷りたるが如く、頂より底まで二尺許の隙を有す。里人曰く、之れ太古神の鉦を以て切りし痕なりと。近き濱田一に大洞穴あり。往昔大龍の棲息せし跡なりと傳へ、洞の末は遠く瀧口の小鷹神社に通ずといふ。

洲の崎 右方は館山灣、左方には外洋を繞らして、海に突き出でたる處、大房岬と相對して館山灣を抱く。相州三浦三崎と海上七里を距て、東京灣の咽喉を扼するものなり。維新前はこれと大房岬の二ヶ所に砲臺をおきて要害となせり。今はその趾のみ

を有し、臺は上總國富津に築造せられたり。

洲崎神社 岬の丘岡をなせる處にあり。神武天皇の紀元元年の草創にして、天比理乃咩命を祀る縣社なり。古へは次記、養老寺に屬したりといふ。

養老寺 洲崎神社の傍にあり。元正天皇、養老元年の開基にして、上脚の巖窟に役の小角の石像を安置す。窟の内に一泉の涌くあり。銀水又は獨鈷水と名け、旱天といへども乾るゝ事なしといふ。小角かつて大島に流鏑せられたる時、波を踏んで此の地に來り、奇險を示して里人の崇仰厚かりし爲、後人此の石像を造りて安ずる處なりと傳ふ。

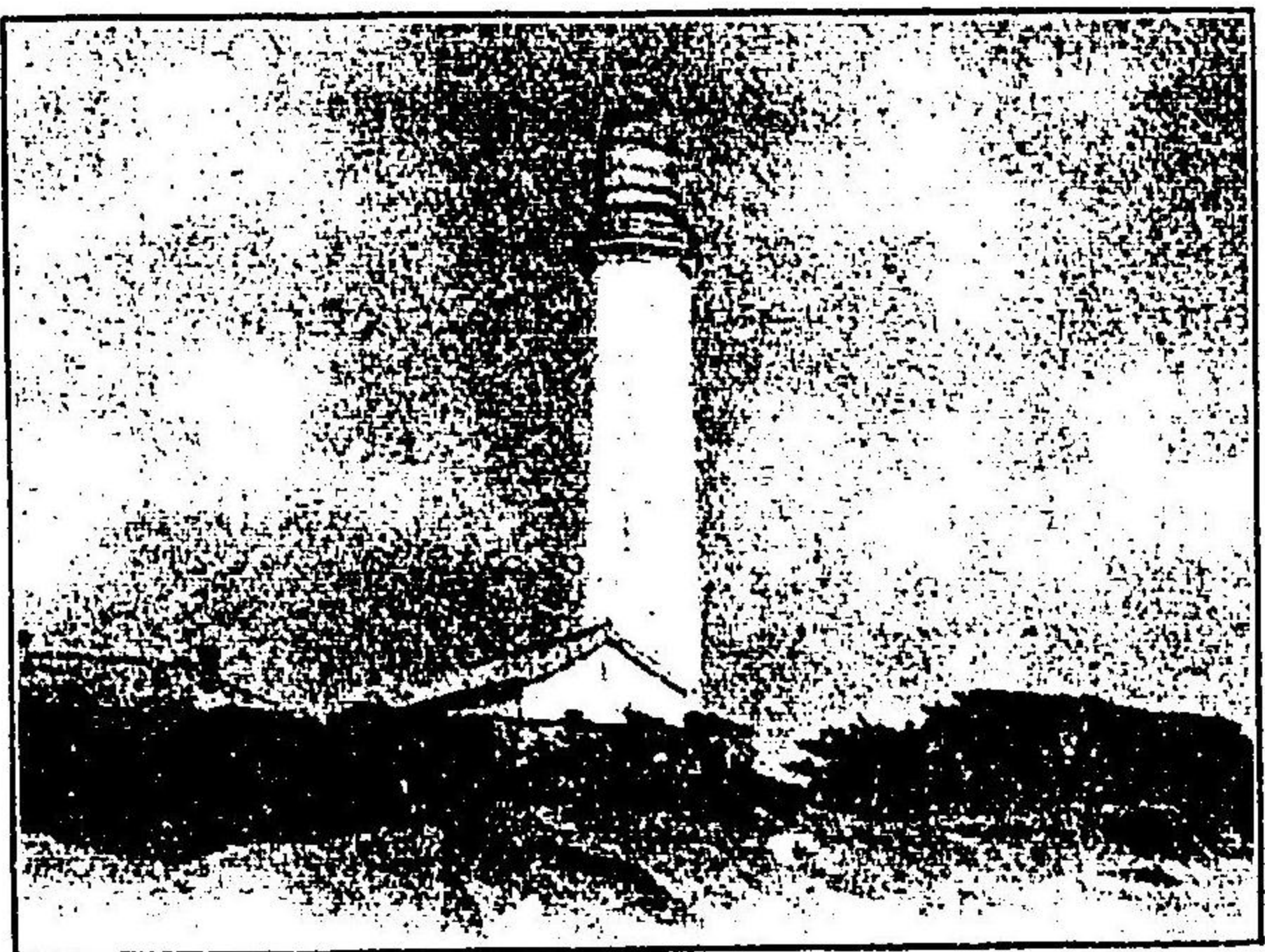
洲の宮社 洲の崎神社と同體にして、神武天皇の紀元元年の草創、天比理乃咩命を祀り、東方神戸村大字洲の宮に鎮座す。附近諸村の鎮守にして又、國內名祠の一なり。布良岬 西岬村大字井戸より富崎村大字相濱附近に至る延長二里許の、平沙遠潮、風浪の奇なる海岸、平沙浦又は鬼ヶ浦の東南端、巖崑の磊々、又巖々、千態萬狀をな

して海上に走れる岬角の稱なり。岬角の端を距る海上、西南十三町には、東西十三町南北六町、深さ二三尋にある暗礁あり。航海者の最も恐怖する所なり。地は國南端富崎村大字布良に屬し、海上遙かに伊豆の大島を大洋の波浪縹渺の上に望む。海水浴場の設けあり。

根本海水浴場 富崎村に屬し、海洋の上遙かに伊豆の大島を望み、西北に富嶽の秀峯高く雲際に畫く。海水清く、波又壯快、北條のそれを女性的とせば、こは男性的とも見るべし。館山よりせば約三里、人力車の便をかれれば六十錢位なれど、徒歩の如何に變化多き、海色を悠々楽しみ得るかは言を俟たず。

○東海岸地方 東海岸に至るには東京小湊間の汽船の便によるもよし。北條町より白濱に出てこれより海岸を南より北に上る路は、平沙波濤相吞吐し、頗る風景に富めり。北條町より中央部丘陵を越えて鴨川町に出る路は馬車を通ず。天津、小湊は東海岸に於ける名邑なり。小湊には日蓮宗の巨剎誕生寺あり。此海岸は漁獲物に富み、漁

村多し。北條町より國の南端野島崎は二里半を有す。



野島崎燈臺

野島崎 國の最南端、外洋を繞らし、磊塊たる奇怪の岩石之を待つて、白沫の數丈を飛騰する處萬雷の一時に吼ゆるが如し。突兀たる危礁の地角、洋上に突出する事約三町、大濤を碎く大洋の風の飛沫と共に陸をかむ處、白色十數丈の燈臺屹立す。附近に辨天祠野島神社あり。地は古來國風に現はれたる著名の勝地なり。白濱村大字白濱に屬す。

のみ外洋に瀕するが故、海水浴場なると共に、又好個の避寒地たり。而も物價甚だ廉

白濱海水浴場 白濱村は戸數凡そ四百の漁人多き小部落にして、東北西の三面に山を繞らし南面

なるが故、學生を第一の顧客とす。地は嘉吉の戰役後、里見義實の始めて安房國に入りし處にして、城址、館址及び義實、義成の墳墓を有する菩提所杖珠院あり。村の中央なる山の麓に、弘法大師手植の芋あり。この葉は四時青緑にして、枯落する事なし。字青木にも亦芋井戸なるものあり。

高塚山 七浦村字大川の上方にあり。山は海拔七百二十尺、麓より十七町弱にして頂に達す。頂の眺望は伊豆群島の遙かに水天髣髴の間に點在するあり、近く七浦の海砂眼下に畫圖をのぶるものあり。山上不動尊を安置す。一支峯あり、龍宮山といふ海拔五百二十尺、同じき麓より十二町にして絶頂に至るべし、七浦は、白間津千歳白子の間、一帯の沿海の稱にして、此等の村民、多くは漁業に従ひ、その海上は殊に秋刀魚を以て著し。就中睦村なる南北朝夷最も繁昌を極め、人家稠密して、内に川尻川を挟む。

白濱より海岸を待へば、平館、朝夷、白子、和田等の漁村を経て、鴨川町に至る。



石堂寺 北條町よりすれば、莫越を越えて三里半、莫越の山の社よりせば北の方里餘。眞浦より二里餘なり。丸山川の上流に近き、満録村字石堂に在り。神龜三年行基僧正の開基にかゝり。慈覺大師を中興となす。比叡山延曆寺の末派にして天台宗に屬す。寺域の内、二王門を入れば、本堂、多寶塔、藥師堂、太子堂、十王堂、山王堂、鐘樓等散在す。本尊は行基僧正の作にかゝれる十一面觀世音、二王門には運慶の彫刻なる二王尊の像を鎮せり。寺寶の中最も珍とするに足るは、阿育王の塔及び智證大師自筆の不動座像なり。而も就中前者は往古天笠の阿育王(阿輸加王)が釋迦牟尼入滅の後その舍利を收め之を七寶の容器に安じたるものにして、その質は水晶、その形は五輪、之れに銀點を飾る。眞に本邦美術史上無二の珍品なり。同村大字大井の上に笠ゆるを

愛宕山 となす。山は海拔一千三百七十二尺、大井よりせば登路約一里、山上に愛宕祠の一字を安せり。安房第一の高峰となす。

犬切千朶楓 同村大字川谷の犬切にあり。樹の高さ凡そ三丈半、枝葉の四邊に及ぶもの二十丈、霜の一度つけば、一株にして紅林を現せ、僻境の美觀なり。隣村和田村大字花園に

向西村入定窟 といふものあり。赤穂の義士片岡某の子父が賜死の後、僧となりて向西坊と稱し、茲に來り、久しく黒瀧の地に住せしが、後之れに入定したる所なりと傳ふ。性和歌をよくする僧なりきといふ。

江見村附近 江見村は舊隣郡の北端即ち國の東南面、外洋に接せる部落の名にして、その大字吉浦より洋中に斗出せるを太夫崎といふ。岬角の半腹に小寺あり。その背後斷崖を廻れば、岩の腹に不動像を安じ、傍に一空洞あり。洞口は凡そ三丈許もあれど、行くに従つて次第に狭く暗々たるもの全く辨すべからず。面白き傳説あり。昔舊長狹郡の峯岡牧場の一馬奔逸して此洞に入る。たまく源頼朝の從者茲を過ぎ、巖上馬蹄の痕あるを見、直ちに入洞して之を捕へ、將軍に献ず、之れ有名なる太夫驪にして、

義經 鷓越を踰ゆる時の乗馬なりといふ。村の北端は直ちに太海村に續く。その大字天面の鷹巢山には上の瀧あり。直下約四丈、鬱々たる緑樹の中鬱々の聲深く包む。同村大字濱波太の海上約一町許の處に波太島あり。島は岩石より成り、周圍凡そ十四町内に人家一戸ありて平野氏といふ。傳説によれば、平野氏の先祖は仁右衛門といひて源頼朝が石橋山に敗れて安房に遁れたる時、之に事へて功あり。よつて此の島を受領し、その子孫相承け相繼ぎて今日に至る。故に今尙仁右衛門島又は蓬ヶ島の稱あり。此の島附近より以北鴨川町の字磯村附近に至る間の海上は島嶼の狂濤を待つて壯觀を成すの處多し。就中辨天島、菜萁島、柑子島等あり。その最も大なるもの波太富士は波太の海中に聳ちて、景趣甚だ偉なり。江見村より二里十一町にして

鴨川町 に至る。町は舊前原町及び横渚、貝渚、磯の三村を合したるものにして、人口凡そ七千、町の中前原横渚の兩字のみ市家の櫛比を見る。市民は多く商と漁とを業とす。地は加茂川の河口にして、館山町を距る八里二十四町、鋸山の麓なる保田村

より直ちに之に至らんとせば、道を金東(大山村)にとり二里にして達すべし。之れより一里二十六町餘にして

天津町 に至る。此の間、鴨川町の北端直ちに松崎川を涉り、東條村大字廣場に至れば、白旗社の古跡を過ぐ。地は昔、源頼朝の當國に流落せし頃、此處に上總介廣常の消息を待ちたる處といふ。社傍に一殘株あり。旗かけの松と稱す。地を待崎又は松崎と稱す。町は人口凡そ八千を有し、千葉縣内海産の收獲最も多きところにして、町には商家、漁家擔を並べ、夏季は鯉節の製造最も盛んにして、秋冬に入れば、秋刀魚、鰯の漁獲を専らとし、下總の銚子と兩々相對して繁榮を極めたり。町の北方約二里にして

清澄山 あり。山は安房の第二峰にして、支嶺の重疊なる九十九谷の稱あり。本峰は海拔一千二百七十三尺、支嶺の中寶珠山は千百二十五尺、之に順じて、富士山、如意山、金剛山、露地山、獨鈷山、鷄峯山等皆颯望に勝れ、空晴れて日の光明らかなる

の日本峰の絶巔より支嶺を繞らして四顧せば、南には伊豆の島々、西には富士や函根山、北に筑波の山つゞき、東に小湊の小市街など一望の中に入る。山中の村落を清澄といふ、天津の町に屬す。百戸の民家、樵に非んば建具を業としてまた旅館數戸あり、此の山の頂上前額に

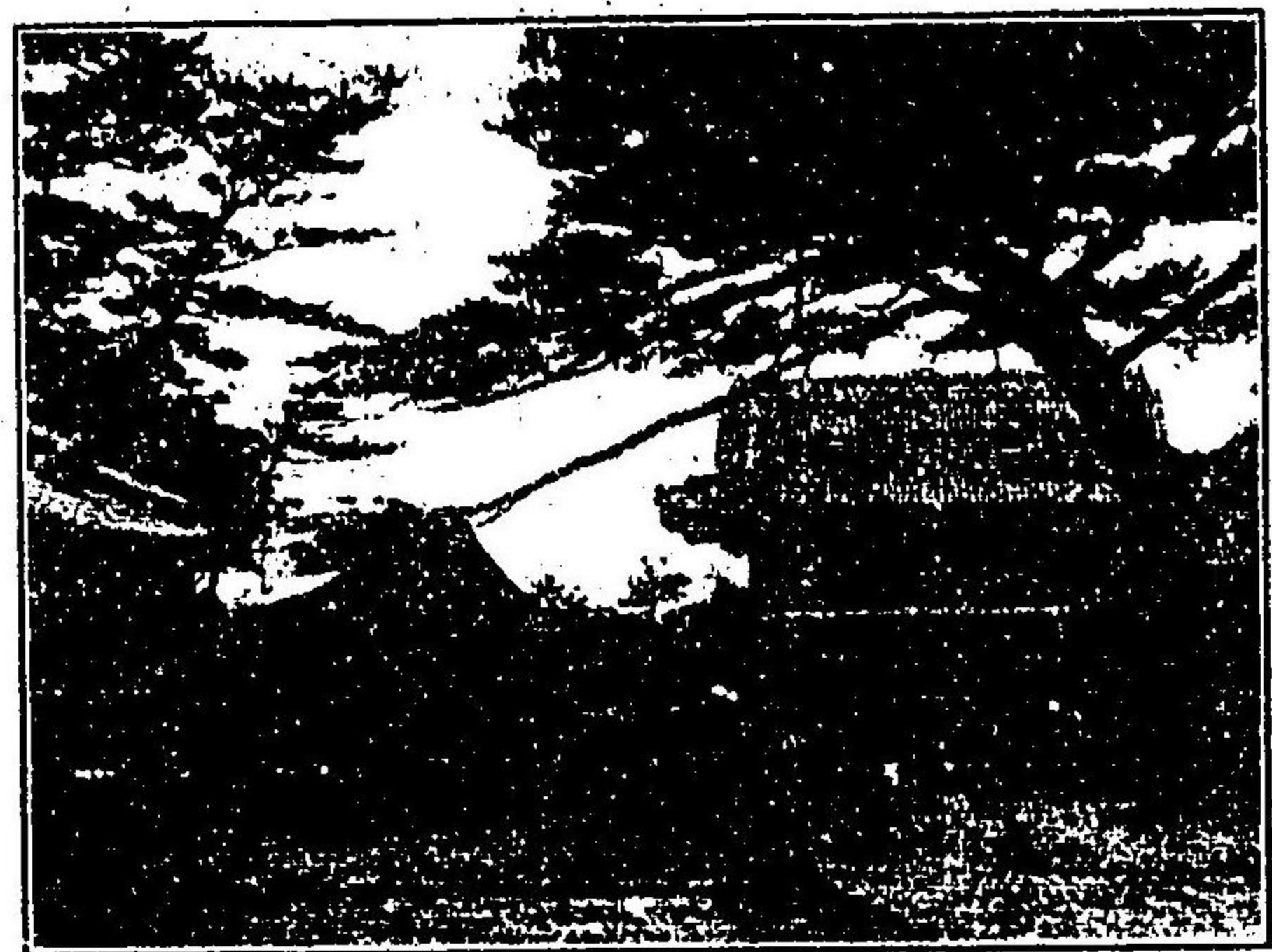
清澄寺 あり。登路はさまで峻ならず、天津町より直ちに車を通じて山門に達すべし。境域凡そ一萬五百坪、古松老杉亭々として之を圍み、就中杉樟の巨大なるもの多し。本堂は背くに銅瓦を以てし、十五間四面、觀音堂、鐘樓、青銅寶篋塔、方丈等あり。山の西方一岩石の上にあるは朝日堂にして、日蓮上人が旭天に向つて始めて南無妙法蓮華經を稱へたる所といふ。山は太古天富命鎮座の靈地にして山上の池清く澄み池邊の大柏夜な〜光を發するが故に、清澄又は千光と呼べる。後幾百年神祠全く廢れ、人跡を絶つ事久しからし。孝仁帝の寶龜二年、一僧山に入り、山上の柏を伐りて虚空藏の像を刻し、一字を建て、之を安し千光山金剛寶院清澄寺と號す。明星水、

寶珠、摩尼、如意の三嶺の名はその跡を傳ふるものなりといふ。仁明帝の承和三年慈覺大師來つて之れが中興となり、今の靈地山に壇を築きて修行し、獨鈷山と名け、鬼類を滅除して鷄蓉の名を與へ、不動を安して金剛、淺間菩薩をおきて富士の山名を作る。堀川院の嘉保三年雷火にかゝりて僧坊悉皆烏有に歸したるを、當時の國主源親元之を再興し、承久の頃北條政子は、寶塔、輪藏を建立して、一切經、釋迦如來右眼の舍利及び毘首羯摩天が作にかゝれる赤旃檀の涅槃像を安置す。後日蓮上人は十二歳にして山に入り、諸佛坊道禪を師として蓮長といひ、又上總國眞里谷眞如寺の開山密山禪師、東京増上寺の貞譽、衍譽の二僧正等、諸氏の虚空藏菩薩を歸する處深しと傳ふ。さて、清澄山に至るの捷路は、東京灣汽船會社の汽船にて天津に至り、之れより登山するか、又は保田に上陸して八里の路を馬車により、鴨川町を経て天津に至るべし。

妙の浦 天津町より上濃の勝浦に至る途上、國の東端なる小湊の海濱の稱なり。又

鯛の浦とも云ふ。地は天津町の東方約一里、西方に小湊山を負ひ、往昔日蓮上人の鯛獵を禁じたる處なりと傳へ、今尙土人は多く此の禁を守りて漁するものなきが故、大なるものは長さ四五尺、近海の鯛は多く此處に集まる。小湊は日蓮上人出生の地として古來名に高く、毎年十月十二、十三の兩日には宗祖の會式ありて、遠近の男女蟻集して雑沓を極む。

**誕生寺** は小湊山の山麓にあり。前は海後は青き山を負ひて、境内幽靜の趣あり。山門を入れば石墨の上、誕生堂あり。中央なるは祖師堂及び本堂、中に本尊十界の木像を安す。皆運慶の作にして、水戸光圀の寄進にかゝるといふ。祖師堂には日蓮上人の像を置く。法弟寂日坊日家の刻する所、名けて祈蘇生の宗祖といふ。日家は第二世の祖、當時佐久間兵庫頭重貞と共に本寺を創建す。此の地境内の堂宇多く、龍王堂、妙見堂、太田堂、朝師堂、清正堂、鐘樓、方丈、庫裡等散在せり。境内涌く所の誕生水は清澄玉の如く、湧きて止まり濁る事なしといふ。堂後より次第に登れば、山に半



小湊誕生寺

腹に上人の靈屋あり。更に登れば絶巔に物見臺あり。之より上總勝浦の岬は東に起りて當國の忽戸岬に連り、波太、太夫崎等の勝眼中に集る。顧みれば西には清澄山の峰と重疊する彼方、峯岡牧場青々として傾斜を走らすを見る。下方の千葉町より二十里餘、勝山より十里、保田より十里、館山より九里半、勝浦より四里、天津よりは一里餘なり。

**峯岡牧場** は國の中央に群れる山々の總稱にして、大日山、ニツ山、流光山等、就中最も高く、高峯秀嶺の起伏はよく小湊山絶巔の囑望に委すべし。是等連山の間にあるもの即ち峯岡牧場なり。

廣さ東西四里、南北一里に及び、古來著名なる牧馬場なり。



小湊以西 山基村大字下小原に不動の瀧なり。地は小字安鞍骨といふ所にして、加茂川の上流に當れり。瀑の高さ凡そ五丈、幅四尺許り、半島の森村、色鮮明なるが中に清澄の素絹岩頭にかゝる。又脱俗の地たるに足れり。大山村大字奈良林の山中に釜ヶ崎と稱する地あり。傳ふる所によれば、古へ源頼朝が使用したりといふ釜あるが故に此の名ありと。所在の近傍に足跡の石といふものあり。藤九郎盛長足跡の石なりといふ。又同村平塚に、大山、高倉の兩社あり。共に國內著名の神社にして又春夏の眺望に富む。

## 上總國

上總國は房總半島の北部を成し、東は九十九里濱を以て太平洋に面し、西は東京灣に臨み、北は下總に接し、南は安房に堺す。東西十四里、南北十五里、面積百四十一方里を有す。市原、長生、山武、君津、夷隅の五郡を置き、千葉縣の管轄に屬す。地勢南に狭く、北に廣く、丘陵重疊し、其主脈は房總兩國の境を北に走り、漸々斜下して、下總の平野に至りて陵夷す。この主脈山脉中に石尊山(三四七米)權現山(二二〇米)萬田野山(一八一米)音信山(一一六米)の諸峯屹立し、其裾は姉ヶ崎の低地をなして東京灣に達す。この山脉に並行して二支脈西に走り、一は三石山(三四〇米)愛宕山(二六〇米)淺間山(二一八米)になりて木更津の低地に終り、一は其西に連亘して有名なる鹿野山(二六九米)の群岡を成す。この中央山脉より岐れて更に南北に支脈を生じ太平洋沿岸の高地を成すものあり。此の支脈を横斷して勝浦より大多喜を経て長南に

至る。千葉街道より石尊及び三石山の谿谷には木更津街道の一路を通ず。河川は中央山脈を分水嶺にして、太平洋に歸するものと東京灣に注ぐものとあり。前者は一の宮川、夷隅川にして、後者は養老川は小櫃川及び小糸川これなり。一の宮川は川口に瀉湖をつくれるを以て、地理學上頗る著名なり。また此の國の太平洋海岸は陸地陥落の最も著しき例證を有する地方にして、前原村海岸の如きは、其の海域年々陸地に進み、家屋市街の海に瀕するもの數年ならずして、これを他に移さざるを得ざるの場合少しとせず。又陸地隆起の例も少なからず。九十九里平地が上古瀕海たりしことも明かなる事實なり。國中最も豊饒なる地は長生山武兩郡の平野地方にして、市原君津二郡これに次ぐ。通常國を東西兩部に分ち、東京灣に瀕する地方を西上總といひ、太平洋に面せる地方を東上總と稱す。而して大東岬以北なる平滑なる沙濱は九十九里濱と稱し、鱈漁の地として世上に知らる。房總鐵道線路は銚子街道に並び、横芝成東の二驛あり。これより南に東金町、大網町あり。之れより南に茂原、一宮の二邑あり。大多喜町は

海岸地方を離れて丘陵中の一名邑を成す。又、南方に偏して勝浦町あり。東京灣に面せる海岸には木更津町最も繁華なり。

沿革 元來此國は安房及び下總と共に上古總の國と稱せしが、成務天皇の御宇之を印波、下海上、武社、菊間、上海上、馬來田、須惠、伊甚、長狹、安房の四箇に分ち、各々其國造を置き給ひ、後又合して二州となし、其南州を上總とは名け給ひしなり。斯くて元明天皇の御宇養老二年創めて上總の四郡を割いて別に安房の一國を置き、尋いで聖武天皇の御宇天平十二年に及び再び二國を合併し給ひも、孝謙天皇の御宇天平寶字二年更に養老の制に復し安房を分割せられたり。爾後淳和天皇の朝に至りて此國及び常陸上野を以て親王の任國とせさせ給ひしが陽成天皇の御宇國內の夷俘謀叛して、暫らく擾亂を極め、國兵討つて之を平ぐ。源賴朝の再舉を謀るや上總介平廣常一萬餘騎を率ゐて之を援け終に平氏を滅ぼし舊に依つて其任を保ち後罪を得て誅殺せらる。足利氏の末眞里谷氏當國に據りて兵馬の權を専らにせしが里見氏の興るに及びて

義成の爲めに滅ぼされ遂に其有となる。而して里見義頼の時北條氏國の大半を蠶食し其子義康の封を襲ふに至りて豊臣秀吉全く之を削れり。徳川氏の覇基を開くや國內に三藩を設け松平忠政を久留里に(後黒田直純)本多忠勝を大多喜に(後松平正久)内藤家長を佐貫に(後阿部正春)封せしが後ち又保科正貞を飯野に、加納久通を一ノ宮に、水野忠位を鶴牧に、林忠英を請西に封じて七藩となす。王政革新後更に又田沼意尊を小久保に、水野忠敬を菊間に、瀧脇信敬を櫻井に、井上正直を鶴舞に、太田資美を松尾に、米津政敏を大網に徙封し請西を官に没して十二藩となす。既にして皆改めて縣と爲し尋いで悉く之を廢し、新に木更津縣の設置あり。以て全州を管治せしめたりしが幾何ならずして又木更津縣を廢し、現今千葉縣の所轄に隸屬す。

交通 房總鐵道線路は、下總八街驛より日向驛に來り、これより海岸平野に出で、成東町に一驛を置き、これより東北して銚子街道に添ひ、松尾、横芝を経て、再び下總の國に入る。成東町より南に岐れたる一支は未成なれど、同じく海岸平野に添うて南

し、東金町に一驛を置いて大網驛に達する豫定なり。千葉町より來れる鐵道線路は、野田驛より土氣驛を経て、漸次海岸平野に下り、大網驛に至りて前記の支線を併せ、愈々南して、本納、茂原の二驛を經、岩沼驛より一の宮驛に達し、これより漸く海岸に近く、大東、長者町を經て大原驛に達す。大多喜町は大東驛より西に山路四里を隔て、勝浦町は大原驛より南に海岸路五里を隔つ。以上は東上總地方の主要交通路たり。東京灣に臨める方面は鐵路未だ開けず。木更津東京間の汽船ありて、僅かに其缺を補ふのみ。八幡町より木更津に至る街道、八幡町より大多喜に至る街道は良好にして共に車を通ず。

産業 米麥大豆等の産額は敢て他地方に譲らず。林業は鹿野山、魚涙山共に松杉を出し、夷隅郡筒森、大多喜城山の官林は杉松の巨木多きを以て著名なり。水産は太平洋海岸最もこれに富み。鮭、鰻、蟹、鯉等多額の漁獲物あり。勝浦町には水産試験所ありて、大に水産業を奨励せり。水産製造物には乾鮑、乾鰻、田作、鯉節等を産す。



はる)及び脇士の阿難、迦葉二像、又同じき人の作なる四天王の像を安ず。運慶の嘗て鎌倉に在りし時、龍宮に納めんとして流したるもの、當國山武郡の海濱四天寄に漂著したるを、納めたるものなりと傳ふ。寺に、荻生祖徠が自筆に係る縁起一卷あり。寺寶の中に數ふ。

光明寺 南郷村大字富田に在り、大同元年八月慈覺の開基せし古刹にして天台宗に屬し比叡山延曆寺の末派なり。本尊の阿彌陀如來は慈覺大師の手刻にかゝり、又大師の像をも安ず。寺寶頗る多く、就中佛畫什器等には美術史家の好材料なるべきもの多し。堂宇の状態今は甚だしく廢頽したると雖、往古は堂塔極めて壯麗なりしといふ。同じ村の字横地に圓頓寺あり。眞言宗に屬し、遠く田村將軍東夷征討の舊跡にして、寺は大同四年弘法大師巡錫の際の創建にかゝるといふ。爾來建久の戰亂を経て荒廢百餘年、建治の年、僧長智之を再興し、二十世を経しが再び廢れ、正長元年僧長林なるもの三たび之を營みて今日に至るものなりといふ。千年の古刹の色、歴然として處々にその面影を止めたり。

椎崎城址 日向驛の近傍、日向村大字椎崎の山間にあり。世に椎崎殿と稱し、享祿年間千葉介勝胤の二男三郎勝任の據りし處、今尙その跡を存せり。  
埴谷城址 陸岡村大字埴谷なる妙宣寺の西方なる山上に在り。埴谷豊前守景正の據りし所にして、その鎮守社なりし妙見祠は今尙存す。妙宣寺は日蓮宗に屬し、康安年間豊前守の子大丞左近將監の草創にかゝり、日英を以て開基となす。附近の居民は概ね建具の業に従ひ、世に之を上總戸と稱し、需用多し。  
飯櫃城址 千代田村大字飯櫃の西南なる山上にあり。大平年間山室飛彈守常隆の築く所。城の北隅に妙見臺と稱する所あり。鎮守神妙見宮を祀る所なり。東北には又本城鬼門の鎮護たる四所神社あり。近く稻葉山蓮福寺あり。寺は舊、永和二年、千葉常胤の子胤頼の草創にかゝり、阿彌陀院と號して、下總國香取郡多古里に在りしを、弘治年間山室氏の多古城を攻むる時、之を此に徙したるなりと傳ふ。近く又徳藏寺あり。

下總の高根に在りて多古城主牛尾氏の菩提所なりと。眞弘寺の住職、弘治の戦ひに自ら釋迦佛を負ひ來りて此に一字を創建したるものなりといふ。現在の本尊即ち之にして高さ一尺五寸、佛工定朝の作なりといふ。

芝山二王尊 松尾停車場より之に參詣すべし、地は二川村大字芝山なり。天應山觀音寺と稱し、天台宗に屬す。天應年間の草創にして、天長二年慈覺大師の中興する所、地は高く丘上に位し、森樹深くして幽靜愛すべし。本尊は觀音の像、山門の二王は所謂芝山の二王尊にして毘首羯摩天の作なりといはる。此の像はもと千代田村大字山田の金龍山金光寺に在りしを、弘治年間兵火にかゝりたるを以て此に徙すものなりといふ。寺に巨勢金岡の眞蹟にかゝる阿彌陀三尊の像を藏す。四尺二尺の紺地の絹本に金泥を以て畫かれたるもの、稀有の珍品なり。

横芝驛 驛は銚子街道に衝り、直ちに下總國匝瑳郡に接続す。前記芝山の觀音寺に至るもの多く之を過ぐ。道路平坦、又往復の便多し。

烏喰池 旭、松尾兩村の間に横はり、周圍二里、東西一里、南北凡そ二十町許、中に蘆荻叢生せる泥濘深き大沼なり。沼のめぐりに生ずる蘭草は品質頗る良好にして強きが故、席を作るに適せり。

九十九里濱 下總國飯岡町より南に走りて、上總國大東崎に至る平沙際涯なく連れる濱の總稱にして、その延長十六里餘に亘れり。その九十九里といふは、阪東路（六町一里）によりて算せられたるもの、今の運沼なる矢指神社はその舊趾なり。俗傳によれば源賴朝嘗て此の國に在るの日、自ら海岸の里程を算せんとし、大東崎の北阪東路一里毎に一矢を砂上に立て、九十九、下總國飯岡に至ると。

古賀館趾 公平村大字松之郷の山頂にあり。頂は凡そ數千坪が程平坦なる地をなし、今は悉く畑地となれり。之れ館のありし趾にして、建長元年北條長時當國の守護職となるや、建築せる所にして、久時、守時、相繼いで居り、爾後八十餘年北條氏の滅亡せる正慶二年に至りて廢趾となる。現今は館趾の北方に同夢山願成就寺と號する古刹

あり。境内に古石塔三基の存するあり。恐らく前記三世の墓ならんか。同村宇家の子に

妙宣寺 あり。華藏山と號し、應永二十八年僧日顯の宗を改めて開基する所にして

日蓮宗に屬す。建武年間、大塔宮護良親王讒に遭ひて鎌倉に幽閉せらるゝや、王妃ま

た此地に送らる。當寺の山上にある尼御所の地名はこの館の趾ならんか。妙宣は妃の

諡號、隣村なる姫島は妃の始めて到着したる所なりと傳ふ。

東金町 房總線大網及成東驛の中間にあり。山武郡役所及び警察署所在地にして、

東西一町、南北二十町に亘る市街なるも、人口一萬弱、昔時は邊田方村と稱せしが、

大永年間酒井氏の城邑となりてより今の名に改め、漸く繁華の度を進むるに至れり。

徳川幕府の頃は、家康、秀忠等屢々此地に遊び、假館の設けさへあり。寛文四年之を

小西の正法寺に賜ひ、講堂として今尙存せり。

田間林 東金町の北に接する一村にして、整然たる街衢をなせり。地に上行寺あり。

もと鎌倉の盛なりし頃建立せられたる眞言宗の古刹にして、代々前記古賀城主の菩提所たりしが、正應二年改宗して僧日辨を開基となせり。近く皇産靈神社あり。舊稱大六天社にして、天御中主尊及び高皇産靈尊を祀る。その草創は遠く數百年の昔にあれども、古色蒼然たる大樹老幹の内、壯麗なる社殿之に隱見す。又玉前神社あり。南方一の宮なる一の宮城陥落の時、神官等神器を奉じて下總に走らんとする途上、夜を附近の林中に過さんとせし時、神器の輝くに村民等の知る所となり。爾後こゝに祠を營みて奉祀する所なりと傳ふ。

東金城址 東金町の丘上に在り。通常山を城山と稱し、丘の名の鶴ヶ峰なるを以て又鶴ヶ根城ともいふ。城は東南に絶壁を聳て、西北は谿谷之を繞り、東は東金の市街脚下に迫り、超えて外洋の一碧天に連つて一望に入る。南は長生、市原二郡の連丘波の如く走つて大東の岬に盡く。眺矚甚だ壯大なり。城趾の東北に聳ゆるは三本杉の老幹にして、址を圍る谷間の小池を鳳凰池と稱す。此の山の北麓に





土氣城を築くに際し、鬼門鎮護の爲遷座したるものなりといふ。

土氣 大網町の西方一里許、房總線停車場の所在地にして、街衢は十字形をなしたり。もと故市府の置かれたる所にして、土氣の名は時計の音を訛りたるものとする説なり。往昔酒井氏の土氣城にありて之を管したる頃は、その繁昌四隣に鳴りたりと雖、天正十八年その亡ぶるや、爾後漸く大網町の勢力に壓され來りて、見るに足らざるものとなりたるが如し。

土氣城址 町の東北にあり、背後は山、前面は峻峻なる山脚、谷を繞らし至山の大幹密葉之等を蔽ひて日も又暗し。山上は平地數千坪、之れ本丸の趾にして、今は悉く田畑となれり。酒井定隆は築城の後剃髮して、東金城に入り、嫡子定治をしてこれに據らしむ。天正十八年その子孫康治の時、父子北條氏に屬し、小田原城にありしが、その陥るに及び、終に西軍に降り、之れは淺野彈正の收むる所となれり。城趾の南に善勝寺あり。初め眞言宗に屬せしが、寛正八年三月之を改めて日蓮宗となし、日

泰を開基となす。境内に酒井氏供養塔を建つ。因に酒井氏累世の墳墓は町の字松原の北方にあり。荒蕪三百年人の顧るものなし。土氣停車場より八町許。

本壽寺 土氣の西南に在り。山門より本堂に至る間、路傍二列の櫻樹を植ゑ、悉く數百年の老樹にして、中には往々枯朽せるものあり、酒井氏の植うる所といふ。されば寺に藏せる什寶にも酒井氏の遺物等最も多し。酒井定隆若うして俊才なり。鎌倉に足利成氏の臣なれども、上杉氏の亂に當り、君臣別れて、彼は房總の地に赴かんとし、會ま僧日泰と船を同じうす。定隆大ひに僧の所説に服し、後年上總の一部を領するに至るや、僧舎を外郭に設けて、日泰を聘す。僧の歿後即ち僧舎を改めて寺院となす。之れ當寺の草創なり。

清岸寺瀧 土氣城趾の東麗なる南玉村に一不動堂あり。下總國小金の一月寺に屬する普化宗の清岸寺の殘部之なり。堂の前面綠葉の密生する處一瀑をかく。高さ一丈五尺、直下深淵をなす。清岸寺瀧なり。夏季は里人の來り浴するもの多し。

大岡城址 福岡村字依古島に在り。畠山重康の居城たりしものにして、大永六年東金の城主酒井隆敏之を攻めてぬく事能はず、畠山氏の臣叛きて主君を刺し城遂に陥りたれと、間もなくして廢城となれり。今僅かに礎石の點在するもののみ。

貴船神社 丘山村大字山田に在り。西行法師が山城國貴船の神體を勸請したるものにして、鷓鴣草葦不合尊、豐玉媛及び玉依媛の三座を合祀す。毎歲正月には奉射と稱して一弓を造り、之を本社之神殿に射る。此の式終るや、弦をとりて群衆の中に投じ村人等争ふて之を寸斷し、一歳の護神符となす。因に、村内にある一株の墨染櫻は、勸請の折、法師の同時に山城より移植したるものなりと傳ふ。同村大字小野に小町山あり。一帶の松林中、古松と二山櫻とあり。共に數百年の歲月を語るものにして、中世の移植にかゝるといふ。此の山、美人小野小町が誕生の地なり。故にかく名くと里の翁は信せり。

大和村附近 土氣停車場の東北一里、大和村には訪ぬべき古蹟名刹多し。先づ、法

光寺は村の字田中に在り。長享元年二月酒井越中守定隆の草創にかゝり、僧日泰の開基にして、日蓮宗に屬す。寺記の語る處によれば、當寺第二世の僧日行、嘗て隣村福儀の本福寺に在り。一日當寺に歸らんとして、途上一兒を抱ける瀕死の女に逢ふ。女、僧の袖を引いて暫らく兒を抱かん事を乞ふ。諾して之を抱くに重き事石の如く、氷の如く冷たし。僧即ち一念口に誦經するに、女深くその高德の濟度するものありしを謝し、報うるに一玉を以てす。今之を寺寶とし産の玉と名く。晴雨即ちその清濁を變ずといふ。山號を寶珠山といふ。寺の南一町許にして赤人塚あり。塚は水田の叢樹の中にあり。赤人は上總國山邊郡の人にして、地にその廟ありとは、多くのものに散見する處はれど、今は之なし。廟の廢されて残れる塚か、又は誕生地の紀念として建られたるものか、考證未だ定かならず。又法光寺を東南に距る五町餘なる路傍に小祠なり。社背に一老松の蟠屈して翠傘をなすあり。社は水神にして、松を水神の松と稱す。往昔、北條氏との戦亂に、里見義弘、國府臺に敗れ、東走して此に來り、松下に露臥し



たるが故なり。日本武尊東征の時、相模よりせる海上風浪の爲めに媛を失ひ、哀に堪えず、鹿野山の賊を平げて後當地に來り、媛が遺物を收めて橋を植ゆ。陵の形船に似たり。帆丘、法目(帆理)等の名の残れる所以なり。此の地、本納驛よりするものに、白子神社、蓮福寺、腰當神社、荻生祖徠の母の墓等見るべき物多し。

茂原町 本納驛より汽車にして十五分、陸路なれば一里餘、茂原町に至る。市街は専ら商業地として繁華に、人口六千餘、戸數千二百、長生郡役所を置く。又警察署、縣立農學校、製絲會社等の設備あり。町の東方四五町の間は、菌の産多く、菌狩の候來遊するもの多し。町に郷社八幡神社あり、譽田別命尊を祀る。町名藻原に作る。

茂原停車場より八町許にして

茂原寺 あり。(藻原寺)常在山と號し日蓮宗に屬す。文永四年開祖日蓮、日吉村大字榎本に來り。草庵を結び茂原庵と號して之に居る。現今の題目堂之なり。遠江國主齋藤兼綱、罪ありて三浦泰村に托され、茂原莊に禁錮せらる。時に日蓮上人の榎本に

在るなり。兼綱の一族郎黨改宗して之に歸依し、僧となり農となり、兼綱はその居館を以て寺に充つ。之に茂原寺の創始なり。又大字鷺の巢にも同じく日蓮上人開山の長國山鷺山寺あり。領主小早川左近太夫の祈願にて、文永年間の開基草創にかゝるといふ。日蓮宗八品派の本山なり。

一松神社 一松村大字一松に在り。高皇靈產命、神皇產靈命及び健御名方命を合祀す。壽永年間、木曾義仲滅亡の後、舅なる信州諏訪神社の宮司、罪をおそれて、神器を奉じひそかに當國に遁れ、假殿を營みて、健御名方命を祀りしが、後世社殿の荒廢せるより、村内の第六天社と併せて一松神社と名けたるものなり。

皮部の松 八積村大字宮原なる一小祠の神木なり。大幹全く空洞にして唯樹皮の圓筒をなすによりて、縁青々たるもの、而も形狀さながら潜龍の高く首をもたげたるが如し。

押日の岩洞 二宮本郷村の字國府里及び國府關附近の高丘相連なるの下、東南の崖

下なる岩窟數十の稱なり。更に押日村に至つてその數最も多く、大小無數、その形状は大抵廣く、内に一段高き處ありて、床棚の狀をなせり。國府里、國府關は昔時國府を置きたるの地、之れ等はおもふに太古穴居の趾ならん。

笠森寺 茂原町停車場の西北約三里の處にあり。地は水上村大字笠森、寺號を大悲山といふ。本堂は南面して山嶺の懸崖に臨み、堂の高さ凡そ十五丈、觀音の像を正面にして、左右に賓頭盧尊者、大黒天、不動明王、藥師如來、地藏菩薩の諸像を並列す。東面して二天門あり。二天の像を置き、北面して二王門あり。二王の像を安す。楠光院はその別當にして、外に七個の堂舎あり。天台宗に屬し、傳教大師の開基にして、延暦三年の草創なり。開基草創の後、二百五十年長久元年、叡山の僧覺超之を中興して、現今上總國內屈指の名刹なり。「袖に乞ふ涙の雨にぬれしとて、今日笠森を尋ね來にけり」とは、日蓮上人が未だその宗を開かざる時、當山に參籠七日を費せし折の詠なり。日蓮上人自筆の法華經十卷、阿彌陀經一卷、傳教大師の唐土よりもたらせし錫杖、銅磬、武田兵部大輔寄附の十六善神畫幅、豐臣秀吉及び徳川家康の寄納の證書、之等を寺寶中の重なるものとす。

胎藏寺 長柄山と號し、上長柄村大字長柄山腹にあり。三條天皇の御宇、長和二年の開基にして、建久三年、右大將源賴朝の胎藏曼荼羅一軸を寄附するによりかく名くといふ。境内に上總權介平秀胤夫妻の墓碑あり。

武峰附近 武峰は上長柄村大字六地藏村より聳ゆる高原の連接して西南に立てる高峯にして、山勢甚だ秀麗、絶巔の樹木鬱々たる所一祠あり、武峰神社を稱し、日本武尊を祀る。尊が東夷征討の時、一日之れに登りて遠近を計り軍器を定めたる所と傳ふ。山麓に延命山地藏寺あり。天台宗に屬し、長元元年上總權介秀胤の開基なり。秀胤初め、大柳館を脱して長柄山に居り、愛妾の死を嘆くの餘り、六地藏を建て、その菩提を吊ふ。此の六地藏今尙存せり。今これによりて地を六地藏と稱す。近き舟木の山中には鐘瀧あり。高き凡そ三丈、懸崖岩石のさま恰も釣鐘の如し。直下する飛瀑、幽趣

眞に掬すべきものあり。さて前記大柳館趾は土睦村大字大谷木に在り。あづま鑑には寶治元年上總介平秀胤を上總國一宮の大柳館に誅す、秀胤の亡ぶるや、左馬頭足利正義その趾に居るが如く記せども、又一説には秀胤は、時に遁れて先述長柄山の胎藏寺に死すともいふ。同じ村大字上の郷に

諏訪神社 あり。村社格にして別にその言ふべきものなしと雖、社側なる大樟樹は幹周凡そ十八圍、高さ十丈餘にして枝葉八方を蔽ふて森々日光を洩らさず、蟠踞縦横せる盤根、半ばは化石し、幹は朽腐して全く空洞をなす、内に十人を容るべし。常に行旅の人の足を止めしむ。

一の宮町 茂原町より岩沼驛を經れば、二十三分にして汽車一の宮町に入る。一の宮川は町の北に沿ひて流れ、町の人口は六千、市街の繁昌にして實業の隆盛、人家の稠密して整へる事上總東部に冠たり。町に區裁判所、警察署等の官衙あり。地は又近年海水浴場として名を著すに至れり。茂原町を距る事陸路二里十三町、加納氏の舊治

所たり。さて一の宮川は茂原町の西方に沿ひ、一山麓を繞りて、海陸の低地を流れ、河口亦一潟湖を形成して海に注ぐ。

玉前神社 一の宮停車場を距る西南一里にありて、老樹森々たるが中に石壘をもつて圍めるもの即ち之れ、社殿壯麗にして國內五大社の一たり。官幣中社格にして、玉依比賣命を祀る。或は景行天皇東巡の時の齊祀にかゝるといひ、又は日本書記にあらはれたる、彦火々出見尊及び皇兄火闌降命の争ひ、豊玉媛が潮滿潮涸の二珠玉の故事に、當地釣崎及び大東岬を以て謂ふ所の日向となし、之れを社の創建の縁起となすあり。又は往昔一村翁の靈夢を感じて海濱に至り、徐ろに起る東風の中、海上一明珠を得、之を祀るとなすもあり。異説何れを眞とも想像し難し。唯、毎歲三月十三日の祈年祭及び八月十三日の神輿渡御祭には、賽人の群る事夥しく、就中八月のものは、神輿を釣崎に渡して盛況を極む。兎に角有數の古社たる事に論なし。社地は又觀月の名所として著名なり。

一の宮城址 一の宮町の西部、城山しろやまの上に在り。山上坦々として、今一の古井を殘存せり。もと城中の用水に充てたるものなるべし。城は永祿えいりく天正てんしやうの間、内藤久長及び正木大炊介おほのみすけの據れる所にして、永祿の年、内藤里見兩氏さとみの間に隙けきあるや、重見義頼、萬木まきの城主土岐頼春をして之を攻めしむ。内藤氏遂に糧つくるに及び、之に與あづかれる玉前神社の社士等神器を擁し、闇にまぎれて北門より遁る、城此處に陥る。

高藤山 玉前神社の上、一の宮町の西南凡そ一里、峻峻けんしゆんにして聳然しやうぜんたる巔しやうこの稱呼なり。山高からず、頂に近く層階そうかい數段をなして、本丸、城樓、馬場の跡を示す。廣さ二千六百坪許。一基の大碑を立て、古賀茶溪せんざんの撰文七百餘言を刻す。文久二年舊藩主加納遠江守なうとほくのみのかみの建設けんせつするところなり。城址は上總介廣常ひろつねの築くところ、之れは、夷隅郡殿臺とのだいなる本城に對して、外二三と共に一支城しじやうたりしならむ。

觀明寺 一の宮町にあり。玉崎山たまきざきと號す。天平七年げんやうしち行基菩薩ぎやくはさつの開基にかゝり、天台宗に屬す。古へは堂塔だうたつの各宇壯大を極めたりと雖、今はその面影なし。本尊に行基が

作の阿彌陀如來あみだにょらいを安す。



草にして小茅こがやの如く、冬となれば、莖は枯かれて堅かたき莖根けいこんを砂中に止む。その毛棕しやう欄らんに

大東驛 一の宮驛の次驛なり。九十九里の平沙を抱ける大東岬のある所にして、北方、銚子ちやうしの犬吠岬いんはいさきと相對す。地は大東村、岬はその中原、和泉の間より一里の海中に走れるものにして、暗岩あんがん、巖礁がんせう多く、航海の危険を極むる處なり。之より左に港として打續くは九十九里濱、下總の飯岡岬いひおかはそのはてに、はるか北に明かにその姿を辨すべし。白波弓形をなして沙に打寄する所、汪洋わうやう真に大洋の趣を成せり。岬の近傍一帯の海濱砂中には所謂鐵砂なるものあり。又筆草と稱するものあり。

似て細く軟かに、宛らの筆状をなし、よく字を書すべし。附近は又海水浴場として夏期は可なりの群集をなす。前掲玉前神社の頂にその故事として擧げたる

釣崎 は大東崎に近き東浪見浦にあり。古へ彦火々出見尊が皇兄より借り受けたる釣針を以て釣魚をなしたる所と傳ふ。近く鳴山又は音信山と稱するあり。山腹静かに腰をやすめ、耳をそばたて、聞けば、蕭々たる時雨の森林を過ぐるが如く、潺々たる溪流岩をこゆるが如きものあり。その音のあやしくも又やさしき、さながら大ひなる陸と海との物語りをきくが如し。

東浪見寺 同じく東浪見の西方なる軍荼利山にあり。山は直立十四五丈、峻峻なる風格をそなへ、老幹枝葉を交へ、その下、苔古りたる石階三十餘級ありて華表を入る。左折して行く事敷町、末無川の溪流あり。華表より更に登る事四十級にして太子堂あり。中に聖徳太子の像を安したり。之れより更に百級を登れば、二王門あり。更に十餘級を登りて本堂に達す。中に軍荼利明王を本尊として安置し、外は阿彌陀、觀世音、

勢至の像を置く。四者共に行基菩薩の作なり。絶頂なる堂前より回顧すれば、東方は一碧の海色と連つて、僅かに白帆の水平線に點するあり。静かなる潮脚、平沙に走る、眺望まことに壯なりといふべし。遙かなる大東岬の端、二十間の沖合に黒くかゝれるは鵜島なり。東浪見附近には又飯綱寺、般若寺等の見るべきものあり。

應南町 茂原町の西南二里二十七町、之れより一の宮町に走れる鐵路の西方なる山間にあり。古へ大多喜、勝浦を経て千葉町に通ずる街道の衝に當り、街衢絡驛を極めたるも、鐵道開通以來は次第に衰運のやみ難きものあり。舊時は、本宿、藤持、坂本の三村を併せ武丘村と稱せしが明治の初年、今の名に改む。人口五千を有す。町の北方なる山中に應南城址あり。武田兵部少輔信榮の據りし所、彼は當初甲斐國武田氏に屬したりしが、勝頼の滅亡後、四隣里見氏、北條氏に従はず、獨立して之れに據りたりといふ。されど後終ひに信濃松代の長國寺に通れ、今も尙その寺に影像を藏せり。山の最も高き處に物見臺を殘存す。側に妙見祠あり。當年城内鎮守の跡なるべし。應



南町には又熊野神社の名蹟あり。事解男命、伊弉册命、速玉男命の三座を祀り、郷社格に列す。因に町の名を又長南町に作る。

長福壽寺 天台宗に屬し、房總二國に於ける同宗の擅林なり。寺域三千坪に餘り、本堂の東に大貳の祠あり。二王門には日光法親王の筆にかゝる「大平野山」の四字を掲げたり。門前一橋を架し、三途の橋といふ。寺は延暦十七年傳教大師の創建せしもの寺を東西の二院に分つ。傳教大師が作の阿彌陀如來を本尊とし本堂に安ず。又元三大師自作の像あり。長福壽寺又は畧して長福寺といふ。實は三途河頭極樂東門大平野山閻浮大乘本實成院阿彌陀坊長福壽寺と號すといふ。傳教大師の自筆に係る橋供養の記一卷あり。什寶とす。

應南町附近 豐榮村大字千田に稱念寺あり。唐竺山と號す。淨土宗に屬し、下總國生實の大巖寺の末流にして、本尊として安置せる阿彌陀如來は所謂齒吹如來と稱するものにして、破顔して微笑の相を現はせるものなり。昔、一の宮の一漁夫網によりて

之れを海中に獲、草堂を建て、安置す。後當寺の僧之を聞き乞ふて之を此處に移す。脚底に介殼の附著するものあるを見る。因に、文明年間土氣の城主酒井定隆、日蓮宗に渴仰するの餘り、他宗寺院は多く之を破壊し、その尊像の如きも亦或は土に埋め、或は海中に投じたりといへば、此の尊像の如きは、畢竟するに、此の難に遭ひて、暫らく海底の岩礁に幾多の星霜を過せしものならんか。又隣村五郷村字中善寺に行徳寺あり。當國巨剎中の一にして、天台宗の中本寺格たり。大寶年間上總太郎行徳の創建にかゝり、中世久しく頽廢に委したるを、永正年間義範和尚が中興によりて今日に至るを得たり。

佐坪の大杉附近 佐坪の大杉は西村大字佐坪にある一小社の側にあり。社は譽田別尊を祀る古社、杉は千有餘年を経たる大杉樹、青々たる枝葉、高く聳えて四邊を壓し、一幹にして森林をなすが如し。幹の周圍三丈五尺、行旅の必づ足を止めてその大とその歴史を思はざるなし。同じ村の字報恩寺に眞言宗の巨剎、金剛院あり。本堂に

は長け七尺の地藏菩薩の像、面部のみを残して他は凡て金箔を以て塗沫す。古來面部を塗り、其厨子の戸を閉す事能はずといふ。奇しき迷信の爲めなり。之れより東方一里、東村字地引に永福山妙寛寺あり。嵯峨天皇の弘仁年間の草創にして、慈覺大師を以て開基となす。本尊は同大師の作にかゝる娑婆施無畏阿彌陀如來なり。地はもと應南の莊八板(又は八坂)なり。同じ村の字葛田の一往還より少し入りたる所に小岡ありて、上に一古松の周圍一丈五尺なるものあり。偃蹇たる枝風、四垂して翠傘をかざすに似たり。此の松發育狀の異狀にてもあるか、人若し一小枝を手にして之を振れば、巨漢の如き老樹は、翁の幼兒に於けるが如きさまにて、見る／＼揺々たる震動をなす又奇樹といふに足れり。

**妙樂寺** 夷隅郡の北端に属する古澤村大字妙樂寺に在り。仁明天皇の御宇慈覺大師唐土より歸朝し、嘉祥二年當國に入つて、當寺を開山す。降つて寛永五年秀海和尚之を中興す。天台宗に属す、開創の當時は、寺記によれば、方十餘丈の淨殿を營みて中

に、大日如來が丈六の座像、不動、毘沙門の三像を大師自ら刻して、安置したり。その大日如來は今もその後堂にあり。別に二王の像は面貌といはず、四肢と云はず委く腐蝕して、眞に草創當時の遺物たるを見る。これより稍南して千町村大字熊實に、禪刹**大興寺**あり。文享三年正月、夢窓國師、上總の千町莊に退耕庵を營み、正中元年に至る。之れ國師年譜の告ぐる所、今當時の背後にある石窟はその舊蹟なり。

**長者町** 大東驛の次驛、汽車は十分に足らずして達す。町は銚子街道の一驛にして。夷隅郡の東北隅に位す。夷隅川の河口は近く、従つて商業繁昌に、人家稠密して人口五千を有す、江場土、三門、井澤、東小高の諸村と共に旭町の一部をなす。郡内有數の都邑にして、又その海岸は海水浴に適するが故、繁華日に著しく、銀行會社の設備も充分なり。町に長者町天神宮あり。

**海雄寺** 長者町の西方里餘國吉村萬木にあり。所在甚だ閑寂にして幽靜なり。明應年間、照室慧鑑禪師の開山にかゝり、曹洞宗に属す。當初郡内の龜城にありて龜岳山

と號し、天正の初年此處に移りて機岳山と改む。代々土岐氏の菩提所にして、當時土岐氏の世には隆盛を極めたれど、今は見るかげもなき小寺となれり。唯、土岐氏の靈牌、軍旗、佩刀、看經佛等を什寶として藏す。近く

清水寺 あり。音羽山と號し、遠く田村將軍の造營にかゝり、花山院の御宇、阪東三十二番の札所と定められたり。後、安徳天皇の壽永年間、内野郷の人中島政重、本堂及觀音堂を再建す。天年明間火災の爲めに委く烏有に歸し、寶永の頃に建立せられたるもの即現在の堂塔なり。桓武帝の御宇傳教大師自ら十一面觀世音を彫刻して安じ、後慈覺大師又自ら千手觀音を作る。此の二者現存せり。寺に近き山中に

萬木城址 あり。又萬騎城といふ。地は三面に夷隈川を環らし、東に嘉谷、細尾、鴨根の峰峽を控へ、之に空穗坂、洞坂、癸坂の險路をわたす。天然の要害にして又自然の風色に富み。天正年間土岐頼春は之に據りて、屢里見、武田の諸軍を苦しめたり。城址の近傍に妙見臺、倉台、弓矢台等の名を存せり

國吉町 長者町驛より西南二里餘、夷隈川の北岸に位し、荊谷町の一部なり。人口三千五百餘を有す。長者町の次驛なる三門驛よりせば一里半許なり。荊谷の地は、天正年間大多喜の城主正木氏と萬木城主土岐氏との相戦ひたる處、寛文延寶頃の開墾までは一望荒涼たる草野なりしなり。町の西南方に天王の祠あり。中に、一川を隔て、松林之を圍る。獅子天王なり。傳へ言ふ、之れ安閑天皇の四妃の一、春日皇后の遺跡なりと。町に近き字彌正に

瀧口明神社 あり。頼光の臣渡邊の綱を祀る。天祿三年、綱は源頼光の上總守に任せらるゝに従ひて來る、と太平記には見ゆ。その瀧口と稱するは、綱の嘗て瀧口の役を拜したるによるなるべし。俗説のまゝを録す。因に附近には綱の後裔なりとて、渡邊の姓を冒すもの多し。

千光寺 東村大字長志に在り。嘉曆四年の創建にして、天台宗なり。往時は聲名甚だ昂りたりと雖、幕政の改革ありて後、天明四年の火災にかゝりてより今に至るまで、

寂寥甚だし。不動尊を安置す。寺に悪七兵衛景清の鞍骨なるものを藏したれども、之れ亦火災の爲めに烏有に歸す。因に彼は、まことは此の村の千光寺谷に生れて千光丸と呼ばはりたりといふ。又元弘年間相模入道高時の妾、剃髮して此處に隱遁すと、傳へて、今入道島の名を存するものなり。此の寺の近傍、字を山田といふ處に佛刹天徳寺あり。その後山一箇の岩窟を有す、洞口に幅一尺餘の石を埋む、半ば露出せる處に、草體南無阿の三字を見る。傳へて弘法大師の眞蹟なりといふ。岩窟を天徳寺の岩窟と稱す。之れに近く陣場臺と稱する小丘あり。上總介廣常が兵を會したる所或は、天正の頃里見氏の軍、此處より萬木城の動靜を窺ひたりといふ。又村の字大門に、大日如来の鐵の頭部をのみ置ける大日堂あり。鎌倉幕府の頃此處に移されたる巨利の址なるべしといふ。

北辰寺 同じき村同じき字にあり。天台宗に屬し、下野國世良田の長樂寺の末派なり。上總介廣常の部下櫻井氏の草創なり。寺に妙見の古像一體を藏す。寺苑の中に櫻

井と稱する井あり。寺の西北に高井あり。寺の東南に筒井あり。寺に近く細流ありて、一橋を架す。尾株橋といふ。廣常が乘馬の此橋上に於てその尾根を傷けたるに因るといふ。橋に近く小洞ありて、その馬を祀る。

新田野八幡社 同じき村字鶴島に在り。又雄島、生島に作る。古へは全く水沼を以て地の圍繞せられたるが故なりと。譽田別尊を祀り、寛仁四年の草創、現今の社殿は貞享二年、領主榊原氏の營む所なり。維新前までは、神宮寺といへる別當ありしかど、後、分れて村社となれり。境内に森々として老杉の晝尙暗く葉枝を連ねたるは、里見氏が萬木城を攻むるの時、戦勝祈願の報謝として安房より移苗したるものなりといふ。

大原町 上總國の東海岸に瀕し、人口約八千を有し、現在、房總線の終驛たり。町は相應の繁昌にして、銀行會社の設備も稍ひらけたり。

小濱海水浴場 大原停車場より約八丁にして八幡山の麓に達す。山は中魚落郷の字

小濱の南に聳てるものにして、山裾は直ちに海波の中に收まる。山の頂より南望すれば、汪洋たる太平洋の波は紺碧にして無邊際、而も波は眼下直ちに白沫を飛ばして靉々、大東岬は黒く東北の海に臨み、北は百尋の斷崖巖々として峙ち、海波之に激して狂す。壯觀比なし。山嶺に一祠あり。小濱八幡宮といふ。周邊杉の怪奇なるを以て圍み、正面、岩石をうがちて小徑の石階數十を通せり。之れ往年の八幡山城趾、天正年間鎗田美濃守の築きしところなり。而して山の南面は最も峻峻、崖頭に立ちよく之を臨むべからず。山麓を海水浴場に充てたり。

紫銅橋 布施村大字雑色にあり。本城島と稱する田圃の地、小流之を繞り、架するに獨木橋を以てす。地は上總介廣常の子の館趾にして、橋のある所は即ち舊時の正門、流れは當時の濠渠なりといふ。附近まゝ古瓦類を發見する事あり。質堅緻にして硯石となるといふ。橋に近くその菩提所なりといふ醫王山金光寺あり。天台宗に屬する小寺にして、側なる山裾に洞穴ありて、中に廣常の塔といふものあり。五輪にして無字

なり。境内に狐塚及び文塚あり。前者は鎌倉幕府の頃狐をまつりたる所にして、後者は廣常が所領を沒收せらるゝ時、その文書を埋めたる所なりといへり。

廣常の遺蹟 布施村はその最も多き處、字布施には殿臺と稱して、背後に山前に流を帯びたる所にして。平坦にして高原の體をなす。近き路傍に二本杉なるものあり。之又彼が墓上に植えられたるものか。又上下布施の間平坦にして、三層塔一基あり、廣常追福の塔なるべし。

高塚山 同じき村字硯にあり。山は頂に至つて甚だ峻峻、之れに一株の老杉あり。此の山、往昔は牧場にして、治承年中梶原景季が宇治川先登を争ひたる名馬磨墨は此の牧場より産したるものなりと傳ふ。山の半腹に池あり。當時の飲用水なりといふ。

最明寺 御宿村字須賀に在り。弘仁十三年傳教大師の草創せし所、天文五年尊海和尚の中興にかゝり、今日に至る。往昔、北條時頼が諸國行脚の際、之れに宿して國風一首を残す。御宿の名ある所以なり。寺後の山、頂に一株の老松あり。東海を航する

船の目標とする所なり。寺の舊名は西明寺、時頼が號最明を採りて今の名に改む。

**釋迦谷寺** 東海村大字釋迦谷に在り。天台宗の古刹にして、本尊を釋迦如來とし、不動明王、毘沙門天を以て勝士となす。刻手凡ならず。外に二王の古像を安置す。之れ又非凡の彫刻にして、首體一木を用ゐたり。

**勝浦町** 大原町よりは陸路四里、人力車を通ず。又馬車の往復もあり。町は上總國東海岸の南部、勝浦岬の海に斗出するを以て、勝浦灣を形成し、天然の良港となせり。人口六千餘を有し、東西二町南北六町の市街に商家と漁戸と櫛比して、銀行會社の設備を相應に完全し、近海又鰻漁最も盛大に、沿海の海産物は凡て此の港に一度は集り來るが故に、水産試験場の設備さへあり。郡内第一の盛況を呈す。巖岩の磊塊たる東南の勝浦岬より灣内一帯の海濱の西に盡くる所、丘岡浪に洗はれて起伏し、暮色一度至れば、沖合遙かに波暗く動搖する所、漁火遠近に星散して浮ぶ、光景畫の如し。沿海に海水浴をとる者の必ず見舞ふべき風景なり。此の一帯の海濱を櫛濱と稱へ、



内に申濱村あり。町は又東京灣汽船の、東京、久慈間往復の寄港地なれば之れに至る

には舟行も亦便なりとす。勝浦町の南方、大字濱勝浦には郷社格の

**遠見岬神社** あり。大苦邊尊、大國主命、清大

神、久志大神を合祀す。昔は富大明神といひしが、

近世今の名に改めたり。社は西に勝浦灣を眺め、南方は茫々たる大洋を一望に入れ、幽靜なる渚の宮の松の梢に、浪の聲、盛んなる舟歌通ひて、人をして世さかれる快き生活に歸るの思あらしむ。

**巖臺** 磯をつらきなる浪花村大字岩和田の濱邊に高き丘の名なり。のぼれば眺め殊に遙かにして、

總房を、さては東南の海灣を波の色、風の聲、眼中全く半島の明鮮なる色彩を以て

蔽はるゝに至る。漁人は曰ふ、秋の日は空高く晴れ渡りて、波は軽く心地よげに丘の麓に白砂の肌をひたす時、水や空なる東南の一線に、青き影の危くも目に入るは、それぞ人住ふ吾が八丈が島なりと。

吾妻神社 同じき村の字小池に在り。雑草社殿を埋めて、祀らるゝ神と、詣づる人と全く今はなきが如し、東夷征討の時、日本武尊の愛妃橘媛をいたみて之に祀りたるやと想像せらるゝのみ。

興津城址 昔の興津村は今清海村に屬せり。村は夷隅郡の南端、海に臨みて、船舶を泊すべきが程の小灣を形成せり。その要害と稱する處は、古へ佐久間氏の據りし所なりと傳ふ。城址の南に當りて、斷崖削れるが如きの下、一巨竇を通せり。長さ八十餘間、廣さ方六尺、之を過ぐれば巖石のさまさまなるが東西二方のみを通じて圍繞せり。遙かなる海上に孤島の浮ぶ見ゆ、孤島のは白色くして玲瓏、海色之に映して、應映眼もさむる許なり。清海村の字鴉原の往還に神體石と稱するものあり。その面坦々

として研けるが如し、石底又二個の石を入る。天然の卓子なり。

中倉鑛泉 總野村大字中倉なる溪間の一岸より涌く。皮膚又は打撲症に効あり、多く村民の用に供せらる。近き佐野に、飛瀑三條あり、最も高きもの三丈餘、三瀑集まつて一溪流をなし、淵をなせる所に、四つの浮石あり。水面より出づる事各々一寸、水の時に増減ありと雖、巨石は常に此の一寸に違はずといふ。

御筒神社 老川村大字筒森に鎮座す。小祠にして安産の神として來賽するもの多し。口碑に曰く、むかし、大友皇子の率ゆる軍、遣水山なる遣水城に敗るゝ時、懷妊の皇妃は獨り遁れて筒森に來り、遂に分娩する事能はずして死せり。死する時、吾魂永く此處に止まりて、産するもの、難を救はんといへりきと。

石神の瀧 總元村大字石神にあり。此のあたり一方は夷隅川の長流が十餘里の間、水源に近くして、激流岩山を越えて集り來たる所、此處に送つて瀑をなす。直下する水、淵をなし、碧一色、圓淵の深潭となる。鱒、鯉、鮭魚、嘉魚、蛇頭魚等多く漁るべ

し。村民之を淵魚と稱し、暴雨の晴るゝを待つて之を漁る。石神附近外七村は、石といふもの絶無にして、石神の路傍に唯一あるのみ、巨石神の如くに崇はる。

大多喜町 夷隅川は上總國の南境なる清澄山つゞきの山間に發し、北して大多喜町に沿ひ更に右折して長者町附近の海に入る。大多喜町の地未だ全く峽間の地なり。僅かに開けたる地を以て、人口凡そ五千を容る。地僻にして交通の便乏しく、繁華の度遠く勝浦町に及ばず。夷隅郡役所、警察署、中學校等ありて自ら郡の中心たるに足る。夷隅川には鯉魚を産す。鱗色紫にして形狀頗る美に、味亦他産に異なり。尋常に非ずといふ。古へより名物の一となせり。市街の西部に

大多喜城址 あり。鎌倉將軍頼經の再築する所にして、戰國の世には正木大膳之に據り、根小屋と稱す。天正の末本多忠勝の居る事十一年。慶長五年その子出雲守五萬石を食みて之れを治所となす。承應の頃には阿部因幡守、次いで阿部伊豫守之を領す、幕府直轄の數年を経て、元祿十五年稻垣但馬守の封地となり、維新後暫らく大河内正

久の管する所となれり。地は山を負ひ川を繞らし、埴は深く、崖に富み、要害を極めたり。巨井あり。直徑凡そ二丈、八角の井桁を附け、深さ測るべからずといふ。

官玄寺 大多喜町の西端に在り。淨土宗に屬す。世々本多氏の菩提所なりしが故に、寺には什寶として、忠勝軍裝の像とて四尺二尺の畫あり。その他代々の文書を多く藏せり。

圓照寺 町の圓照寺谷といふ所にありて、天目山と號す。禪宗の古刹にして臨濟派に屬す。源賴朝の創建にかゝり、開山を大光禪師となす。正木大膳はもと性勇猛の武士、里見氏に叛きて兵を擧げんとするの時、酔ふて臥したるに乘じ、家臣之を刺して里見氏に降る。寺に正木大膳の薙刀あり。之れ里見義頼の子彌九郎が、大膳の勇を慕ひて、自ら正木大膳を稱し、天正十八里見氏の年萬木城を攻むる時、此の大薙刀をふつて單身先登したるものなりといふ。

舟子八幡神社 町の東方なる大字舟子にあり。昔正木大膳の守護神たりしもの、譽



田別尊をまつる。境は幽雅の趣を極め、巨幹の森々として日光をさへざるものあり。古來十二郷の總社たりし所なれど、今は舟子森宮二村のうぶすなたるのみ。

湯倉温泉 西畑村大字湯倉に在り。大多喜町よりせば二里半、勝浦よりせば四里。

地は夷隅川の一水源たる湯倉川の迂餘曲折して山谷の間を流る、ほとりにあり。白崖といひて、湯倉川の對岸に聳ゆる四十丈餘の白色なせる懸崖の下岩石壘をたる中より、温泉は涌出す。冷泉にしてコロルナトリウム、炭酸鹽類を含み、ルウマチス、その他關節の病患、及び痛風性を治す。之れ神仙のもたらししものなりといはれたり。地の米原といふ故ならんか。恐らく遠き昔外國米の移殖さるゝもの、殘存するなるべし。

○西上總地方 市原、君津兩郡の地にして、東京灣に面せる地方即ち是なり。市原郡は始め東西にひろく、漸次南北に長く、楔形をなして夷隅君津兩郡の間に突入せり。郡の頸部八幡町より郡の中央を縦貫して大多喜町に達する道路は大抵養老川の谷に添

ひて南走し、牛久を経て鶴舞町に達し、これより東に長南街道を分ち、本路は夷隅郡に入りて大多喜町に至る。海岸路は五井、姉ヶ崎を経て君津郡に入り、小櫃川を渡りて、木更津町に達し、これより一は富津に至り、一は、佐貫町、湊町より安房の國境金谷に至る。又姉ヶ崎より岐れて中ころ小櫃川の谷に添ひて丘陵中の一邑市場に至るの道路あり。市原郡役所は八幡町に、君津郡役所は木更津町にあり。東京地方への交通は、木更津靈岸島間の汽船あり。また近年千葉より木更津に汽車を敷設するの計畫あり。

八幡町 房總線は千葉驛を發して本千葉驛を經、蘇我驛に至る。八幡町は之より大約一里半、道路平坦人車を通すべし。町は下總國千葉町を距る二里十二町上下總の國境に近く、西面東京灣に臨める市原郡の名色なり。五所、金杉、山本、君塚の諸字を併せて町制をしきたり。市街は南北に延びて十町、東西僅かに二町、人口四千五百を有す。地に市原郡役所あり。瀕海水淺くして自由に船舶を泊するに足らずと雖、商

業は相應の繁昌をなせり。國道は千葉町より分れて海岸に沿ひ、當町、五井、木更津、姉崎の諸町を経て南方湊町に到る。その間、養老川、小櫃川の流れあり。鐵道房總線の豫定線は蘇我より分岐して木更津に至る。

東京灣汽船航路 は内房航路として、金谷、保田、勝山、富浦、船形、那古、北條、館山、外房航路として、鴨川、天津、小湊、興津、松部、勝浦、之れに、木更津、櫻井間及び八幡、濱野、千葉間の二線あり。

飯香岡八幡 八幡町の字飯香岡に在り。譽田別尊、息長足姫尊、玉依比賣尊の三座を本殿に祀り、足仲彦尊、日本武尊、經津主命、住吉大神、天穗日命、事代主命の六座を相殿に祀る、境域一萬二千餘坪、内に本殿、拜殿、幣殿等相連り、屋根は皆銅板を以て葺く。他に攝社五社、末社二十九社、皆それらの壯麗をつくせり。本殿の左右に大公孫樹二株あり。左なるは幹の周圍五間に餘り、往昔勅使季滿の手植にかゝるもの、樹に一碑を建て、季滿卿の國風一首を刻せり。「君がため今日植えそへし銀杏木

に幾世へぬとも神やどるらむ」とあり。樹を神木となし、境内古松老杉の深く圍繞するあり。櫻樹年老りて之に點綴し、就中西隅なる松樹にまとへるツルマサキは稀有に發育したるものと見らる。又神深一條の樹間にかゝるなり。名けて清見の瀧といふ。扱て本社正面は西に向ひて華表の下、近く東京灣の靜波に臨み、右には筑波のむらさき、左には富士の白雪、觀望甚だ多趣なり。而して裏の華表は直ちに八幡の町に接して、賽人常に往返す。社は天武天皇の白鳳四年三月十五日勅使從三位季滿及び奉幣使從四位時春等、奉敕して東に下り、勸請せし所、今は縣社格に列せらる。毎歲三月八月の十五日に例祭を催し、三月には十二神樂の神事、八月には、奉幣、渡御の事あり、大祭にして町内の雜選郡中に比を見ずといふ。

高瀧神社 市原村大字加茂に在り。郷社にして、祭神は瓊々杵尊、玉依媛命、及び別雷命の三座なり。夷隅郡粟又村の高瀧より、中古こゝに遷座したるもの貞觀十年九月從五位下を授げらる。近き總社に

●●●●●  
國分寺跡 あり。聖武天皇の天平年間、敕ありて一國一個の國分寺を建つ。之れその一なり。往古は堂塔の美をつくしたる由なれど、中世より廢頽甚だしく、今は只寺の名のみを存し、開基、寺格、宗旨等全く分別するに由なし。時として、土中に古瓦の珍なるものを獲る事あり。

八幡町より南して、養老川の谷を溯れば、五里にして牛久の一邑あり。更に一里にして鶴舞町あり。此間の勝地記すべきこと少なからず。

●●●●●  
鶴舞町 町は上總國の殆ど中央に在りて、一の宮、長南、長柄地方を圍繞せる小山脈の西面養老谷に沿ひたる處にあり。地は市原郡に屬し、鶴舞町の字鶴舞村即ち所謂鶴舞町なり。人口三千五百、戸數五百餘、町は東西に街道に沿ふて二十五町、南北八町に亘る。もと桐木臺と稱する高原なりしが、明治の初年井上正直、此の地に封を受け、暫らくの間、隆盛を呈せしかど、廢藩後は漸く衰頽に傾き、大原線開通以後は、唯、大原町勝浦町附近より直ちに市原郡の諸村に赴かんとするもの、みの街路と

なりて、繁華のさま到底往年の面影を存せず。されど、未だ尙一名邑たるを失はず。之れより西方木更津へ八里、西北八幡町へ五里餘、町を距る西北十八町餘にして同郡内田村大字石川に龍溪寺あり。曹洞宗に屬し、本尊は白衣觀音にして賽者多し。池和田に温泉あり。近郡又は村々より來りて浴をとるもの多く、夏季は一層の混雜をなす。浴舎客舎共に眺囑に富み、湯倉川の釣魚又一清興なり。

●●●●●  
諏訪神社 市原郡内田村大字原田に在り。式内の社格郷社にして近村一帶の生土神たり。建御名之命を本殿に祀り、八坂刀賣命を相殿に祀る

●●●●●  
安房の森 同郡里見村大字飯給山の麓にあり。所謂大友皇子の隨臣安房大納言の遺蹟は附近田圃の中なる山林なりといふ。その山上に一祠ありて、不通峰白山大權現といふ。古幹老樹翁鬱として全山を包み。聞として響なし。黄神の宮、祝子の宮、酢の宮の三座を祀る。凡て大友皇子の子なり。近く、禪刹一字ありて、亦晝も尙暗き森樹の中にある。最勝山眞高寺と稱す。享徳二年僧存高の開山にかゝるといふ。地の飯

給といふは、大友皇子嘗て三子を具して此の地を過ぐる時、屢々農民の供する飯によりて日を過ぐしたりといふに起る。

大通寺 同郡平三村字米原に在り。應永七年二月古心といへる僧の開山する所にして、今禪宗に屬せり。寺に培植する米種、その粒大、尋常のものにあらず。城主、多賀豊後守の草創にかゝる。十一宇の堂塔、幽靜なる森樹の中に散在す。毎歲八月十六日には、近村二十餘箇寺の僧集りて、此處に大施餓鬼を施行す。當日は遠近の信徒蟻集して、難踏を極むといふ。多賀豊後守の城趾は、

池和城趾 といひて、同じき町の字池和田にあり。多賀氏はもと里見氏の臣、永祿九年、北條氏の來り攻むるや、城主多賀氏はその子藏人と之を防ぎて遂に支へず、城に火を放ちて自刃して果つ。城地の田尾川に瀕するあたり今尙往々にして、焦米を土中に見出すものあり。城趾に近く音信山光明寺あり。凡そ千年の古刹にして天台宗に屬す。永觀元年僧覺運の草創にかゝる。天平年間諸國に令して金光明寺、及び法華寺

を作らしむと、續日本紀の傳ふるもの、一か。

音信山 高瀧村大字山口より、ゆるき山路をこえて行くは、即ち望陀郡眞里谷に出づる山道なり。山道の中、その最も高き峰嶺を音信山となす。その山上を茅積場と稱し、四顧全く展けて、蒼海の上遙かに、富嶽函嶺を眺むべし、又山は古來杜鵑の名所として、歌にもよまれ、文にも綴られたり。山路の中少しく入りたる所に、泰長山光嚴寺あり。地は同じ村の字大和田、寺は眞言宗に屬する古刹にして、建武二年僧興教の開基末寺二十四を有し、近村に冠たる隆昌を呈するのみならず、當國內四ヶ寺の一に數へられたり。

橘神社 鶴舞町の西方半里、養老川の東にある山上にあり、地は市原郡明治村大字皆吉の志保井、山を蓬萊山といふ。阪路四町許にして一寺あり。禪宗に屬し、蓬萊山橘禪寺と稱す。更に山頂に至れば、橘神社あり、東征の途上に失ひたる愛妃橘媛を、日本武尊のまつる所なり。祠の前に老松一株ありて、その形狀大なる榕を据ゑたるが如く

低き梢こぎさへより四方に廣がれる枝葉は優に百坪の地を覆へり。橘禪寺は即ち當社の別當たしものにして、行基僧正が光明皇后の勅を奉じて草創する所、自ら薬師如來の像を刻して、之を本堂に安置したり。されど、中世の戦亂相亞ぎてより、爾後荒蕪を重ね、唯堂宇の僧舎を存するのみ。今、本堂に安置せる二天の像は連慶の作なりといふ。長八尺、丹青の痕なくして古朴、よく名工の手跡を見るに足るものなり。

**馬立の古窟** 戸田村大字馬立の山門にあり。洞口せまけれども、内の廣さはよく數坪をしくべく、而も床棚又は窠の形を存す。無論上古穴居の跡なり。明治の初年村人、内に入りて土器一個を獲たり。天平以前のものに屬し形色又珍となすに足れり。同じき村の字風戸村に、日光寺あり。聖武天皇の御宇光明皇后の草創はかゝると傳ふ。寺内に觀音の像をなせる一土偶あり。光明皇后、嘗て安産守護の爲、天竺補陀落山の上を採りて造らしめたるものなりといふ。

**平將門の遺蹟** 市東村大字に奈良といふ所あり。天慶年間、常將門自ら稱して新皇となし、都を下總に設けし時、之れを以て南都となせしもの、之れより一里を距て、又た古都邊と稱する地あり。その山中に、天慶年間に建てられたる石佛ありて、草叢の中に埋まり、風雨幾星霜を経たるもかの、青苔全體を蔽ひたり。基に下總高岡齋の領主井上氏の修理にかゝる、五尺許の石を据ゑ、面に天慶二年所建云々の字を刻す。

更に再び海岸路に戻れば、

**五井町** 養老川の河口に位す。河は延長二十二里、幅また二町餘、上總國內の一大河なり。町は北方八幡町より一里餘、人口七千を有する上總國西海岸の名邑なり。市街の商業盛んにして、人家亦稠密なれども、海濱水淺くして巨船を入るゝに足らず。町より養老川を渡りて鳥野に到れば縣社格の古社

**烏穴神社** あり。地は東海村に屬し、社は景行天皇の四十年十一月、日本武尊の親祭せる所、祭神は仍長津彦命なり。命は後出姉崎神社の祭神級長戸邊命の陽神に當れ

り。社の側に老松一株なり。根に一穴ありて、風の催さんとする時は、中に雲を生ずといふ。

姉ヶ崎町 五井町を距る南方二里、東京灣に臨み、人口五千餘を有す。市街頗る繁華にして、旅館料理店又は銀行會社の類も稍整ひたり。舊稱は鶴牧、水野氏の舊藩ありし所なり。町に妙經寺あり。日蓮宗にして、寛正元年僧日曉の開山に係り、一乗山と號す。又町の東五町許、同村の字明神ヶ岡の上に

姉ヶ崎神社 あり。古來式内の縣社格にして、風神の級長戸邊命、及び之れに天兒屋根命、大雀命及日本武尊を合祀す。景行天皇の四十年日本武尊が東征の時、風神を祀りし所なり。社地は數百級の石階を通じて高く、老杉森々たるの中に隠れ、殿舎十棟、皆宏壯を極めたり。傳説に曰く、上古の世級長戸邊命の陽神級長津彦命一日遠く出で、歸る事遅し。女神煩悶する事甚しく、後來全く松を忌みたりと。社域に一松樹なき所以なり。而も附近村民は今に新年と雖も門松を祝ふ事なく、又松樹を以て薪とな

す事なし。松といひ待つといふが故なり。境内に女夫杉、縁結の木等あり。扱て丘上の眺望は、富士筑波、紫白の姿を朝夕に染め、西北は波靜かなる袖ヶ浦に、鷗か白帆の點々たるを見る。毎歲七月七日及び十月二十日を以て例祭を行ふ。七月には三基の神輿、町内を渡御し、十日に至り海濱の船中に小憩して還る。又十月には午より流鏑馬の神事を行ふ。騎手二人を撰び、一は赤地錦、一は青地錦の陣羽織を著けて騎射をなす。往昔源賴朝が、本社前に於て軍馬を調べたるの例に従ふなりといふ。

推津古城跡 同村大字推津にあり。姉ヶ崎町の南に當り、間に小流を隔つ。天文年間眞里谷信政の據る所なり。西面は海なんども、三方の山險ならず、要害とはいひ難し。笠上山 姉ヶ崎町の南方、長浦村大字大宿及久保田の二字に跨る、小嶺なり。山勢甚だ峭拔、頂なる觀音堂の側に立ちて、見はらす時は、海を超えて武相の諸山悉く遠き地平線に連なる。雲の如く繪の如し。久保田に下る山麓に古城の跡あり。何人の住ひしや明らかならず、唯當國里見氏等とも屢々兵を交へたるやに見ゆ。



賃金は上等四十五錢、下等三十五錢なり。地の木更津とよぶは、かの日本武尊、東征の際に愛妃橘媛を海神の爲めに失ひてより、かなしみに堪へず、海沙をさまよひて、數日その行方を慕ひ、去るに忍びざるものありしより、後人之を「君不去」と名けしといふ。町は安房西街道の貫く處、又南方なる貞元を経て佐貫町に達する路の中心を成せり。此行程四里餘。村の南方なる貝淵には舊陣屋の趾あり。文政九年林肥後守の築く所にして、明治元年、時の藩主の官軍に抗せるを以て没收せられ、廢趾となれるなり。地は又舊時木更津縣廳の置かれし地なり。町に八剱八幡神社あり。郷社にして譽田別尊、足仲彦尊、息長足姫尊を祀れり。又應永年間の開基にかゝる日蓮宗の満足山成就寺あり。僧觀譽の開基にかゝる淨土宗の鶏頭山選擇寺あり。此の町つゞきに櫻井といへる宿場あり。料理店多く、怪しげなる上總の藝者ありて、避暑避寒の客に侍す。

吾妻神社 町の大字吾妻にあり。地は吾妻の森の圍む所にして、橘媛を祀る。海神

の思りの前に、身を挺して之を鎮めたりといふ橘媛の屍體、此の海岸に漂着したるを之に祀るといふ。

久留里町 檜葉の海濱より小櫃川を溯れば、中川の小村を過ぎて、約五里馬來田眞里谷、下郡、久留里市場等のある山間に入る。町は小櫃川の上流東岸にあり。人口五千を有し、街衢整然として上總國南部の一都邑たり。城趾あり。天正十八年松平出羽守忠政の據る所、慶長五年番城となり、同じく七年土屋民部少輔忠直之を領す。その頼直の時一時廢城となし、延寶八年酒井雅樂頭忠舉加増地として之を領し、寛保二年里田大和守直純此れに代る。

久留里神社 町の大字浦田に在り。天慶年間、平將門房總二國の地に、六の妙見祠を建つ、之れその一なり。當初は細田山妙見寺と稱する眞言宗の寺に屬せしものなりといふ。祭神は天御中主命なり。

市場町 小櫃川の東岸にあり。久留里町に屬する小邑にして、市街稍繁榮なり。此





大友皇子の陵なりといふ。此の邊附近、皇の遺蹟甚多く、富岡村字下郡には

十二所神社と稱して、宮女十二人を祀るものあり。西軍の遣水城に迫る時、皇子は城に止まりて、宮女のみ此地に逃遁す。已にして火起り城の陥る音すさまじ、宮女等遙かに之を望み、暫し皇子の亡滅を悲しみ、各々及に伏して君に殉す。附近に古墳一基あり。大友皇子の妃を葬るといふ。

眞如寺 久留里より三里、木更津より五里、市場より二里馬來田村字眞里谷に在り。

曹洞宗に屬し、三體阿彌陀如來を本尊とす。寛正五年、眞里谷の城主、武田信興の祈願にて、正嚴禪師の開基に係る。上總國中同宗の寺格第一位を占むる巨刹にして、二百餘の本寺を有す。古來堂塔の壯麗と盛大なる國內唯一なりしかども、明治の初年火災の爲めに大半を廢するに至れり。什寶とする所涅槃像の軸あり。九尺六尺の浮織表装にして、珍重物たり。

羽雄神社 同じき村の字茅野に在り。日本武尊を祀る。此の地に一奇習あり。毎歲

十一月二十六日より、翌月五日まで十日の間は、里人は凡て、髮に手をふれず、沐浴をとらず。家業を休み、夜と雖點火する事なく、終日殆ど黙して苟くも笑談する事なし。而してその旬日は武人の姿をさへ見るを厭ふといへば、恐らく傳説の如く、往古日本武尊が、鹿野山賊を平げたる時の風を遺習するものなるべし。

貞元親王墓 貞元村附近より南方周南村に通ずる路傍、左側に一雜林ありて、内に小丘を包む。丘上に五尺許の石碑を建つ。面に清和天皇第三皇子貞元親王御廟の十四字を刻す。碑の兩側に扉形をなせる二面の石あり。右なるものには、延寶六年戊午秋七月十五日、左なるものは只削痕あるのみなれど、もと施主平野權左衛門の八字を存したるものなりとぞ。仁和三年親王上總の大守となり、延喜九年十一月此に薨す。本村内にある神將寺には親王の遺物を多く藏せり。又附近に親王の古蹟多く、建曆寺にはその像影あり。定福寺は往古親王の菩提所たりし處、八幡社は親王が三種の神器を模造して祀りたる所なりといふ。親王の陵を距る事凡そ二町にして

阿萬の松 あり。松の周圍二丈二尺餘、丘岡の上丈餘を凌ぎ、眞に千年の古樹たるを見る。親王、此の地に在るの日、寵妃にお萬なるものあり。その歿後此處に葬りたると傳ふ。同じく親王の墓を距る五町許の處に、前掲せる

神將寺 あり。小絲川の南岸にあり。對岸林を見て、清流その下を圍る。風趣甚だ靜かなり。新義眞言宗に屬し、賴源僧都の中興に係り、行基菩薩の作なる不動明王を本尊とす。境域千五百坪、内に本堂、藥師堂、庫院等散在す。貞元親王に關する寶物に富める事は前述の如し。その主なるものを擧ぐれば、嘗て親王の殿趾なる、字親王邸の田圃中より發見したるものにて、五方形の銅板よりなれる板鈴なるものあり。而してその一角毎に銅製の鈴をつけたり。又花鏡といひて、徑二寸五分許なる橢圓形の金屬あり、已に半ば腐蝕せるもの、如し。又方硯といふものあれど、缺損甚しく殆どその形辨をせず。又直徑一寸許なる銅板にして、面に五三の桐を刻せるものなり。同じ村の字瀨古に

建曆寺 あり。眞言宗に屬し、往昔、惠心僧都來りて、貞元親王の爲めに法會を營みたる事ありと傳へ、用ふる所の假面を藏す。二十五佛に形取れるものにして、凡て彫刻の秀でたる珍品とするに足るものなり。又貞元親王の像影を藏す。草創、開基、今詳かならざれども、古刹の名を失はざるものなるべし。

氷上川繼墓 小絲川の南岸より一町餘の南方なる二間塚は、飯野村の小字にして又内裏趾といへり。傳説によれば往昔此の地の一村民、荒田の中に石棺一箇を發見す。之を開けば、内には衣冠を整して容貌優美なる殿上人の端座するあり。人驚きて暫らく之を打まもるに、やがて美しき衣冠も人も形を失ひて、悉く灰土となれり。今村内の善立寺にある墓碑一面は、その石棺の蓋を立てたるものなりといふ。因に氷上川繼は、天武天皇の皇子鹽燒王の子、桓武帝の頃、陰謀の企圖ありて伊豆の三島に流さる。されば或は後年此の地に來りて命を落したるか、確かには信じ難し。

人見山妙見堂 周西村大字人見、小絲川の河口に臨みて、直立二百餘尺の一峰の起

れるを見て。小高からすと雖、よく漁人の目標とする所なり。人見山と稱し、麓より二百五十餘級の磴を通じて、山頂なる妙見室の祠前に至る。堂に、獅子頭山の四字を題する額を掲ぐ。下總國の千葉、飯高、印西、上總國の浦田、横田に祀れるものと共に、平將門の崇敬深かりし妙見祠の一なり。又周西妙見と稱す。山は絶巔にして眺望頗る佳にして豊富、南には近き富津洲又は飯野岬、磯根岬、明金崎を見渡し、西には本牧岬、大山、之等を超えては遙かの空に富士の秀峰、靜かに海色にとけ入つて浮び西南には箱根、伊豆、相模の諸山の起伏するあり。彼と對して鹿野の山近く東南に聳えたり。北の方遠く雲煙を上げて茫々熱するが如きは東京の大市街なり。美にして快澗、まことに自由の觀望なり。麓には人見神社あり。郷社格にして、祭神は國常立尊なり。境内又風趣多様なり。近く小丘ありて、内裏塚といふ。丘上に祠ありて、下に石舟をして、堅九尺幅五尺、丘は又凡て瓦の如きものを以て築き、之に土をかけたるものなりといふ。附近、又内裏塚と稱するもの二あり。他に三條塚、九條塚あり。

此等の塚の南方四町の外に當りて美名塚なるものあり。恐らく萬葉集中の美しき女詩

人たる、上總末珠名郎女の墓なるべしといふ。

下飯野 戸數三百五六十、往昔、保科氏の藩を置きし地にして、頗る繁榮なる市街なりしといふ。

鹿 維新後は全く衰微を極めて、殆ど昔時の面影なし。

野 鹿野山神野寺 木更津町の南方五里、山の高さ

千五百尺、木更津よりは小糸川をわたりて人力車を通ず。地は君津郡周南村字草牛の南部、古來總

房二國の最高峯たり。山の頂より中央部を占むるに即ち、古刹鹿野山怒怒院神野寺にして、之を左右して民家各二町許を距て、寺域の兩側地を占む。

之れ鹿野山鹿野宿にして、上町(箕輪町)下町(關伽井町)の二に分れ商家、旅館、料



理店各々軒を連れ、常に来り遊び詣づる者多く、殊に夏期は東都の人士の暑を此處に避くる者多きが故、佛閣神野寺等と共に、その名よく著はれたり。旅館は五六あり、寺は往昔聖徳太子が草創する所の靈場にして、後堀川天皇の元仁年間、見真大師の錫を茲に留めて、之を鹿野山琳聖院神應寺と稱し、教化頗る廣く、元治元年當山十四世の僧鏡堯阿闍梨に至り、今の名に改む。境域頗る廣くして正面に本殿、之を圍りて大杉明神祠、飯綱權現祠、十二社堂、經堂、護摩堂、阿彌陀堂、六角堂、觀音堂、鐘樓辨天堂、客殿、庫裡方丈、寶庫等なり。本堂は十間四面客殿、庫裡の梁行二十二間に及ぶといへば、宏壯の觀人目を驚かすと理無きに非ず。本尊を、丈一丈二尺の醫王善逝尊及び軍荼利夜叉明王にして、又聖徳太子十六歳の像を安置す。第一第二のものは、遠く千三百年の昔、推古天皇の御宇聖徳太子の彫刻にかゝるといふ。本堂より中門を過ぎ、左甚五郎が作にかゝる表門を出づれば、東南は即ち前述の箕輪町にして町を横ざる事六七町、廣潤幽靜の境は前に開けて人の遊歩心のまゝなり。所謂鹿野山

公園にして、森樹翠苔の香深く、地高ければ大氣澄みわたりにて、眞に仙境の思あり。之れより俯して、蜿蜒として數里を波打てる鹿野山九十九谷の谷又陵を見渡し得べし。公園の背後は稍高き丘岡をなし、上に白鳥神社あり。日本武尊を祀る。之れ往古當山に占據し猛威飽くなかりし東夷阿久留王の日本武尊の征討に亡滅したる所なるが故なり。又神野寺内より關伽井町を過ぎて行けば、十四五町にして、廣さ四五反歩許の一面の美しき芝地あり。春は霞の日、秋晴の日、西北には九十九谷、近くは木更津、人見山、富津洲、安房の鋸山、清澄山、下總の岬と濱と、遠くは東京横濱の展けたる地勢、浦賀、猿島、走水、更に富士、函根、筑波、赤城、日光、碓氷等十三州の巒影、首をめぐらせば皆一望の中に入るべし。淡き濃き山影時々にして雲を送り、空を浸す海水一碧にして、折々東京灣を通ふ汽船の眠げなる汽笛を滿々たる内海に響きわたらすなり。此の他歩を吝まずして山中を跋涉せば、天神堀の瀑布を始めとして、八尾、八峽、八峯、八塚の名跡ありて、遊人飽く事を知らずして數旬を過すものあり。

毎歲五月二十七日、寺にては田圃虫害豫防の祈禱を行ひ、當日は遠近の農民先を争ふて來り賽し、山中の雜踏甚しといふ。神野寺を下りて東方一里許りに

諏訪神社 あり。地は秋本村大字市場、社は二座ありて、上下に分ち、上諏訪神社は健御名方命、下諏訪神社は八坂刀賣命を祀れり。共に郷社なり。又附近に觀寶妙喜寺といへる曹洞宗の古刹あり。文龜元年秋元義久の開基にかゝるといふ。

富津町 上總國の最西端、富津村にあり。内に東京灣を扼して、斜に相模觀音崎と相對し、海上僅かに三里を距つるもの即ち富津洲なり。洲の海中に斗出せること一里餘、中間一里許をのぞきては、對岸相模までは殆んど遠淺をなせるが故、海上に浮標を置きて航路を示すといへども、大船は全く入る事を不可能とし、小船も時に砂に觸れて覆没する事あり。洲上に砲臺の設置あり。對岸觀音崎砲臺と相待つて、東京灣要害の重鎮をなせり。此の洲上稍陸に入りたる所に富津町はあり。南部の一名邑にして、人口六千を有す。附近に八坂神社、大乘寺等あり。前者は素盞鳴尊に大己貴命及

び稻田姫命を合祀する郷社にして、後者は淨土宗に屬し、享保二年相譽上人の開山にかゝり、普戴山と號す。さて、此の富津洲より南方佐貫川口附近に至る一帯の海濱を千草濱と稱せり。「咲包ふ千草の浦の潮風に秋いろくの波ぞよせ來る」と古歌にあり。稍北によれる所に千種新田の稱殘れり。

佐貫町 富津町を距る事約一里、木更津よりは四里四町、町は安房西街道に當れり。街衢稍整ひ、人口千四五百を有す。されど地は、舊街道に當れるのみにして、海濱よりも約一里を距りたれば舊觀漸く衰へ行くのみなり。町はもと阿部氏の城地を構ふる所、古くは弘治年間里見義弘より、天正年間の大河内一久、同じき十八年に内藤家長等相繼ぎて、據りたるものなるが、阿部氏の之を襲世するや、改めて今の地に移せるもの、されば町の東北ある北上山の頂には古城趾歴として存せり。町の中に妙覺山岩富寺あり。聖德太師の開基にかゝれる古刹にして、千手觀音三體を安置す。一は太子の作、一は行基菩薩の作、一は慈覺大師の作なりと傳ふ。又町の字香谷村には眞宗西

本願寺派に屬せる圓龍寺なり。天正年間、内藤家長が三河國舉母より移封されて此處に來りし時、僧順了を聘して當寺を草創す。今も順了の子孫之れが住職となり居れり。

湊町 湊川は又天神山川と稱し、水源を郡の東境に發し、西して三流を併せ、關村

大字大川崎にて清水川、更に西して山中川、相川を集め、湊町附近に至つて浦賀の海

峽に注ぐ、全長五里餘なり。町は人口三千五百を有し、國內屈指の要港にして、東京

灣汽船の寄港地なるが故、土地の物産は凡て此處に集まりて、京濱の市場に運輸さる。

從つて市街稍繁華に、旅人の出入頻繁なり。佐貫町よりは二里八町、安房西街道に當

りて、鹿野山町よりは三里。湊町又天神山の社を以て、多く記憶せらる。

鬼涙山 上記湊町の屬邑に屬す。山野山脈の一分脈にして、西に走るもの之なり。

山中に小部落あり。日本武尊東征の際、凶夷鹿野山より遁れて此の山に入り、遂に尊

の追跡に會ひ、鬼の目に泪を流して哀憐を乞ふ。名の起る所以なりと。

田倉の大樟附近 環村は鹿野山の南麓なる一部落の稱、四圍皆山にして、地僻なり

村内に老樟一株あり。その幹の周圍凡そ六丈、高さ梢よりは密葉天を覆ふて物凄きば

かりに茂生せり。往昔文祿年間、豊臣秀吉の上總國を定むるの時、命じて之を測らし

む。時にその周圍五丈八尺、後三百年を経たり。此の事古記に明かなり。蓋し紀文前

より枯るゝ事なかりし稀有の老幹たる事疑なし。樹下に方九尺餘の社ありて、大山祇

命を祀る。されば試みに幹をへだて、祠を見んとすれども能はず。以てその幹の大な

るを知るに足る。(今枯れたり)近き藤原に、高宕山あり。宕山にして削立甚し。宕上

一堂を建て、觀世音の像を祀る。之れ高宕山觀世音なり。堂の傍に古釜一個あり。釜

中常に清水を貯へ、早天旬日をよく之を瀾す能はずといふ。又曰ふ。こは治承の頃、

源頼朝が安房より來りし時用ゐたるものなりと。

造海城址 鹿野山の西南里餘、海濱砂黒く輝く處、竹岡村大字竹岡に往り。附近の

風致極めて勝れ、海砂に交はれる貝殻の光殊に美し。此の地又一に百首といふ。文明三

年の事なりき。當國北方の里見義成氏の城を攻むる時、造海の城主、真里谷丹波守は





## 下總國

下總國は關東平野の東部に位し、房總半島の北部を成し、東は武藏に接し、西は太平洋に面し、西北及び北方は利根川及小貝川を隔て、常陸國に連り、南は上總及び東京灣に接す。東西二十五里、南北十二里、面積五百六里を有し、千葉、東葛飾、印旛、香取、海上、匝瑳、結城、猿島、北相馬の九郡より成り、前の六郡は千葉縣これを管し、後の三郡は茨城縣これを管す。地勢は平坦低夷にして、本邦中最も山岳の少き地と稱せらる。山嶽丘陵は上總の餘脈を受け、横に兩總の國境を劃し、香取郡に入りて右折し其の盡くるところに銚子半島を構成す。是を以て地勢南に高く、北に漸下し、東方海上郡に於て少しく丘陵の隆起するを見るのみ。國中第一の高峯と稱する海上郡の愛宕山も高さ僅かに百二十米なるを見て、以ていかに山岳に乏しきかを知るべし。河川は利根川水源を上野國利根郡藤原村文珠山に發し、東流して當國猿島及び東葛飾郡の

境に至る。之を上利根川と云ふ。下流分れて南北二派となり、南派は栗橋驛及び川妻村の間より武總の境界を経て關宿の西に出づ。長さ二里二十五町濶さ凡そ二町半、之を權現堂川と云ふ。此川又東北に渡れて逆川の稱を得、赤堀川を受けて東流す。是れ利根川の本流にして、赤堀川は所謂北派なり。南北兩派是に至つて又合し、大に其河幅を添へ、猶ほ東流して東葛飾郡のアベ沼、猿島郡の長井戸沼、市谷沼、鶴戸沼等の水及び相馬郡の鬼怒、蠶飼二川を容れ、遂に南相馬郡北布川驛の傍に至る。栗橋驛以下是地に達する流域を中利根川と稱す。其長さ凡そ十里二十二町濶さ大約二十一町、是れより以下は即ち下利根川にして、印旛郡手賀沼、印旛沼、長沼の水を會し、安西新田を過ぎ終に香取郡に入りて大浦沼を容れ、又與田浦及び常陸の浪逆浦、北浦等の水を併せて銚子港に至り、海に注ぐ。布川より安西新田に至る距離八里十二町、安西新田より銚子港に至る距離凡そ十五里十一町濶さ二十五町、水源より通算して七十餘里に及べりと云ふ。別に江戸川は東葛飾郡關宿の南、宇江戸町より權現堂川の南

折分流する者にして、武總の國界を流れ、同郡浦安村大字堀江に至つて東京灣に入る。長さ十七里三十三町濶さ凡そ二町。鬼怒川は一に絹川に作る。下野國より發し南流して結城郡の中郡を經、北相馬郡大木新田に至りて中利根川に會す。州界より河口に至る里程十一里二町餘、濶さ九町半許。蠶養川は一に小貝川に作る。是れ亦水源を下野に發し、常陸を經て南流し、同國及び豊田郡の界線と爲り、北相馬郡界に及んで、稍や東に向ひ、末流復た南下して小文間村に至り、亦中利根川に注ぐ。此川の當國を流過する十四里三十三町濶さ大約十町餘に及べり。其他栗山川、木戸川、鹿島川等あり。湖沼は印旛沼、手賀沼最も大なり。又九十九里沿岸に樅海の干瀉あり。今干瀉の地名を存す。昔時は大約五里巾を有する瀉湖なりしといふ。海岸は東京灣に面する地は、洲渚砂濱を成し、外洋に面する邊は九十九里の西北端を成し、飯岡より犬吠崎に至る間一帯の徙崖をなすのみ。利根川の河口に銚子町あり。漁鹽の地にして、人烟頗る稠密なり。千葉町は東京灣頭に位し、地方政治の中心として繁華を保ち、佐

倉町は兵營を有するを以て世に聞えたり。利根川の沿岸には河港昔より發達し、布佐布川、木下、安食、滑川、神崎、佐倉等の諸邑運珠のごとく相連る。

**沿革** 此國の沿革を按ずるに上古神武天皇即位の初め、天富命阿波の齋部を率ゐ沃土を求めて偶々此に至る。大に麻穀を培養し、名けて總の國と稱す。即ち今の二總及び安房の地なり。成務天皇の御宇創めて國造の制を定められし時、印波、下海上、武社、菊間、上海上、馬來田、須惠、伊甚、長狹、安房等の國造を置き、其地を分管せしが、後併せて二國となし、南を上總とし、北を下總とし、孝徳天皇の御宇下總の國府を今の東葛飾郡國府臺に置き給ひたり。斯くて寛平、承平の際高望王を上總介に其子良兼を下總介に任す。良兼の從子將門（良將の子）豊田郡に居り、猖獗制を受けず、天慶二年良兼の死するや、將門遂に謀反し、僞宮を猿島郡應南に設けて、八州（當國及び上總安房武藏相模上野下野常陸）を煽動せしが幾何もなくして誅に伏す。然れども其一族猶ほ二總に蔓瀰し、將門の從姪忠常下總介に任せられ、海上郡に居る。長

元々年忠常亦亂を作し、四年にして法に伏す。後其子常將宥されて介となり、始めて千葉城に居り、是れより子孫相繼襲し千葉を以て姓とす。源平の時千葉常胤、結城朝光と共に源頼朝に従ひ此國を分領す。建武中興の際足利尊氏を當國の守護とせしが、尊氏の反するや、千葉貞胤（常胤七世の孫）結城直朝（朝光六世の孫）共に之に屬せり、爾後結城氏朝（直朝の曾孫）亡管領足利持氏の遺孤を奉じて結城に據る。將軍義教兵を遣はして之を攻む。互に勝敗あり。既にして城陥り、氏朝自盡す。結城氏はに於て中絶す。寶徳年間持氏の季子成氏管領となり、氏朝の遺胤成朝をして結城に歸復せしむ。而して成氏其執事兩上杉氏と隙を生し、之を伐つて克たず、退いで古河を保つ。時に千葉貞胤の玄孫胤直上杉氏に黨す。其叔父馬加城主康胤、胤直を襲殺し、千葉城に據つて印旛以東の地を領し結城氏と俱に成氏を翼戴して皆古河に覲す。然るに上杉氏又胤直の從子實胤を以て其後とし武藏の石濱に居らしめ、是れより千葉氏兩宗となり、相戰ふて止まず。天文中里見氏當國を侵して東境を略取し、千葉結城の二氏漸く

衰へ、遂に北條氏に従屬す、同二十三年北條氏康成氏の曾孫晴氏を關宿に幽し其子義氏をして讒かに古河に食せしむ。天正十八年豊臣氏の東征せしや結城成朝の玄孫晴朝歎を容れて、其封を全うし、徳川氏の庶子秀康を養ふて嗣とす。千葉氏は則ち康胤九世の孫重胤北條氏に従ふて小田原に在り。豊臣氏乃ち其封を奪ひ終に滅ぶ。後徳川氏の關東に遷るに及びて、小笠原秀政を古河に（後土井利里）松平康元を關宿に（後久世重之）久能宗能を佐倉に（後堀田正亮）封じ、慶長年間結城秀康を越前に徙して其城を廢し、後又封を州内に受る者、生實に森川氏あり、高岡に井上氏あり、小見川に内田氏あり、結城に水野氏あり、多古に松平氏あり、戊辰の亂東兵官軍を結城に攻めて之を陥れ。幾ばくも無くして又之を失ふ。時に東兵の別隊上總に在る者來りて官軍を襲ひ、遂に進んで市川に至り、大に船橋に戰ふ。東兵敗蹟して奥羽に敗る。王政革新の後下野の高徳藩（戸田忠至）を徙して曾我野に封じ、國內凡て九藩たりしが、皆改めて縣として、尋いで之を併せて印旛縣を置き、又改めて千葉縣を置き、新治縣と共に

に之を分管せしが、明治八年新治縣の廢せらるゝや、其所轄香取、匝瑳、海上三郡を割いて千葉縣の管治に合して、利根川以北を茨城縣に併せたり。

交通 總武鐵道線は武藏の小岩驛より小利根川を渡りて始めて本國に入り、市川驛を置き、日蓮宗の巨利法華經寺を以て著名なる中山を過ぎ、船橋に達し、附近に陸軍の練習場習志野を有せる津田沼町に一驛を置き、馬加、稻毛の二驛を経て、千葉町に達し、これより一線は南東に向ひて上總地方に至り、一線は北向して四街道を過ぎて佐倉町に達し、これより又成田線を北に岐ち、本線は八街驛を経て、上總に入り、再び匝瑳郡に顯れて、八日市場、干潟、旭町、飯岡、松岸を経て銚子に達す。佐倉より岐れたる成田線は酒々井を経て成田に達し、これより南して利根川畔の滑川町に出て、郡を経て佐原に達す。常盤鐵道線は東京日暮里より岐れて千住に來り、龜有より小利根川を渡りて始めて本國に入り、松戸、馬橋、柏を経て、我孫子に至り、此處に私設成田鐵道線を東に岐ち、利根川を渡りて取手町に至り、藤代驛を経て常陸國に入る。

成田鐵道線は手賀沼と利根川の間を東走し、布佐、木下、安食を経て成田町に達す。

成田には關東第一の流行佛成田不動あり。賽者常に陸續たり。其他東京蠣殻町を基點として小利根川及び利根川を上下する汽船あり。河口銚子町に一晝夜にして達す。沿岸の諸邑、汽車の便なき昔に比して稍々衰運に向ひたれど、猶ほ多少の繁華を保てり。

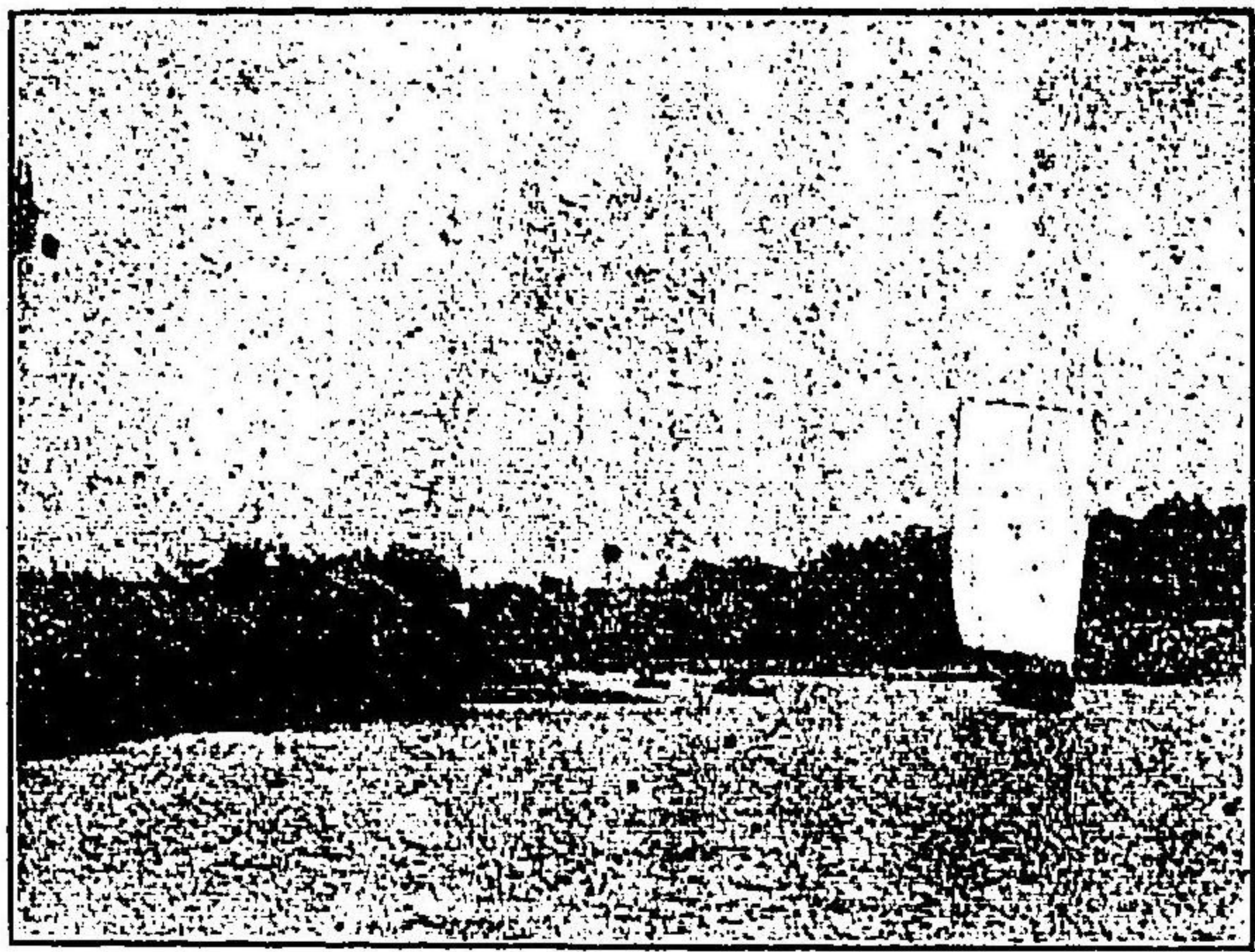
産業 利根川灌漑は水田多く、概して盛なる米作地なり。されど品質は餘りに良好ならず。食用農産物には大豆小豆甘藷等なり。特用農産物には茶を産出し、印旛、香取、東葛飾諸郡を主産地とし、坊間下總茶の名あり。蔬菜果實には匝瑳郡大浦の午旁東葛飾郡八幡の桃實、及び各郡に栽培する落花生等あり。養豚業又盛なり。林業は松杉なれど、副産物にして佐倉炭なり。主として櫛を用ゆ。水産は銚子地方は漁業の盛なる地として其名天下に高く、鮪、鰯、其他各種の魚類に富む。水産製造物も亦尠からず。鯉節の産出多し。織物は銚子縮など甚だ振はず。酒は關西の本場に比すべからざれど、各地多數の製産あり。醬油は野田、銚子の名天下に聞え、産額性質共に

本邦第一と稱す。利根川沿岸に醸造地多きは、この水質の醤油醸造に適すればなるべし。

○總武房總鐵道沿線 總武鐵道は東京市本所區錦糸堀の本所停車場を起點とし、平井、小岩、市川、中山、船橋、津田沼、幕張、千葉、四ツ街道、佐倉、八街、日向、成東、松尾、横芝、八日市場、干潟、旭町、飯岡、猿田、松岸を経て、銚子にいたる。その間の里程を七十一哩七十七鎖となす。諸停車場の中、日向、成東、松尾、横芝の四驛は上總國の所屬となす。

市川町 東京市本所停車場より僅に二十分程にして達す。利根川の支流江戸川の東岸にして、千葉縣東葛飾郡に屬し、利根川筋を経て、東京に入る和船、汽船の發着所にあたり、人烟稠密、約四千を算するにいたる。ことに國府臺の地に砲兵聯隊の設置されし以來、街衢ますます繁榮を増せりといふ。新田の花八幡の梨花、秋期の螢花等賞すべし。地方より北方一里廿町にして松戸町にいたるべく、江戸川をくだること二

里弱にして行徳町に達すべし。



古戰場として名あり。今なほ天守臺の舊址、床几塚、石櫃等の古蹟を存す。東京より

國府臺 又鴻の臺に作る。市川町の北方に聳ゆる一帯の丘陵にして停車場より十八町を隔つ。古へ下總國府の所在地にして、斷崖水面を抜くこと數十尺、滔々たる長江に莅んで立ち、老樹滿山を封じて鬱蒼たり。昔は南、百草の松蓮寺と共に關東平野の眺望を以て聞えしが、今は野戰砲兵第二旅團の兵營となりて、全くその勝を失へり。地はまた天文年間に小弓御所足利義明が陣を布きて、北

條氏康と戦て大敗地に委し、後また永祿年間、安房の雄將里見義弘が北條氏と鋒を交へて敗れたる



の入江にして、手兒奈が現世の泡沫夢幻なるを感じて投身せし跡なりと傳ふ。蓋し、昔は今の江戸川のこの附近まで入込みたるならん。

萬葉集に手兒奈を追懐する和歌數篇あり。今ぞの一二を採録せず。山邊赤人「いにしへに、ありけむ人の、倭文幡の、帶ときかへて、ふせやたつ、妻とひしけむ、勝鹿の真間の手兒奈が、おくつきを、こゝとは聞けど、真木の葉や、しげりたるらむ、松の根や、とほくひまきしき、言のみも、名のみはわれは、忘らえなくに。われも見つ人にもつけむ勝鹿の真間の手兒奈のおくつきどころ」高橋連蟲磨「とりがなく、吾妻の國に、古へに、ありけることい、いま迄に、たえずいひ来る、勝鹿の真間の手兒奈が、麻衣に、青帯つけ、ひたさをを、裳にはおりきて、髪だにも、かきも梳らす、履をだに、つけず行けども、錦綾の、中につゝめる、齊ひ兒も、妹にしかしめや、望月のたれる面輪に、花のこと、咲てたてれば、夏むしの、火に入るがごと、水門入に、船こぐごとく、よりかくれ、人のいふ時、いく時も、生けらぬものを、何すとか、身をたなしりて、涙の音の、さわぐ港のおくつきに、いものこやせる、遠き代に、ありけることを、きのふしも、見けるがごと、おもほゆるかも。勝鹿の真間の井みればたちならし、水くましげむ手兒奈しおもほゆ。」

國分寺 金光明寺と稱し、真間の北五常村大字國分にあり。國分山と號し、聖武帝

の時置かれたる國分寺の一なり。中興開山を祐天と稱し、今新義真言宗を奉せり。本尊藥師如來は開山行基の作、脇士十二神將は運慶の刀、山門樓上の古像は開寺時代の作なりといふ。

市川桃園 市川停車場より次驛中山停車場まで桃林斷續して花時頗る美觀なり。世にこれを市川桃園と呼ぶ。毎年年花期鐵道局より觀桃割引列車を出すを例とす。古河桃林と併せて下總國の桃の名所なり。

中山驛 市川の次驛なり。地は日蓮宗の巨刹中山法華經寺あるを以てその名高く、賽日には賽者沓至し、立錫の地なきにいたる。停車場はその賽者の爲めに特に設置せしものなりといふ。以てその繁盛を推知すべし。

法華經寺 中山停車場より北方七八町にして達す。正中山本妙法華經寺と號し、日蓮上人最初の轉法輪の道場にして、同宗四箇大本山の一なり。寺傳に曰く、建長六年日蓮上人總州に遊び將に鎌倉に還らんとす。時に中山村の住人富木常忍また同地に

赴かんと欲し、たま／＼船を同うして上人の所説を聞き、大にこれに服す。文應元年終に宅地を捨て、一字を建立し、上人を聘してこれに居らしむ。上人こゝに於て百日間の説法を試み、また自ら一尊四菩薩の像を刻して堂に安じ、これを法華堂と名く。これ即ち今の奥の院にして當時の草創なりと。寺域一萬四千七百七十七坪、本堂を中心として經藏、骨堂、五重塔、鼓樓、常唱堂等相連り、堂の背後小丘の上には鬼子母神堂、祖師説法堂、祈禱堂等あり。右方牆壁の中には客殿、方丈等あり。奥の院は構外右方の小路を東北に距る三町許の處に位し、開基常忍（日常上人）の墓また路を隔てゝその左芳草堂の中にあり。右の内祖師説法堂は祖師が彫刻したる一尊四菩薩の像を安ずる所にして、世俗飛驒匠が造營に係ると稱す。その他境内に於て著名なるは常唱堂の背後に鬱茂せる泣銀杏にして、これ古へ真間弘法寺の開山日頂上人その父常忍の怒に觸れ對顔を許されざること數年、日頂屢々當寺に來り對顔を請ふと雖も得ず、常にこの樹下に慟哭して去れり。故に今に及んでその名を存すと傳ふ。また、中山の

北方約二十町、字千束に妙正ヶ池あり。法華經寺に於て日蓮上人百人百日間説法の際の奇蹟的傳説を傳ふ。

曾谷妙見祠 五常村大字曾谷の長谷山安國寺にあり。妙見の本尊は千葉町にある千葉寺の妙見と同木を以て刻みしと傳へ、參詣者多し。また同寺の境内に王羲之祠あり。

葛飾八幡社 中山町の西八幡町にあり中世廢頽後源賴朝の再修するところといふ。

八幡不知藪 葛飾八幡の社前、真間街道の右側にあり。中山停車場を距る西方十町に過ぎず。方二十歩の竹藪にして、復古八幡鎮座の跡なりと傳ふ。むかしは人一度この藪に入れば遂に出づる能はずといひし森なり。

行徳町 中山停車場の南方十數町にあり。東葛飾郡西南の一聚落にして江戸川の東岸に位す。本行徳、儀兵衛新田、伊勢宿以下十餘の大字より成り、總人口約一萬二千

を算し、名なる要津として繁昌す。ことに本行徳四丁目の河岸はこれを新河岸と名け、從來東京小網町三丁目の行徳河岸より舟によりて成田、香取、鹿島に赴くもの



、必ず寄船するところたりき。されど總武線、成田線の鐵道開通以來は、漸く舟楫に假るもの、數を減じ、従つて近來頗る衰微の傾向あるを免れず。行徳八幡宮、神明社、徳願寺、善照寺、丁極寺等あり。徳願寺は海巖山と號し、本行徳一丁目にありて淨土宗を奉ず。本尊阿彌陀佛は往古二位禪尼が運慶に命じて彫刻せしめしものと傳へなほ寺内に運慶作閻魔王の像あり。善照寺は青陽山と號し、南行徳村にあり。同じく淨土宗に屬し、覺譽上人の開山にして、慈覺大師作觀音、運慶作閻魔王、法然上人（圓光大師）鏡の御影等を藏し、また一口の古鈴を有す。丁極寺は行徳町大字高谷にあり。これまた淨土宗寺にして、圓光大師鏡の御影及び祐天和尙眞筆の塔婆を藏せるを以て有名なり。

●●●●● 行徳の濱 行徳町以南の諸村は皆な専ら製鹽に従事す。所謂行徳鹽と稱するものこれなり。この海邊砂白くして浪平かなるの邊、苫屋の烟搖曳たる狀はまた妙畫幅といふべし。濱に行徳千鳥たるものあり。また一名勝に算せられ、東都より文人騷士の特に

杖を曳きて賞するもの多しといふ。

是に鐵道沿線に返れば、中山の次驛に船橋あり

●●●●● 船橋町 今、人口一萬三千を有し、東京千葉間の要衝にあたり。市街は停車場の南に位し、五日市、九日市、海神の三區より成り、往來最も繁盛なり。物産としては各種の海産、干鰯、魚粕の類を出し、その製造賣買また盛に行はる。その海岸に遠が濱といふ所あり。これ平將門の妾桔梗前が身を投じたる遺跡なりと傳ふ。町に遊廓あり。旅客は高樓の絃歌湧くが如くなるを聞くべし。

●●●●● 意富比神社 船橋町の中央五日市にあり。景行天皇の四十年、日本武尊が伊勢太神を奉祀せし所なりと傳ふ。社宇小丘の頂上に鎮して、地區廣く、老樹鬱蒼として社殿を蔽へり。社域に常磐社以下の攝社末社數宇あり。近世縣社に列し、毎年四月大祭を執行せり。また、社の東六町許に式内茂侶神社あり。意富比神社の攝社に屬し、社地岡丘に倚り海濱に臨みて風光佳し。

慈雲寺 船橋の北にあり。大峯山と號し、禪宗五山派にして鎌倉建長寺第二世佛光禪師の開基に係り、行基菩薩作釋迦如來を本尊とせり。この他、船橋在近の佛刹として淨勝寺、長福寺あり。淨勝寺は字漁師町に位し、淨土宗を奉せり。長福寺は船橋の北方八榮村大字東夏見にありて、曹洞宗に屬し、圓融院天皇の御宇の開基といふ。

阿須波明神 葛飾村字西海神の小祠海神神社は古の阿須波明神ならんかといふ。江戸名所圖會に曰く「阿須波明神は禪宗大覺院奉祀し、婆竭羅龍王を祀るといへり。『まじり歌林良材に「下總國阿須波宮と末とす社は神の誓には小柴を立ていのであることあり」と見ゆ。これ即ち旅客の行途に上らんとする時神前に小柴を捧げ海陸の安全を祈りしものなり。新千載集空爲「頼むそよあすはの宮にさす柴のしはしかほとも見ねは戀しき。歌枕名寄俊頼「今さらの妹かへさめやいちじるき阿須波の宮の小柴さすとも。』」

勝間田の池 葛飾村大字本郷に屬し、船橋街道の傍にあり、俗に本郷の池と呼ぶ。萬葉集 新田部親王の歌あり。曰く「勝間田の池はわれしる蓮なししかいふ君が鬚なき

がごと」と。これより以降歴代撰集に勝間田の池を詠せるもの多し。而して、その詠せる所のこの池なりとなすものに八雲御抄以下の書あれど、なほ確信すべからざるに似たりと。なほ、本郷村に寶成寺及び葛飾神社あり。寶成寺は曹洞宗に屬し、慶長中成瀬氏の開基と傳へ、葛飾神社は、古書に總社明神と誌せしものこれなるべしといふ。

津田沼驛 船橋の次驛なり。人口約千を有せる一都邑にして、その附近東南に東京灣を帯び、西北は廣瀨なる習志野の原野開け、氣象自ら濶大なり。一里を隔てず習志野騎兵營あり。されば町には兵士常に出入して、附近の商賈皆なこれを得意客とし、從つて饅味料理屋等多し。地の南海岸鷺沼は古へ源賴朝の滞在せし跡なりといふ。

習志野原 船橋驛と津田沼村北方一帶の地の間にあり。北は小金が原に接續し、東は大和田に連り、西は藥園臺に界し、南は佐倉街道に限る。東西凡そ二十五町、南北凡そ二十町、もと正伯原といひしを、明治六年、至尊親臨してその名を習志野と賜ひ

陸軍の大練兵場となせしものなり。日清戦役後軍備擴張の時に際し、更にこの地に騎兵第一旅團司令部を置き、并に騎兵各聯隊の兵營を置かれしより、兵舎棟を列ねて廣原の中に列し、附近また漸次繁盛なるにいたる。日露戦役露國の捕虜を收容せし地の一なることは世人よくこれを知れり。佐倉街道は船橋よりこの地を通じ、大和田村を過ぎて以て印旛郡の佐倉にいたる。

二宮神社 二宮村大字三山にあり。社城丘陵の中に位し、森樹鬱々として四境を蔽ひ、城内頗る雅趣に富めり。その創建の年月は詳かにせずと雖も、天正十九年既に社領を有したること舊記に見えたれば、その草創の遼遠なること推して知るべし。この地幕張停車場より三十町を隔つ。

大和田村 佐倉街道の一驛に居り、船橋を距ること二里二十七町、佐倉を距ること三里十三町餘の地にあり。分れて萱田、高津、勝田等の字を存す。萱田に時平社及び萱田神明社等あり。時平社は藤平時平の靈を祀り、附近諸村の鎮守神たり。蓋し、此

等の諸村古へ時平の庄園たりしにより、その靈を此所に祀れるならんといふ。萱田神明社は天照皇大神を祀る。蓋し、この萱田町及び萱田村の地は古へ伊勢神宮御厨の地にして、萱田神保の御厨と稱せしもの、故にこれを祀れるなるべし。

幕張驛 總武線津田沼の次驛にして、一に馬加に作る。東京街道の一驛に當り、人家櫛比して一小市街をなす。千葉氏隆昌の際にはその一族馬加康胤の城地たりし所としてその名著はれ、今になほ城址を存せり。なほ、大字武石にも武石氏の城墟あり。三笠の梅は停車場より二三町、長胤寺の境内にあり。この附近海に瀕して地一帯に低し。

検見川町 幕張の東南にして、東京街道中、船橋と千葉とのほとんど中間にあり。停車場を大字稻毛に置く。町の人口約六千五百餘、海岸に接して市街を成し、商賈多く街衢殷賑なり。これより千葉町までは東南約二里十一町を隔つるに過ぎず。

稻毛海水浴 稻毛停車場より十町餘を隔つるに過ぎず。一帯の松林翠を拖きて、街道の北方や、小高き砂原の中にあり。海は所謂遠淺なれば、危険の憂なく、東京灣







にして、北に印旛沼を負ふ。市街は東西に長く、延長ほとんど、一里半に及ぶと雖も、南北は頗る狭少にして五六町に過ぎず。町に歩兵第二聯隊司令部、郡役所、中學校等の官衙ありて街衢殷盛なり。人口約九千、物産に佐倉炭、蒟蒻、栗、蕨、草の類あり。停車場所在地を根郷村と稱し、成田鐵道に接続せり。また、地に遊廓あり。酒々井町は舊佐倉城市の一市坊たりしもの、街巷ほとんど相接續せり。地方成田町に四里八町南千葉町に四里三十三町を隔つ。

**佐倉城址** 佐倉町の西南隅字鹿島山にあり。元和元年土井利勝の改修になれるものにして、後世に徳川氏の重臣堀田氏の城地たり。地勢高燥にして、山上老樹叢生し、三面繞らすに深濶を以てす。最も要害の地區たり。今、歩兵第二聯隊の兵營を置かる。  
**海隣寺** 佐倉町大字鑄木にあり。治承三年千葉介常胤の草創と傳へ、今時宗を奉せり。

**將門山** 佐倉町の東本佐倉酒々井町の管内にして佐倉町に接続する北にあり。即ち

千葉氏本城の跡にして、一に本佐倉古城址とも稱す。蓋しこの城隆盛の當時にありては本佐倉の地を以てその城市となせしものならん。また傳ふこの地はむかし平將門の築構したる城址なりしを馬加輔胤改築して居城を構へたるものなりと。今も城址の西化に將門祠なるものあり。

**清光寺** 本佐倉の南にあり。龜澤山と號し、淨土宗を奉じ、東京芝増上寺に隸せり。その他なほ本佐倉に武田館址及び吉祥寺あり。

**宗吾刑場遺跡** 佐倉停車場より二十町、炎良臺と稱する岡は昔堀田家の刑場にして、義民佐倉宗吾か慘刑に所せられし跡なり。

この他酒々井町附近にはなほ幾多の名所あれど、便宜上成田鐵道の部に譲りて、今は専ら白井町及び印旛沼を中心としてその附近の名勝を紹介すべし。

**白井町** 佐倉町より西方一里餘にして達す。昔は東京より佐倉、成田にいたる街道の街に當り、今もなほ人口四千を有せり。北に印旛沼を控へたる地なれば、朝暮風景

の變化極りなく、眺賜美なり。

●●●●● 白井城址 白井田町の西北丘上にあり。千葉常兼が三男白井六郎常康が居城の跡なり。常康以後四世皆な鎌倉に奉仕せしが、祐胤の時にいたつて、蕭牆の禍ありて、その子行胤長く流浪せしが、後年足利尊氏に従つて功あり、依て本城を復す。その後裔、太田道灌と戦うて家名を辱かしめず、その子久胤幼弱にして一族胤員の爲めに政權を奪はれ、結城晴朝に頼れり。かくて上杉謙信の本城を攻むるや、晴朝に乞うて先鋒たりしが勝たず。後に徳川氏時代に至つて、本城は酒井忠勝の有に歸せり。

●●●●● 圓應寺 白井田町にあり。禪宗臨濟派にして、白井興胤の開基、佛眞禪師の開山なり。佛眞禪師は鎌倉建長寺佛國禪師の高足にして興胤の恩人なりしといふ。寺の境内甚だ閑雅にして、前面印旛沼の靜波を控へ、背後に城址の翠山を負ひ、風光頗る清絶推して白井第一の勝區とすべし。世に白井八景なるものあり。即ち、飯野露雪、城嶺夕照、瀬戸秋月、洲崎晴嵐、光勝晚鐘、諸戸歸帆、遠部落雁、舟戸夜雨の八景是れなり。

●●●●● 阿多津の祠 白井城址の東南一町ばかりにあり。土俗呼んでお多津様といふ。白井興胤がその忠傳母お多津を祀るところなり。傳へて子育の神となす。

●●●●● 宗衛寺 白井臺町にあり。應永年間の草創と傳へ、天正三年式部大輔胤榮千葉郡北生實柏崎郷よりこの地に移轉す。寺内に胤榮等の墳墓あり。里老いふ、この寺徳川家康放鷹の際の遺跡なりと。

●●●●● 光勝寺 白井町の東に位し、白井山と號す。時宗にして、遊行二代眞教上人下總に廻錫の際白井常祐の建立といふ。寺寶中に佛舍利一箇あり、傳へて日什上人所有のものなりとなす。また、堂内閻魔大王像の首は古へ小野篁の所作と稱せり。寺はまたかの江川三井寺に比せらるゝのところ、印幡湖に枕み、翠山の上に位して、風景の奇勝、圓應寺と相比較せり。

●●●●● 印幡沼 印幡郡の中央に位す。周回約十二里、これを繞る村落の五十餘箇あり。沼





佛を本尊とし、他に頼政塚あり。また後山に名馬塚あり。佐倉風土地に曰く「治承之亂、源頼政敗死于宇治、遺命於家士二人、曰、負吾頭率吾馬、向東國吉、家士奉命、東行二十日、而至此馬斃、遂瘞頭封之、植狗骨樹、且建佛堂云、按頼政弟深栖三郎光重、其子頼重、共居下總、故所謂墓及堂、似於頼重之所建」

再び佐倉町に返りて總武鐵道沿線地方の名勝の紹介を續けん。まづ、汽車は佐倉町より第三紀層の低き窪地を走り、その丘陵の間八街、日向等の諸驛を置けり。八街村附近は花多きところにて、春はその風景他に勝れり。日向は已に上總國山武郡に屬し、それより成東、松尾、横芝の諸驛を経て再び下總國に出で、まづ匝瑳郡の八日市場町に達す。

八日市場町 一に福岡町と稱す。匝瑳郡役所あり。人口約六千、また平野の一市邑なれど、下總の利根川沿岸と九十九里濱を連絡せしむる樞要の地にあるを以て、市街整正人烟稠密なり。西北多古町を経て成田に達する道あり。また北行して利根沿岸より佐原に出づる道あり。東方銚子まで八里の道程を有す。

西光寺 八日市場の西南に接し、福岡町大字米倉にあり。所義眞言宗に屬し、應永年間鏡照和尚の開基と傳ふ。城内本堂の他に文珠堂、大師堂、鐘樓堂、唐門、山門等あり。密樹蒼々たる間櫻梅を栽植し、春日の景最も佳なりと云ふ。蓋し匝瑳郡中の巨刹なり。

乾草沼 八月市場停車場の西南にあり。沼尾の地を宮川といひ、上總との國界にして、同國の横芝はその西方少許にあり。

内裏塚 八日市場の南、野田村大字野手にあり。孤立せる岡丘にして、松柏の繁茂せるを見る。相傳ふ、これ藤原鎌足の女耳面刀自及びその侍女等を埋葬せる地ならんと。されど正史の之を證すべきなし。

日朗生地 野田村字御屋敷と稱する地は日朗の所生地なりと傳ふ。今、同所に一碑を建つ。古へは朗生寺と稱する寺院その傍側にありしといふ。日朗は幼名を吉祥麿と呼び、同地千葉氏の族印東某の嫡にして、後日蓮の法門に入り、法華宗無双の英傑と



●●●●● 椿湖址 今干潟八萬石と稱へ、匝瑳郡の北境より香取郡の東南境及び海上郡の西境にいたる耕地の總稱なり。今もその地質低濕にして湖沼多く、稲作に宜しからず、昔長元々々平忠常の香取郡に據つて王師に叛するや、その據りし湖水に就いては歴史上疑義頗る多かりしか、そは常陸の霞浦にあらずして、この椿湖なりしならんとの説最も多し。今も地形上八日市場町以北には椿湖の遺蹟歴々として存せり。即ち停車場に干潟の名を存せるが如き、たま／＼その證と爲すに足る。而して、この椿湖を埋めて新田となせし區域は、東北より西南に長く、大凡幅員五里を有するの地二里以上の廣さに達せり。且つその外圍には二間幅の外溝及び三間の堤塘を以てこれを周圍せりといふ。今にいたりてもなほ早損の年には、椿海村の田面に濃厚の鹹水を湧出し鹽類堆積して植物爲めて枯稿すと稱せり。現今其水の殘路は旭町附近に存す。落花生を以て地の特産となせり。

●●●●● 延壽寺 干潟停車場の南、豊畑村字井戸野のあり。草創年代詳かならされどもまた

一古刹といふ。寺域高丘にありて、東は新川に瀕して遙かに海上郡に接し、北は所謂干潟八萬石を一望の中に收め、西南には上總東海岸の縣道これと圍繞するありて頗る眺颯に富めり。

●●●●● 旭町 海上郡に屬し、太田、十日市場、網戸の字あり。幸藏寺は字太田に屬し、新氣眞重宗を奉ず。境内に梅樹多し。また町の中に成田山眞福寺あり。同じく眞言を奉じ、應永年間の開基といふ。境内幽邃にして松杉多し。その他旭町には木曾義仲第九世の孫義昌の墳墓あり。

●●●●● 飯岡町 海上郡の南端に位し、飯岡停車場の南一里にあり。人口約八千、商家漁戸相連りて自ら小繁華區を成せり。東方に飯岡岬突出し、また岬と相對して外川の鼻あり。この間海水弓弦の線を引いて百丈の絶壁に激し、風景自から佳なり。海岸に飯岡海水浴場あり。夏時、遊客多し。

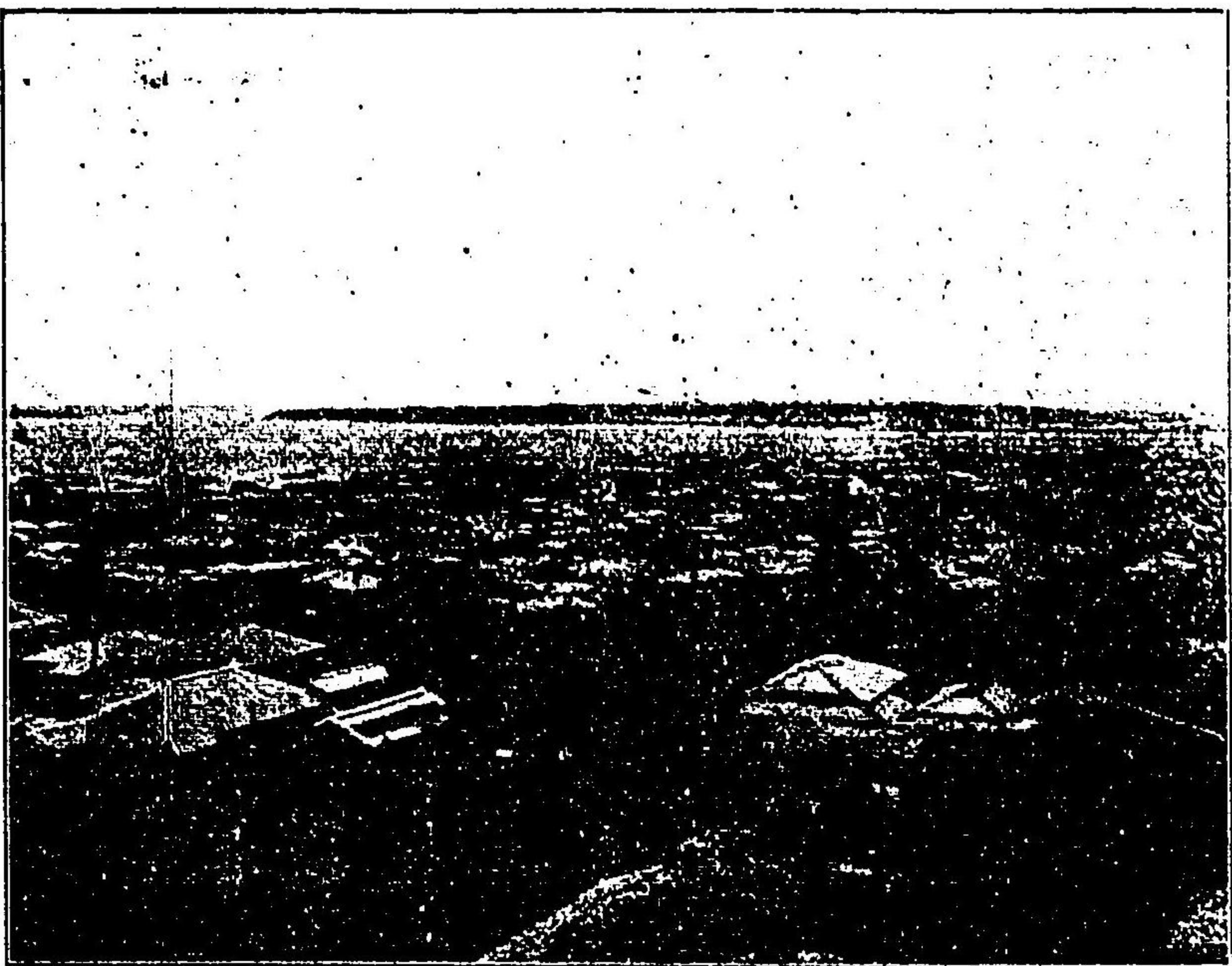
●●●●● 玉崎神社 飯岡町の東、大字下永井にあり。傳説に據れば永祿年間里見義頼の創建

と傳ふ。また一説に社名を玉崎といふは、近傍の巉岩皆な波浪の爲めに磨せられ、圓形を存するが故なりと。

岩井不動堂 飯岡停車場の北二十町、瀧郷村大字岩井にあり。寺の建築頗る宏壯を極め、また海上郡の一名刹なり。堂の背後に高さ數丈を有する大瀑あり。その他山中に清泉飛瀧をなすもの幾條なるを知らず。古へ呼んで岩井の四十八瀧と稱し、今日なほ大瀧、六根の瀧、遍照の瀧、來迎の瀧、秘密の瀧、女人の瀧、大師の瀧、金剛の瀧等を止めたり。地、もと弘法大師淹留の跡といふ。

飯岡より汽車は再び丘陵脈に入り、蜿蜒として銚子に達す。その鐵路近く利根の大河流るれど、その河流は見えず。たゞ漁村、蟹戸、白砂青松の風景次第に開展して旅客の心を惹しむのあり。飯岡の次驛を猿田驛となす。

猿田權現祠 猿田停車場の傍ら丘上に有にあり。石燈數十級高く丘頂に通じ、古木社殿を圍みて頗る幽邃閑寂の趣に富めり。



海上八幡宮 猿田の東、芝崎村にあり。毎歲夏季の祭禮頗る盛んなりといふ。橘千蔭のこの地と詠める歌あり。曰く「利根川のみをさしくだし夏ぞひく海上かけて君は引くにも」

子 松岸 海上村の一屬邑にして西銚子町に接続す。而してその停車場は丘陵の松原の中にありて、町に四五町を隔つ。風景よし。利根川圖誌に曰く「銚子往來の旅人この河岸より揚る。淫肆ありて最と

繁昌なる地なり。是れより長塚、本城、松本、今宮、荒野、新生などを経て飯沼の觀世音にいたるこの間一里。』また總常日記に曰ふ「松岸といふに船果てたり。こゝより飯沼かけて岸に臨める家居ども見わたすに、時知らぬ雪の降り積みたる心地するは、皆蠟の貝もてふけるなりけり。この川にて蠟の多くとらるゝこと思ひやるべし」と。今も銚子沿岸十數里の漁夫、大漁の時に遭ふや、遠くよりこの地に來り遊ぶを常となすと聞く。

**銚子町** 下總の東端利根河口に位する東海岸の要港にして、且つ總武鐵道の終端驛たり。港頭岩礁多く砂高く大船巨船を泊せしむるに足らざれども、東海岸數十里他に良港なきを以て、一要港たるの實を失はず。街衢は飯沼、新生、荒野、今宮の四部落より成り、中、飯沼を本銚子町と稱し、他の三聚落を銚子町と呼ぶべきこと行政上の區劃なれども、通例以上を總稱して單に銚子町と呼べり。人口約三萬、町に富商大屋多く、海上郡役所、警察署、縣立中學校等の設置あり。漁師多く、風俗は淫靡にし

て、牡蠣屋根はことに旅客の心を惹くべし。特産物に銚子縮、醬油、甘露、醃、鯉節、鱒粟漬等あり。その中銚子縮は古來著名の織物にして、久しく萎靡振はざりしが、近年やゝその聲價を恢復したり。また醬油はその名關東に顯傳せるのみならず、野田と其の名を齊うして本邦屈指の主産物なり。交通は汽車の他に利根川を上下する汽船の便あり。以て上流關宿町まで通ずべく、また霞ヶ浦、北浦を往復する汽船あり。これに乗すれば二三時間にして、常陸國土浦に達し、常盤線に乗することを得べし。今序を以てこの地より各地方にいたる里程を示さんに、千葉郡千葉町へ二十里十二町、印旛郡佐倉町へ十六里十五町、香取郡小見川町へ七里十町、郡内飯岡町へ三里五町、而して常陸國土浦に二十三里三町を隔つ。

**圓福寺** 銚子町の東端にあり。飯沼山と號す。神龜元年僧德道の開基に係り、阪東二十七番の靈場に屬す。眞言宗にして十一面觀音の像を安置し俗に飯沼觀音といふ。堂宇の建築東京淺草觀音に似て、やゝ規模の小なるもの、また壯麗を盡せり。境内に

茶店、雜貨店等臚列し、頗る雜沓を極む。寺内に古碑一基あり。傳へて瀧川一益の墳墓と稱す。而して寺境林丘に倚り、北は銚子港に臨んで眺望の愛すべきあり。利根の白帆、銚子町の黑白相雜れる瓦屋根、牡蠣屋根など凡て一眸の下に集る。

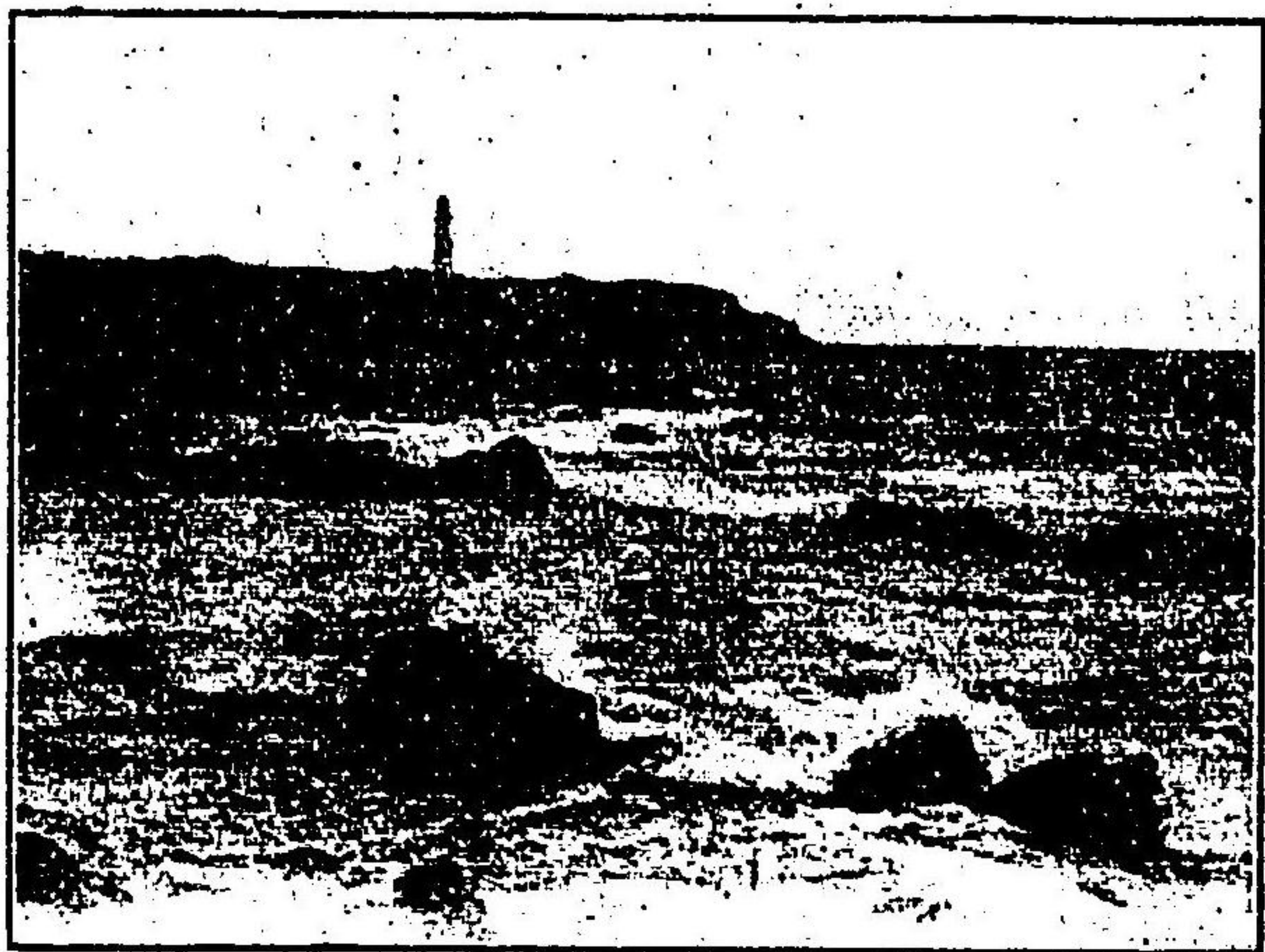
川口明神 圓福寺背後の丘上にあり。俗稱して白紙大明神といふ。安部晴明の戀人の海中に身を投せしところなりと傳ふ。婦女容貌の醜なるものこれに賽すれば効驗ありとて、參詣の婦人多し。社内青松を栽え、前には利根川の海に朝するの大景を披き風景絶佳なり。また川口に千人塚あり。巨大なる古塚にして、塚上地藏の石像を建つ。むかし漁夫の海中に溺死したるものを埋葬したるところと傳ふ。利根川圖志に曰く「獵船の沖に出で、風あしくして歸遲きときは、この千人塚の上にて火を焚き、川口目じるしとするよしにて、頂に火を焚きし跡あり。また塚の側に鐵砲の臺場あり」と。この他川口の岸邊に一の岩、二の岩あり。銚子の港口を扼せる巖にして古來著名の大岩なり。

銚子町を出で、飯沼山田福寺を過ぎ、これより歩いて東南に向へば、海岸の高原ひろく前に展開せられ、一道の道路その間を長く通せるを見る。而して一里ならずして、疎松風に亂れたる邊、一基白色の燈臺の高く空を抜けるを見るべし。これ本邦の最東端なる、犬吠岬の燈臺なり。有名なる海水浴場はその東南二三町のと、こゝにあり。而してこの銚子の半島の合計三里ばかりの間を一周するを磯めぐりと稱し、春日駘湯の時、貝殻など拾ひつゝ遊覽すれば、興味盡し盡くべからざるものあらん。

銚子海水浴場 所在地を酉明が浦といふ。後に松樹の丘陵を負ひ、前に澎湃たる怒濤を開き、風景頗る壯快なり。旅館に株式會社鷗鷗館あり。且つ鮮魚は附近外川の漁村より來るを以て、他に比して味甚だ美なり。この背後の松山に伏見宮御用邸敷地あり。附近散歩すべき地の多きはこの海水浴の特色なり。まづ、背後の松原を出れば、前に二百米突ばかりの愛宕山あり。上に陸軍三角測量臺を設く。頂上の眺望絶佳にして、利根川の海に朝するさまを始めとして、犬吠岬附近、飯岡岬附近皆な眸中に集る。これを南に下れば外川村あり。蟹舎鱈屋、眞に好箇海岸の漁村なり。地に砲臺の遺墟

あり。

外川より更に東すれば犬若といふところに出づ。その海岸に仙ヶ窟と稱する巨



犬 吠 岬 燈 臺

大なる岩礁聳立す。その高さ四五十尺、岩腹に大洞窟あり。犬若の眺望臺は、とある家の背後にありて、名洗、飯岡に連れる屏風ヶ浦を見渡し、人をして割愛去るに忍びざらしむ。歸路は外川に出で海岸を傳ふべし。三四町にして長崎といふ地あり。二三十戸の漁村にして、漁家皆な圓石を築積して石垣をめぐらし、低き屋上にも多く石を載せたり。風烈しきにや。風情ある地なり。一岬長く海上に突出す、鯨岩と名け、岸邊も岩礁亂立す。これをぐるりと一周すれば、

再び以前の西明に出づべし。

徳宮蘆花氏作「大海の出自」に曰く「秋と撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。午前四時過ぎにもやあらぬ。海上猶ほの闇らく、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿ふて爛りたる樺色の横たふあり、上りては濃き紫藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を狂く。光さやかにして、宛ながら東瀛を鎮するに似たり。左手に黒くさし出でたるに犬吠岬なり。岬端の燈臺には、廻轉燈ありて、陸より海にかけ連りに白光の環を畫まき。暫くする程に、曉風冷んとして青黒き海原を掃い來り、夜の衣は東より次第に剥けて、蒼白き「曉」の波を踏みて此方へくと近寄る状も指點す可く、磯の黒きに池白く打かゝるさまも漸く明になり來りぬ。眼を上ぐれば、黄金の弓を見し月も何時可百銀の弓とかはり、爛りて見へし東の空も次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の、腹は黒にして脊は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへど、東の空已に暁を開きて、太平洋の花は今明けんとするなり。已にして曙光花の發くが如く圓波の廣まる如く空に水に廣がり行きて、水いよ／＼白く、東の空ますます／＼黄ばみ、弦月も燈臺もわれと消れ行きて、果てはありとも見へずなりぬ。此時日の使とも覺しき渡り鳥の列鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波と云ふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一程待つあるのやめき——聲なきの聲四方に滿つ。五分過ぎ——十分過ぎぬ。東の空見る／＼





蘇我 寒川の次驛にして、同停車場を距ること二哩二十五鎖、停車場の所在地に蘇我町今井區字谷原といふ。蘇我の地に延喜式春日明神あり。

小弓城址 蘇我野村大字生實郷は古は小弓と稱す。はじめ原友幸この地の城にありしが大永五年足利義明代りてこの城に居る。世に小弓御所と傳ふるもの即ちこれなり。後、義明北條氏と國府臺に戦ひ、父子共に敗死するに及んで、その城館また廢し、今なほ地に遺墟の跡の存するを見る。

大巖寺 小弓城址と同所にあり。蘇我停車場より約五町を隔つ。天文二十年の草創、淨土宗の巨刹にして關東十八檀林の一たり。中興の僧を道譽上人となす。

本行寺 蘇我停車場の南十餘町、濱野町にあり。文明元年日泰上人の草創といふ。この他なほ蘇我附近に於て停車場より十町の地に福正寺あり。また飯岡八幡あり。飯岡八幡は天平年間の創始と傳ふ。寒川蘇我野を経て來たれる街道は濱野町を経て上總國に入る。

野田 蘇我の次驛にして同停車場を距ること五哩六鎖、野田宿へは四町ばかりを隔つ。この附近の地質は、下總地方に特有なる第三紀層の低丘陵より成り、雜木山多く荒涼寂寥を極めたり。雉子、山鳥、兔など多く、遊獵者にて屈強の地なりといふ。また初茸の産地として名あり。野田停車場より四町にして本門山本覺寺あり。寛永年間日淨上人の開基と傳ふ。房總鐵道は野田より直をに上總國山武郡の土氣停車場に達す。

○官設常盤線沿線地方 常盤鐵道線は田端を發し、南千住、北千住、龜有、金町の諸驛を経て下總國に入り、松戸、馬橋、柏、我孫子の諸驛を置きて以て常陸國に入る。その中我孫子は已に茨城縣の管内にあり。濱街道の一路はほとんどこの線に添ふ。柴又の帝釋天に賽せんと欲するものは金町驛に下車すべし。停車場より同寺までは約十町にしてその間人車鐵道の便あり。

松戸町 武藏國金町驛より小利根川を渡りて達す。常盤線中の主要なる一驛にして、古來濱街道の要衝に當る。小利根川の東岸に臨めるを以て、水陸の交通極めて便







得、弘仁十四年に伽藍建設の事業を終れり。これ今日の辨財天なりと。その地利根川畔の小丘を成して、殿堂山門や、見るべく、風光また佳絶なり。祠畔の酒樓に鮮魚を膾にするは、都人士に適する風流なるべし。

取手町 我孫子驛より利根川の大鐵橋を渡りて達すべし。茨城縣北相馬町に屬し、實に同縣の門戸とも稱すべき地に當り、且つ古來水戸街道の要衝たり。鐵道開通以來は水海道方面の乗客は皆この地より乗降するを以て、益々繁榮に赴けり。市街は東西に長く概ね商戸にして店舗櫛を接す。人口約四千五百、北相馬郡役所以下の官衙あり、この驛より東北一里半にして相馬町あり。その停車場を藤代といふ。また相馬の古御所はこの驛より訪ふべし。その里程三里また町の上方山腹に長禪寺あり。

蘆花氏の利根川を記せる紀行に曰く「取手の鐵橋に到る頃、東の空少し明なりぬ。鷹鳴いて月淡く、まだ明けやらぬ利根の河水洋々として、龍の如き橋影を浮ぶ。既にして兩岸鷓鴣鳴き、日出で霧晴れ東の空に纏綿卷舒せる千百の断雲忽地に點火し黄、橙黄、赭黄、紅、薄紅、朱紅、ラスキンの所謂色にあらすして殆ど火なるとの空に燃えて江に鑑し、莊嚴言語に絶す。偶漁舟あり、兩三隻、中流棹を立て、舟を泊し、鯉網を張るもの、米を清江の水に洗ふて朝飯を炊ぐ。炊煙縷々して空に棚引く、曉汲清湘燃楚竹の趣あり。利根の流は鯉鱒鰻等を初とし其下流十數里の間は碧鱒黒鯛紅鮭等漁獲多し。鱒は秋風初めて起る八九月の際を最上とし、鮭は九月を盛とし、此れより後はワカサギの漁甚だ多しと云ふ。」

弘經寺 取手町の西大鹿にあり。取手町の管内に屬し、相馬古御所へ至る道の左側にあたる。境内廣く、古木茂りて薺に草あり。昔は結城、飯沼の弘經寺と共に淨土宗關東十八檀林の列に班し、百石の朱印を附せられしといふ。また寺の南に大鹿城址あり。天正の頃の豪族大鹿左衛門尉の城址と傳へ、その牙城の趾は地位最も高く、水田を隔て、利根川に對し四方環らすに土壘を以てせり。この邊農作大に開けて畠に桑樹多し。

本多重次墓 取手町の東北井野村大字井野にあり。一小丘にして松樹茂生す。土俗これを御墓山と呼べり。丘の頂上中央に若干の芝地あり、これ即ち本多重次の墓所なり。

りといふ。重次は作左衛門と稱す、徳川廣忠及び家康の二世に歴仕し、剛毅忠勇、鬼作左の名を轟かす。後家康の怒に觸れ上總國古井戸に屏居し、尋いでこの地に移り慶長元年病死す。同村大字青柳の本願寺にその碑あり。また重次の弟本多重玄の墓あり。桔梗塚 取手町の西北稻戸井村大字米の井にあり。相馬古御所へ通ずる道の左側にあたる。桑畑の間、方七尺ばかりの小塚を残して、中に花岡石の崩壊せる五輪塔あり。相馬日記に曰く「桔梗が原は、將門の妾桔梗の前の藤原秀郷に殺されけるところにて、その墳あり。今も桔梗はありながら、花咲くことなきはこの御前が恨みに依るなりといへり。」

守谷町 今人口約二千、北相馬郡の一邑を爲し、町家や、富有なり。取手町より猿島郡の水海道町へ至る街道はこの地を通ず。また南方布施、松戸へ至る街道あり。相馬古御所は即ちこの町の東北に位す。水海道町附近は別に「猿島結城兩郡地方」の部に説かん。

相馬古御所

一に相馬城址と稱す。平將門が一時覇を關東に唱へし遺址なり。

殘壘の上老松二株を植ゑて將門城址と誌せし碑のあたり、實にその正門に當れりといふ。一城分ちて前廓後廓の二となす。前廓東西三十間、南北四十間、後廓東西五十間南北八十間、全面積六萬八千四十坪に餘り、三面沼なりし跡は今半ば田圃に變せり。右近道、糺の森、妙見曲輪、番場愛宕等偕都の趾は名に残れども今はその跡定かに知れず。濠は埋められて畑となり、壘壁の跡には今徒らに桑樹の茂れるのみ。天慶三年將門の誅せらるゝや、その孫小太郎文國は常陸の信太に移り、その七世の孫重門再び遠祖の居地に歸りて、相馬氏と稱せり。天正十八年徳川氏の臣土岐定弘此所に封せられ、次で堀田正俊居りしが、元和元年堀田氏の古河城に徙りし後、城竟に廢址に歸せり。將門記に曰く「是に於て將門を號して新皇といひ、正城を建つべき議を爲す。その紀文に曰く、王城を下總國の亭南に建つべし。兼て礮橋を以て號して京の山崎と爲し、相馬郡大井を號して京の大津となす。而して新皇天慶三年正月中旬を以て遺敵を

討たん爲め五千の兵を帶し常陸の國に發向す。椽貞盛源扶の妻を陣頭に拘す。……仍て皆な諸國のを兵士等を返し遣はし、遣す所の兵僅かに千人に足らず。此事を傳へ聞きて貞盛并に押領使藤原秀郷等四千餘人の兵を整へ急に合戦せんとす。新皇大に驚き二月一日を以て隨兵を率ひて敵地下野の方に向ふ。時に新皇將門の前陣未だ敵の所在を知らざるを以て、副將軍春茂陣頭となり、經明途高等後陣となり、以て敵の所在を訪ね、實否を見んが爲め高山の頂に登り、遙かに北方を見るに敵あり四千餘人許りなり。爰に經明等既に一騎當千の名を得たれば、件の敵を見過ごす可からずと、今は新皇にも奏せず、迫つて押領使秀郷の陣と討合ふ。秀郷素より計事あり、案の如く玄茂の陣を討ち靡かしたれば、副將軍及夫兵等三兵の手に迷ひ、四方の野に散し、存する者少なく亡ぶる者多し。秀郷貞盛等同日未申刻許りに川口村に襲ひ到る、新皇聲を揚げ劔を振ふて自から戦ふ。日漸く未剋を過て黄昏に臨み、新皇馬口を後に折り楯木を前に牽き、昨日の雄は今日の雌となる、かるが故に常陸の國の軍は笑ふて留り宿し、

下總の國の兵は愧ぢて早く去る。厥後貞盛秀郷等相語らひ、兵類を調へ其數を倍し同年二月十三日を以て下總の塚に着く、新皇兵を引き辛島の廣江に隠くれしむ、爰に貞盛事を左右に行なひ、計を東西に廻らし、新皇の屋より始め悉く與力の邊家を焼拂ふ火煙昇つて天に餘りあり。人宅盡きて地に主なし。厥朝將門甲冑を擻し、恒例の兵衆八千餘人未だ來集せざるの間、曾率ゆる處四百餘人にて、辛島郡の北山を帯び陣を張つて相待つ。貞盛秀郷等子反の銳術を翫び、梨老の劍功を練り、十四日未申剋を以て彼此合戦す。新皇順風を得貞盛秀郷等不幸にも咲下に立つ其日暴風枝を鳴らし、地籟塊を運ぶ、新皇の南楯は前を拂ふて自から倒れ、貞盛の北楯は面を覆ふて之に囚る。彼此楯を離れて合戦の時、貞盛の中陣新皇の從兵と撃ち兵類八十餘人追ひ靡かさる、爰に新皇の陣就跡して追ひ來るの時、貞盛秀郷爲憲等の伴類二千九百人皆遁れ去る。只遣る所は精兵三百餘人なり。方を失ひ立ち巡くの間、還つて順風を得たり。時に新皇本陣に歸るの間、咲下に立つ貞盛秀郷等身命を棄て、力の限りに合戦す。爰に新皇



甲冑を着し駿馬をはやめて躬自から相戦ふ。時に現に天罰あり、馬は風飛の歩を忘れ人は梨老の術を失なひ、新皇神鏡に暗中し、終に託鹿の野に戦ふて、獨り蚩尤の地に滅ぼさる、……仍て朱雲の人に寄りて、長鯨の首を刎ね、便ち下野の國より解文を副えて、同年四月二十五日を以て其頸ともに言上す。」

常盤津「忍夜戀曲者」は將門山古御所と脚色して頗る人口に膾炙せり。今その大略を引かん「それ五行子にありとかの招興の十四年樂平けんなる湯泉の昔に、湖の水氣盛に浩々とすめるは昇る天津空雨もしきりに古御所の鮮語の花の立姿。大宅の太郎は目を覺し、將門山の古御所に妖怪變化住家を求め人倫な憐すよし頼信公の仰を受けし光國が暫しまどるむこの中に見なれぬ座敷の二の體はまさしく變化の所爲なるか。申し光國様。扱こそ變化御參なれいで正體をと立寄る光國。女はあわて押し止め、あし申し様子云はねばお前の疑ひわたりや都の島原で更衣と申す傾城で御座んすわいな。何と。申し、嵯峨やお室の花盛り浮氣な蝶も色かせぐ廓の者に連られて外珍らしき嵐山ソレ覺えてか君様の袴も春のおぼる染おぼる氣ならぬ股ぶりを見染めてめて恥かしの森の下露おもひば胸に光國様と云ふことはその折知つてあけのに女子の念が今日のいま届いて嬉しいこの逢瀬疑ひ晴して下しやんせやいのくと取廻り赤らむ顔の屏風。光國わざと打解けて、いかさま切

なるおことが心底疑念はまつばり晴れたとも武邊修行のわが身の上望みを果さばともなくも、夫に就けても古へのあづま内裏の莊殿を思ひ出せばオ、それよ、扱も相馬の將門は威勢のあまり謀叛と共企て並べし大内裏騷者の振舞都に聞え朝敵討手の三大將ころは二月の百千島真先かけて押寄する數度の軍も辛島にあつまり勢の悲しさは風にのこんの雪なだれむら／＼と吹き散つたり平親王が最後の一戦見みや／＼と夕月のかげなる駒に打乗つて向ふ者をば拜み打ち立割はる付け事割かくと見るより上平太が放つ矢先に將門は米かみ根深かに射通され馬よりどうと敗なき落命寄手は勇む勝鬨と、今見る如く物語る。思へば無念と更衣が齒を喰しはる忍泣。さこそと光國つめ寄て、合點の行かぬ女の振舞今合戦の様子を聞き切りに催ほす落涙は、と見咎られてそうさぬ顔。はづみに落せし錦のみ旗。さてこそ／＼相馬錦のこの旗を所持するからは問ふに及ばず將門がわすれ形見瀧夜叉姫であらうかな。チエー残念やかく見露はされし上からは何とか包まんまことわれこそは平親王將門が娘瀧夜叉なるは。扱こそオ。ひと器量ある汝ゆゑ命を助け味方にと思ふ心が仇となり見あらはされし上からは習ひ覚えし妖術にて光國そちが命をたつ覺悟なせ。何をこしやくな。怒れる面色忽ちに柳眉遊立ちつく息は炎となつて炎たる妖術魔術のかうつうに流石の勇者もたち／＼だち、檜木の葉のさう／＼さう、魔風と共に光國が襟かみ掴んで宙宇の争ひ、怪し恐ろし世に歌子時と繪本の忠義傳。

桔梗原 守谷町の東宇郷川にあり。高原にして松樹密生し、更に貝塚沼を下瞰して風光佳なり。原頭に桔梗花多し。相傳ふ、平將門のその妾桔梗の前と長夜の宴を張りしところなりと。即ち相馬日記に秀郷の桔梗の前を誅せしと傳へ記せるところなり。西林寺 守谷町の南にあり。擁護山と號し禪宗を奉ず。寺域に妙見八幡祠あり。もと將門の城内に鎮祀したるを後世こゝに轉移したるものなり傳ふ。將門記今昔物語等にその名見えたり。

禪福寺 守谷町の北方筒戸村にあり。萬治三年の中興にして本尊觀音像は平將門が渴仰崇信せるものなりといふ。なほ村に相馬小次郎胤親の居城と傳ふる城墟あり。

高井城址 守谷町の東南高井村大字下高井にあり。初め相馬氏の後裔高井氏これに據り、天正年間北條氏と共に滅ぶ。後その族なほ留つて此に居りしが、徳川氏の時に及び歸農して城廢に歸し、牙城の跡も耕地となれり。東南に土壘空濠あり、南に城門の跡あり。その他城櫓、外門の遺跡などあり。且つその左方の妙見社は古く相馬氏の

氏神とせしところにして、社南になほ幾多の空濠土壘等あり。

將門墓 守谷町の東南一里、山王村大字岡村の佛島と稱する小丘を將門の墳墓と傳ふ。今、桑畑に化し了せり。相馬日記に岡村の延命寺の後林より瓶一箇及び將門が七人武者の塑像など掘出せし由の記事あり。また、岡村の地は藤代川の岸に臨み、川の沿岸は將門が叔父國香を射殺せし遺跡といふ。大なる水門あり。下流二萬石の田圃を灌漑する水門なりといふ。東二里にして相馬町藤代に達すべし。

相馬町 停車場を藤代といふ。取手の次驛に當り、小見川を隔て、常陸の佐貫驛に連續す。古來濱街道の要驛に當りし地、商人多し。

なほ藤代取手以東利根川以北の地にも若干の名勝あり。

河原代 藤代の東にある村落なり。村の安樂寺に平國香の墓と傳説するものあり。また一鍬松あり、地に桃花多し。

文間明神 取手町の東一里餘、文間村大字立木にあり。兩社に分ち、西なるを角宮





衰微して以て今日に至れり。なほ、同村大字瀧村に一寺あり。瀧水寺と稱し、仁明天皇の勅願に依り承和年間の創建といふ。寺門の二王は運慶の作なりと傳ふ。寺寶に平貞胤の寄附狀、同昌胤の寄附狀、金壹橋次寄附の佛具及び建武五戊寅八月八日の鐫銘ある古鐘等あり。

安食町 北林の次驛なり。停車場を町の南數町に置く。人口約四千六百餘。地の東南は印幡沼に面し、西北は利根川滔々として流れ、長戸川を以て兩者相通ず。船舶の輻輳せるを以て、土地繁華に商業また行はる。汽船は東京、銚子、古河、栗橋間を往復せり。旅客もし香取神社に賽せんと欲せば、この地より利根川を下るを以て便とす。陸路には、船橋より木下を経てこの町を通じ、以て成田に至る成田別街道あり。また別に木下よりこの町を過ぎ、直ちに香取郡の滑川に達すべき銚子街道あり。町より木下まで二里三町、成田まで二里十八町、滑川まで約三里を隔つ。

大鷲神社 安食町の中央にあり。育見安産の守護神として參詣するもの多し。その

麓二町に大乘寺あり。境内の吉野櫻、頗る愛賞すべし。

駒形神社 安食町の駒形山上にあり。穀神を奉祀するところ、利根川筑波山を望んで風光頗る佳なり。

龍角寺 安食停車場の東方約二十町にあり。天笠山と號し、和銅二年の草創にして、天台宗を奉ず。慈覺大師及び運慶作と稱する佛像あり。また境内に七不思議あり。

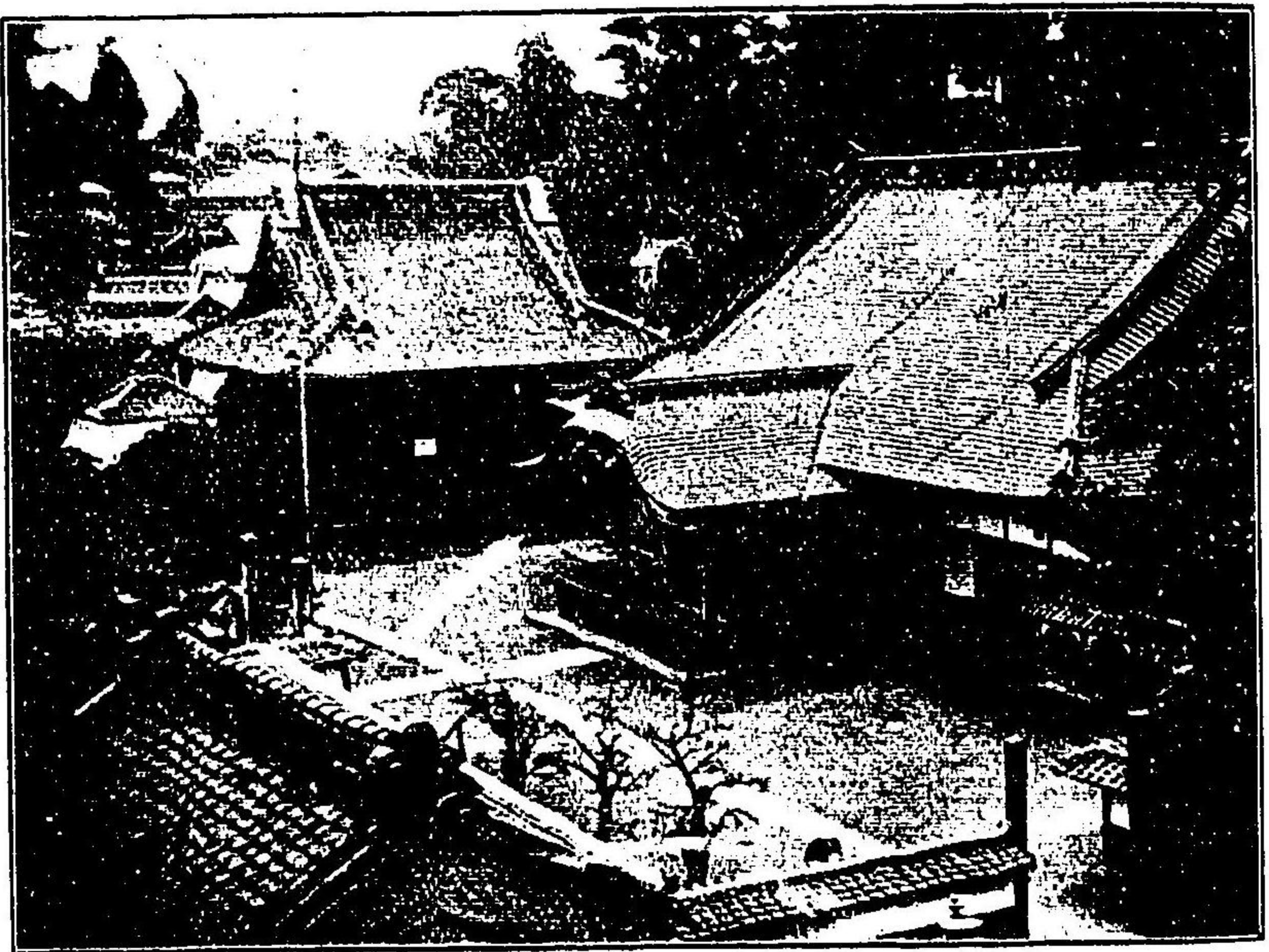
安食を出で、より、汽車は印幡沼の岸を縫ひ、松崎驛を経、頃刻にして成田驛に入る。即ち成田山新勝寺の所

在地たり。

成田町 印幡郡の南部に位す。人口約六千、不動堂の所在地として宏壯なる旅店、商家相櫛比し、往來常に織るが如く、賽客常住群集せり。今、最近の統計に由りて成田鐵道本驛乗客の數を見るに、一年間三十四萬一千九百八十人の多きに達せり。以てその如何に盛なるかを推知すべし。町に成田銀行、成田瓦斯合資會社、成田病院、私立成田中學校等あり。今成田停車場より各驛への哩數を示せば、東京市本所へ四十

哩、佐倉驛は八哩、千葉驛へ十八哩、銚子驛へ四十九哩、常陸國土浦驛へ四十一哩、同國水戸驛へ二十三哩を隔つ。而して東京市より總武鐵道によれば約二時間、日本鐵道によれば約二時間半にしてこの地に達するを得べし。

●新勝寺 神護山と號し、一に成田山明王院、或は單に成田不動と呼ぶ。東國隨一の流行佛にして、本宿道北山腹にあり。市街より、門を入れば、石甃途を疊み、石磴高く二王門に至る。路の兩側には旅舎齋を接し、婢等の出で、賽客を呼ぶ聲喧しく、通眼堂、新勝寺本坊、祖師堂、大師堂は路の左側に連り、阿彌陀堂、正福院はその右側に連る。二王門は天保年間の建築にして、成田山三字の額は前の東大寺別當道恕上人の筆なりといふ。左右に金剛力士の像に安置せり。二王門を過ぎて更に石燈を上れば、兩側に奉納の石燈籠及び石碑立連なり、磴を登り盡せしところに不動尊本堂あり。結構美を盡し、燈火は金器銀財に映じて燦然人の眼を射る。護摩の烟、蠟燭の光、居住絶ゆるの機なし。堂の廣さ十四間四方、建築は安政四年のことに係ると聞く。腰板の五



成田山新勝寺

百羅漢は松本良山の作、四方扉の二十四孝圖は島料俊表の作、軒先の龍は長谷川權頭の作、本尊裏面の十六羅漢狩野一信の筆なり。本堂の右方に鐘樓、寶塔、經藏、額堂、接待所あり。寶塔は高さ九丈、間口五間、周圍に十六羅漢の畫像あり。經藏の額面は白川樂翁公の筆、額堂は七代目團十郎の寄進に係るといふ。更に本堂の背後に光明堂奥の院あり。光明堂の扁額は龜田鵬家の筆と稱し、併に文晁筆猿樂走馬の圖あり。奥の院には大日如來を安置す。

この他なほ境内に朝日觀音堂護摩本堂、聖德太子堂、望河閣、花屋敷、吉野櫻、大蘇鐵、パノラマ等あり。花屋敷には有名なる大南天を栽ゆ。境内の廣さすべて三千六百六十五坪、老杉喬松蔭鬱として、まことに關東隨一の靈刹たるに背かず。たゞ惜むらくは、境内俗氣紛々として、或はあやしげなる石像、石標を建て、または泉石假山の奇を装ふこと多きを。然れども、これ本山信仰の人の多く俳優、藝人、工匠の輩にして、尙高の風趣に心乏しきが故なるべし。寶物は數多きが中に、天國の御劍を以て第一に推す。これ平將門調伏の砌り朱雀天皇の賜りしところなりと傳ふ。毎月二十八日を以て緣日となし、參詣人絡繹たるが中にも、一、五、九、三月の繁盛は物の比すべきなく、各旅店は講中の信徒を以て充滿し、壘一壘につき二三人を容るゝ程の熱踏を極むといふ。寺の緣起の大意に曰く「そもく成田山新勝寺は、新義真言宗に屬し、京師上嵯峨大覺寺御門跡末なり。開山を寛朝大僧正といふ。本尊大聖不動尊は、佛法開基の時、天竺の毘首羯摩の作したる不動尊にて、後唐の惠果阿闍梨の持佛となり、

空海上人入唐して、學成り歸朝の際、惠果阿闍梨より授與せられ、上人歸朝後これを高野山に安置せり。後人皇六十一代朱雀天皇の朝平將門の叛を謀るや、朝廷、神佛の加護によりて朝敵を滅さんことを祈願し、時の高野山大僧正寛朝、輒ちこの不動尊を奉じて、下總國公津ヶ原に下り、假段を設けて朝敵勦滅のことを祈りければ、靈驗著しく、幾許もなくして將門滅びぬ。かくて僧正は靈像を奉じて歸山せんとするや、その重量遽かに重くして動かす可らざりしかば、以爲らく、これ靈像のこの地を愛で給ふが故ならむとし、これより伽藍を造營して、神護山新勝寺とぞ號しける。これ實に天慶三年のむかしにして、爾後不動明王の靈驗日々に著るしく、利益を受くるものますく多く、伽藍の莊麗いよく加はりて、今に至るまでも地方よりの參詣者日夜群集す。」

鐵道は成田より酒々井驛を経て佐倉に至る支線と、北方久住を過ぎて滑川に至る本線とあり。今序を以て支線に沿へる地方を紹介し、而して後本線に及ばん、

酒々井町 成田驛を距ること四哩餘、汽車は僅々十分程にして至るべし。町はもと佐倉城址の一市場たりしもの、今人口約四千三百を有し、市街直ちに佐倉町に相接せり。鐵道開通以前は、成田街道の要街に當り、往來も繁く茶店旅舎等頗る繁昌せしが今大に衰微の傾きあり。この驛より宗吾靈社に赴くべし。

宗吾靈社 酒々井町の北、公津村字下方の東勝寺にあり。義民佐倉宗吾を埋葬せし地にして、境域二千餘坪、供養堂、念佛堂、五靈堂大師堂等あり。明治二十年改築竣功す。社域の碑文は蜂須賀侯の筆なりといへり。毎年八月三日大法會を執行す。即ち宗吾一族が磔殺せられし忌日にして、前日來待夜と稱へて來賽するもの群を爲し、社域は殆んど立錐の地を餘さるに至る。平日と雖も賽客絡繹として、香火の烟絶ゆるの時なし。附近、旅舎、茶店等棟を列ね、皆な賽者を顧客とせるものなり。

光勝寺 宗吾靈社を距ること八町の地にあり。酒々井停車場より宗吾靈社に詣づる途上にあたる。これ、宗吾の叔父光善の住職たりし寺といふ。なほこの附近佛刹尠

なからず。大佛頂寺は酒々井町大字下岩橋にありて、新義真言宗を奉じ、古へ弘法大師が大佛頂の法を修したる遺跡と傳ふ。淨泉寺は酒々井町大字伊篠にあり。佛林山と號し、延徳年間粟飯原胤光の草創と稱し、曹洞宗に屬せり。

麻賀多神社 公津村大字臺方の粟山にあり。式内に列し、一に手黒社と稱せらる。

阿須波社以下數多の攝社あり。社記に據れば瀬織津姫神、氣吹戸主神、逸開津姫神及び佐須良比咩神を合祀すと云ふ。また同村大字船形に一塚あり。高さ二丈許、周圍一町餘にして小山の形を爲す。傳へて因幡の國造伊都許利命の墳墓なりといへり。塚上一碑をたて、また金毘羅の小祠を安せり。藥師寺も同じく船形にあり。寺の本尊藥師如來は、行基菩薩の開眼と稱し、寺寶に旛曼荼羅といへる古き板木及び慶長年間鑄るところの古鐘一口を藏す。寺域山に倚り、印幡沼に面し、風色甚だ佳なり。ことに後山に登れば西天に富士を臨んで、景色殆んど一幅の畫圖を舒ぶるに似たり。或はいふ、この寺は古へ麻賀多神社の別當寺なりしと。



寶珠院 酒々井町の北、内郷村大字大佐倉にあり。新義真言宗に屬し、永徳三年尊宥上人の開基に係る。古へは大佐倉八幡宮の別當所に當り、千葉介勝胤の崇敬厚かりしといふ。堂宇は明治元年類焼に罹りて、現今は本堂と山門とを殘すのみなれど、本堂の結構や、壯大なり。寺域一萬八百五十餘坪、村内の最高所に位して、東に印幡沼を觀望し、風色頗る奇なり。

勝胤寺 寶珠院の東にあり。常寂山と稱し、曹洞宗を奉せり。享祿年千葉介勝胤の草創に係り、境内に勝胤以下千葉氏數代の墓碑あり。また庭前に千葉水の小池あり。千葉氏の遺物及び文書を寶物とす。なほ、同村に口の宮社あり。承應年間佐倉の藩主堀田正信の創建にして、義民宗吾及び妻子五人の靈魂を祀ると傳ふ。

東光寺 酒々井町の東にあり。大廣山と號す。真言宗に屬し、建長年間僧俊譽の開基といふ。西に酒々井の市街を控へ、南に銚子街道をめぐらし、東には翠巒の重疊して四十七谷を爲すあり。北には印幡湖の渺茫碧を凝らして遙かに筑波、日光の諸山を

浮ぶるあり。山水の秀麗頗る見るに堪へたり。

酒々井町附近の名勝は、以上の他なほ將門山、清光寺等あれども、既に總武鐵道沿線の部に記述せしを以て、こゝに争を止め、再び成田驛に返りてその北方本線に沿へる地の紹介に當らん。

久住 成田停車場の次驛にして、村は成田町の北方約二里に位し、祥鳳院及び永福寺あり。祥鳳院は竹縣山と號し、寛平元年間平良將の創建に係り、今曹洞宗を奉ず。寺寶に徳川家康以降歴世の寺領寄附狀、開祖の僧盛哲の袈裟、狩野元信筆龍虎の畫幅并に唐の補之筆の松竹梅畫幅等あり。

長沼 久住及び豊住兩村の間に位して、町狀や、瓢箪に似たり。東西一里南北十町餘、新妻、飯岡、水掛の諸川これに瀉ぎてその水源を爲し、沿岸に村落多く、灌漑の利あり。沼中最も漁釣に宜し。

大慈恩寺 本大須賀村大字吉岡にあり。寺の山門を以て世に知られ、俗に勅使門の名あり。蓋し、往古香取神宮例幣使の下るや常にこの寺を以て旅館に充てられしもの

名遠近に振ひし巨刹なりしも現今大に衰微せり。

滑川町 成田停車場より久住驛を経て至る。停車場所在地を字猿山といふ。町の人口約二千餘を有せり。小御門神社はこの地より賽すべし。

滑川観音 滑川停車場より十町の地にあり。阪東二十八番観音の靈場にして、滑川山龍王院と號す。本尊十一面観音は佛工定朝の彫刻、仁明天皇の朝承和七年にこの地へ安置せりといふ、本堂の傍なる船越地藏堂は、即ちその佛像を奉安せるところなり。観音堂の西一町許に朝日淵址あり。これ、小田宰相將治が遊漁して観音の像を感得したる遺跡と稱し、今も観音應現碑を止めたり。

菊水山 滑川町の上なる高阜をいふ。即ち南朝の臣小田氏の城址なり。小田氏もと忠臣と稱すべきほどの事蹟なきに、里人皆な忠臣の城址といふは、單に南朝に事へたりといふ點より推測したるものか。山の麓に菊水井あり。これを滑川観音の靈泉と稱す。

兒塚 滑川町大字西大須賀にあり。古來著名の荒塚にして、地を兒の原と名け、これを詠せし和歌多し。廻國雜記にいふ「しもつふさの國兒の原といへる所あり。いかなる故にかゝる名に侍るぞと、里人に尋ねければ、この在所白浪青林横行の地たるによりて、ある少人の通りけるに、衣装など剃ぎとるのみならず、剃へ殺害し侍りき。夫れよりこの所をかやうに號し侍べるよし語りければ、今さらの心地して塚のほとりに立寄りて、思續けて回向して侍る。白浪にうき名をながす兒の原戀路にすつる身とも聞かばや。」

東三井寺 同じく西大須賀にあり。天台宗を奉じ、日本三三井寺の一なりといふ。千手観音を本尊とし、傍に薬師堂及び三箇の井あり。寺寶に、平將門の嬖妾桔梗の前の鏡及び懐劍なるものを藏す。その他、同村に、西大須賀城址及び耀窟神社あり。耀窟神社は俗に鹿島明神の祖父稜威雄走神を祀れりと稱し、社背に横穴あり。

小御門神社 小御門村大字名古屋にあり。今別格官幣社に列し、南總の一名祠を以

て稱せらる。滑川停車場より東南方二十町餘に當り、その間道側に松樹を植えたり。祀るところは贈太政大臣藤原師賢卿の尊靈にして、地は實に卿が墳墓の地に當れり。卿、はじめ、後醍醐天皇に仕へて忠あり。元弘の亂、天皇に代りて叡山に登り僧兵を募りて北條氏を誅せんとせしも、力竭きて笠置の行宮に遁れ、茲にて再舉を圖りしと雖も衆寡敵せずして終に北條氏の爲めに捕へられ、下總國に配せられて千葉介貞胤の一族大須賀信濃守の邸に幽囚の身となり、終に元弘二年八月二十九日この地の露と消させ給ふ。後里人其所を公家塚と稱し來りしが、安政年間佐原の人伊能氏師賢卿の事蹟を考定して、その墓ならんと説き、次で清宮秀堅の墳墓考出るに及んで、ますく之を詳かし、明治十年尾張の人澤田氏始めて官に申請して社殿を造營し、十四年九月に至つてその工を峻る。現存の社殿に正殿、拜殿、幣殿等あり。社背は即ち卿が墳墓の地にして、墓前に一碑を建つ。近年社地に櫻樹を栽植して大にその風趣を増せり。

助崎城址 同じく小御門村大字名古屋にあり。千葉介常胤の第四子大須賀信濃守以下子孫二十葉の居城たりしといふ。天正十八年千葉氏の滅ぶるに及び、城また竟に廢址に歸せり。

下子孫二十葉の居城たりしといふ。天正十八年千葉氏の滅ぶるに及び、城また竟に廢址に歸せり。

迎接寺佛器 小御門村大字冬父に一寺あり。迎接寺と稱し、寺に佛器多く、皆な永仁三年の銘鐫あり。また觀音、閻魔、夜叉等の假面十餘枚を藏す。惠心僧都の所作なりといへり。名木城址は同村大字名木にあり。

郡 滑川停車場の次驛なり。滑川より此所に至る間、旅客は車窓の左に利根沿岸の曠漠たる風景を雙眸に納め得らるべし。地の附近は鴨の狩獵地として、頗る都人士に知らる。

神崎町 郡停車場の西北一里にあり。利根川の南岸に位し、水路の要津を占む。古來銚子街道の要衝に當りて、旅客の出入繁かりしも、鐵道開通以後頗る寂寥の傾きあり。現今人口約三千、神崎神社あるを以て有名なり。町より西南滑川へ二里一町、東方佐原へ二里二十六町を隔つ。

●●●●● 神崎神社 神崎町の中央丘上に鎮し利根川に臨む。白鳳二年の草創と稱し、古へ香取神社の攝社なるべしといへり。幾級の石階は街巷より直ちに峙ちて森樹鬱鬱の間に通じ、正殿、拜殿、末社、社家等その境内に連り、高潔にして且つ幽邃を極む。最も避暑に適せり。また社殿の右側に巨大なる神樹あり。本草綱目に所謂山桂樹にして和名をナンヂヤモンヂヤといふ。鹿島日記に曰く、「神崎の神社に詣づ。社の前にナンヂヤモンヂヤとよぶ大樹あり。いと年へたる桂の木なりけり。神代よりしげりて立てる湯津桂さかえゆくらんかぎり知らずも。」

●●●●● 十六島 古へは神崎驛の對岸押砂以東の地未だ陸をなさず、利根川の流域此に至つて河幅を加へ渺茫として直ちに霞ヶ浦に接し、古歌に香取の海、香取の沖、また香取の浦等と詠じて銚子に至る水路の難處たりしが、年を歴るの久しき漸く中流に汀洲を生ぜり。今の所謂十六島なるもの即ちこれなり、十六島は今別ちて十餘島、本新島、新島の三村に屬すと雖も従前はこれを新島と總稱し、二分して上新島下新島と名けた

りき。全島概ね洪水の患少きにあらざるも、地味到處肥沃にして五穀成熟の期早く、且つ名蹟に乏しとなさず。即ち、舊上新島の八筋川にアカシ堂あり。堂の四面ことごとく米塀を塗抹し、所として赤色ならざるはなし、故にその名を稱せり。また同所の大島に藥師堂あり。本尊藥師如來を安置す。舊下新島の加藤洲に十二橋の勝あり。民家川の兩邊に在るを以て藏々に小橋を架し、互に相交通せり。尤もその數十二に限れるに非らずで時に増減ありと雖も、常に數十二の内外にあるが故に、古來十二橋の名を以て聞ゆ。また同所長泉寺の境内に子育觀音あり。加藤洲藥を發賣す。

蘆花氏の「水國の秋」と題する記文にいふ、「十六島の南端大崎の嶺には漁家二三、網は門にあり。魚籃は水にあり、竿は簞を乾し、杭は舟を撃きたり。裏には物見櫓の様なるものあり。鮭の見張りをなすなりと云ふ。畫にしたき景なり。今、此十六島は新島村と稱し、三千餘町歩の田あり、九萬石の收穫ある大村なり。頭は霞ヶ浦にあり、尾は北浦にあり。利根の本流は右、北利根は左、横利根は頭の方を斜に限りたるものにて、若し此島なくば石納佐原のあたりより加村津の宮あたり迄は一面湖水の如き流とならむ。現に去月の大水にて、全島

水に没し、潮來より佐倉まで三里の間を、舟は直ちに島の上を往來したりと云ふ。今は水落ちたれど、所々に溜あり。岸に乾したる稻も、雀の餌にだに足らざる可く見ゆ。此利根に入りてより、櫂を措きて棹にて行く。川幅産だ狭ければ、舟はさわく〜と背押し敷きて進み、青花はら〜と面に降りかゝる。一句なかる可からざる所なり。島の方には所々械を設け、本地の方には所々に汲水ありて女などの大根洗ふ見ゆ。鯉網蝦籠は到る所に設けあり。如何にして通るやらむと思へども、舟人は巧みに其間を棹して行く。午後二時潮來に着く。梁星巖「滄海買舟、發木風、水月清明、蓬窓加畫、及至潮來而天曉矣」と題して詠す。曰く「水枕夢騰度短宵、煙波蘸月自迢々、一聲艫板天方曉、已到潮來十二橋」と。遠山澹如また詩あり、曰く「霜落菰蒲殘水滄、碧琉璃上滿船行、外湖忽入裏湖去、十二橋頭盡月明。」

再び郡驛こほりえきに戻れば、汽車は遙かに筑波の翠螺すいらを望み、近く渺々たる利根川に白帆の徂徠そらいするを眺めつゝ、頃刻けいこくにして佐原町に達すべし。佐原驛を以て成田鐵道の終點しゅうてんとなす。停車場は町の南端にあり。

佐原町 今、人口一萬二千餘、南總東方の一繁華區にして、香取郡の北境、利根川の南岸に位せり。小野川の水來りて町の中央を貫流し、これに因りて町を本地、新地、

の二區に別つ。重なる建物に香取郡役所、警察署、中學校、佐原興業銀行、佐原倉庫株式會社等あり。地はまた利根川の要津えうしんに當り、字川口に汽船及び和船の發着所あり。町に酒造家多く、味淋みりんまた名あり。停車場より三町を隔てたる諏訪山に町の總鎮守諏訪神社あり。またその西北に鳥居元忠の城址あり。城山と稱す。町一體に華美の風ありて、家屋の構造も宏壯くわうそうに、街衢甚だ整正せいせいなり。繁華の中心を橋本町、下分町、横宿町等となす。今この地より各地への里程を記せば、千葉縣廳へ十六里餘、佐倉町へ十一里餘、成田へ八里餘、常陸の土浦へ十一里二十八町、東京上野停車場へ五十九哩餘を隔て、香取神宮へは東方僅かに三十二町許を隔つるに過ぎず。

大戸神社 佐原町の西大戸村おほとにあり。縣社に列し、香取神宮の第一攝社せつしやたり。草創は遠く天武天皇の白鳳年間はくほうねんかんに係り、手力雄命たぢからをみことを奉祀す。神寶龍の假面かめんなる寶物あり。

津宮 佐原町の東方三十町餘にあり。佐原と同じく利根沿岸の一要津えうしんを爲し、市街を通常津宮河岸と呼ぶ。水路によりて香取神宮に赴くもの、また香取より鹿島息柎かしまいさすに



神井をいひ、七橋とは大阪、五段田、萱田、小山、下井、氷室、地口の七神橋をいふ。八阪は即ち大阪、龜邊、若宮、井下、氷室、御手洗、奴久井、幸若なり。その他有名なる神苑櫻の馬場は社の背後にあり。一面の芝生にて、數百株の櫻樹は翠松の間に雜り。春風駘蕩の候頗る美觀なり。加ふるに園の眺望頗る佳絶にして、眼を放てば香取ヶ浦、十六島の風光は勿論、常總の山水また一眸の下に集りて、絶景容易に筆紙の及ぶところに非ず。更に社の縁起を按ずるに、創建は遠く、神武天皇の御宇十八年の事に係り。經津主神を主神とし武甕槌神、天兒屋命、姫神を合祀せり。古へより軍神として帝室の御崇敬淺からざるのみならず、遠近の喪人陸續として社前に跡を絶たず中にも毎年の軍神祭、御田植祭、大饗祭、等はことに殷賑を極むといふ。まことにわが國の軍神としていとも尊き靈祠なり。

以下更に筆を改めて利根川下流沿岸の地の名勝を記述せんとす。佐原及び津宮よりは日々銚子へ通ふ汽船あり。利根の風色は佐原以下銚子に至る間最も出色なりと稱せらる。「水國の秋」にこの間の風物を舒して曰く

北浦の水利根に入るあたりは、河幅廣々とのて右岸の小見川石出の嶺、左岸の加村息栖など、川を隈どる水村遠近に盡くが如く、荻荻所々は洲をなして銚網を曳く家、蝦取る舟、其所此所に點在し、水中に鳥居聳へ、枯芦の彼方に煙立つなど、盡にしたき眺めなり。石出の嶺を廻りて長江右に折れ、流に従つて下る下里さしも廣がりし川幅濶の口を括れる如く俄かに相聲りて、常陸の洲鼻と總州の岸を飛び渡る程に通れる所、一角僅かに開けて悔光を露ぼすのほとり、總岸に沿ふで高低參差牡蠣殻の白屋根は瓦屋の黒きに映じ、帆檣林立するもの間はすして銚子なるを知る。大沼枕山、暗水寒鳴派作堆、煙中燈火見樓臺、半蓬殘月芦洲曉、棹入沙鷗夢裡來。」

●●●●●  
 側高神社 香取神宮を距ること東方約一里、大倉村の上方山上に鎮す。香取神宮第一の攝社にして、城内古木鬱蒼し、頗る秀麗の氣あり。またこの地より東南小見川町へ達する途上分郷村に分郷城址あり。俗に城山と稱し、墨塚の遺墟あり。曾てはこの城をも小見川城と稱し、粟飯原左衛門、小見川越前守等の據るところといふ。分郷より小見川町へ約三十町を有す。

●●●●●  
 小見川町 今、人口約六千、佐原より來れる銚子街道はこの地を過ぎて東方須賀山へ向へり。もと内田氏の城市にして、利根川の西岸に蒞み、北方常陸の息栖に相對せ

り。黒部川市街の中央を流れ、街衢はその兩岸に沿ひて形成せらる。香取郡に於て繁榮佐倉に次ぐべしと雖も、獨り水利あるのみにして、鐵道の便を缺きたるは町の不幸といふべし。西方佐原へ二里五町、東南銚子町へ七里十町を隔つ。また南方匝瑳郡の八日市場町へ通ずる街道あり。

菰敷原 笹川村大字須賀山（小見川町の東一里半に當る）及び鹿戸に亘れる一帯の砂場なり。一望漠々絶えて青草を生せず、刀水碧を凝して白砂と相掩映し、老松蟠屈して處々に畫趣を添ふ。加ふるに對岸は所謂常陸の砂山に屬し、これより下流橋村大字石出の邊に至るまで水を隔て、その山を望む可く、風景の清絶たる近村に甲たり。原の南五郷内村樹林寺に夕顔觀音あり。

石出 須賀山の東南に當り、橋村の管内とす。銚子街道はこの地を通じ、依然として利根川に沿ひ、以て東南松岸に達せり。村の南宮本に東神社あり。

福聚寺 石出村の西南、東城村大字小南にあり。延寶年間鐵牛禪師の開基に係り、

禪宗黃檗派に屬す。本尊十一面觀音は傳へて、宋の陳和卿の作と稱せり。寺城大約一萬五千餘坪、風景頗る幽雅にして八景の目あり。即ち石階晴嵐、堰水夕照、外郭夜雨、城山秋月、替地落雁、前郊暮雲、本寺晚鐘、飯岡歸帆これなり。また開山鐵牛禪師の墓碑あり。禪師袈裟掛松あり。

○猿島結城兩郡地方 下總國の西北部長方形を爲して、武藏、常陸兩國の間に穿入し、一部は上野國に他は下野國に接続す。猿島、結城の兩郡これなり。他に北相馬の一郡を加へて茨城縣の管轄に屬す。猿島郡は境町に治し、大邑に古河町なり。結城郡は宗道村に治し、都邑に結城町あり。各人口一萬の都邑とす。鐵道は日本鐵道の奥羽線古河町を通じて猿島郡の西北隅を掠め、北隅に於て水戸線の結城町を過ぐるあり。道路には東葛飾郡の關宿町より境町を通じて結城に達する街道あり。諸川に於て古河町と常陸の下妻町とを連絡する道路に交叉す。他に奥羽街道の古河町を過ぐるあり、小利根川舟楫の便あり。結城町より下妻町、本宗道、本石下を経て水海道町に達する街



道あり。水海道町また結城郡の一邑に數へらる。地形上より推せば兩郡は常陸國に入るべきものとす。

古河町 猿島郡の西北端に位し、人口一萬八百餘を有し、茨城縣下第四位の都會なり。渡良瀬、利根兩川の合湊點にあたり、古來交通の便頗る備はり、下野の貨物は皆

なこの古河河岸に集るを常とせり。奥羽鐵道は停車場を町の東端に置き、直ちに下野の國境へ向つて駛れり。古來陸羽街道の要衝としてはた土井氏累代の治所として、そ

の名頗る國內に揚る。街衢殷盛、商賈、旅店等相櫛比す。下野國野木町へ三十一町、南方境町へ三里二十六町、東方諸川へ三里十六町を隔つ。

古河城址 古河町の西南にあり。古來著名の城壘に屬し、規模大に見るべしと雖も

今大方田圃に化し、僅に砦壘深塹の跡を存するのみ。初め下河邊行義の所築に係り、

後應安年間に上杉憲榮これに據り、東國紛亂の際には初め古河公方成氏に屬せしが、

天正年間遂に北條氏の有に歸したり。徳川氏に至りては城主屢々代りしが、最後に土

井氏移封せられ、以に維新の廢城に及びたり。而して立崎廓及び諏訪廓は徳川氏の世

奥平忠昌の増築に係るといふ。

頼政神社 古河城址内立崎廓にあり。祠宇朱塗にして凡そ七坪許り、内陳また方六

尺許りの祠堂あり。内に二基の石碑を建つ。傳へて源三位頼政の首塚となせど、容易

に信すべからず。康正文明の間、古河公方これを城内の鎮守となし、後松平信輝更に

これを修營す。

宗願寺 古河町にあり。野田院と號し、真宗西派に屬す。親鸞の徒弟野田西念坊の

開基に係り、慶長二年の再興といふ。その他古河町の佛刹としては大聖院、永井寺、

隆岩寺あり。雀宮を以て町の總鎮守と爲す。

古河桃林 古河停車場の南十餘町、新郷村にあり。その樹數萬を以て數へ、花時の

壯觀いふばかりなし。傳へて、昔土井氏の祖利勝江戸市中露店菓物を鬻ぐものより桃

核の棄つるものを集めしが、これを古河に送り、令して城東に栽えしめしものなり。

毎年、花期に際すれば鐵道局より觀桃引列車を出す。

●古河御所址 新郷村大字鴻巣にあり。即ち古河公方成氏の御所址にして、その小丘を古城跡と呼ぶ。丘は東面平地に連り、地方より西南にめぐりて御所沼の沼池あり。

丘上の坦地東西四町許南北二町餘、今は耕地林藪となれり。康正元年足利成氏鎌倉を退きてより、この地に在りて關東に號令し、五代の間公方の御所として東國の中心を爲せしはよく世人の知るところなり。また同所に喜連川義親の墓あり。義親は左馬頭頼氏の子にして、寛永四年を以てこの地に死す。また傍側に高さ三尺ばかりの無銘碑あり。古河誌はこれを以て足利義氏の墳墓ならんといへり。なほ鴻巣の南鳥喰村は、古への日光街道に當れるの地と稱し、廻國雜記にも「さそはれてわれも宿りに急ぐなりかへる夕べの鳥喰の里」など詠めり。

●熊澤蕃山墓 古河町の東南少許にして勝鹿村大字小堤にあり。寺を鮭延寺と稱す。蕃山の高名は世の普ねく知るところ、事を以て幕府の禁錮するところとなり、元祿四

年古河城内立崎廓に死す。鮭延寺また鮭延越前の事蹟を以て名高し。なほ同村に靜御前の思案橋なるものあり。俗に傳ふ、靜御前源義經の跡を追うてこの地に來り、たましく義經の死を聞きて茫然自失しこの橋上に低徊思案せし遺跡なりと。

●勝願寺 大堤の東南、香取村大字磯部にあり。眞宗東本願寺派關東七箇寺の一にして、宗祖親鸞の高弟飯沼善性房の創建に係るといふ。堂宇碧丘に據りて幽篁の間に位し、境内絶た閑雅なり。なほ同所字淺間の南に磯部の判官の城墟あり。

●三島神社 香取村大字水海にあり。道興准后の廻國雜記に曰く「下總國こほりの山といへる所に伊豆の三島を觀請し奉りて、大社ましくけり。かの別當の坊に暫らく逗留し待りけるに、ある夜冴えわたりて土崎の雲嬋娟たりければ、富士の根のふもとに月はがげしろし空は冴えたる秋のしら雲。」水海城墟は同村字内城と呼べる地にあり。文龜年間築田政助の創營といふ。西南に赤堀川利根川本流を匯らし、北部に釋迦沼、東部に水海沼を帶ぶ。なほ村の東方に長井戸沼あり。南北約二里、東西三十町に

巨る巨沼とす。

●●中田 古河町より南約一里十六町を隔つ。新郷村に屬し、利根川の東岸に位せり。對岸は即ち武藏國栗橋町にして、利根川に渡津あり。古來陸羽街道の要衝に當り、關所の設けありき。今も地に遊廓あり。奥羽鐵道の線路は村の東部を掠む。光了寺を始めとして本願寺、滿福寺、圓光寺等の佛刹あり。また八幡香取の合社あり。日光驛程見聞雜記に曰く「中田宿の入口東の方に八幡香取兩社相殿あり。往來の鳥居より一町餘も入れば社あり、神寂びていと尊し、むかしは川の北にありしが瀬かはりて今はこゝに移すとなり。」

●●光了寺 中田村にあり。岩松山聖徳院と號す。もと天台を奉せしが親鸞上人巡錫の後眞宗に改宗せり。寺寶多く靜御前の舞衣一双及び義經形見の懷劍、慈覺大師作靜御前の守本尊佛、義經の鎧、親鸞上人作聖徳太子像、覺如上人筆蓮座御影、蓮如上人筆六字名號、慈覺大師作樂師如來並に十二神將、智證大師作不動明王、弘法大師作大黒

天、同大師所持の鈴等皆な珍とすべし。中舞衣は靜が雨を祈りて、後鳥羽院より賜はれるものと稱し、蛙蟻龍の舞衣の名あり。靜後義經の跡を追うて奥州に赴かんとし、偶々この地を過ぎて義經の戦死を聞き、哀傷禁する能はず、終に鬱屈疾を發してこの附近に客死す。墓は利根川の對岸に當り、武藏國靜村の大字伊坂にあり。

●●大山沼 中田の東、新郷村大字大山の東邊にあり。東西凡そ十町、南北約一里、狹長形をなして大山、中田、前林の諸村落點々これを繞る。沼甚だ深からずと雖もなほ小艇を放つに足り、鮒その他的小魚を漁するに可なり。風光また甚だ愛すべし。沼の極南は即ち利根の本流赤堀川の流域に近し。

●●元栗橋 中田の南に當り、五霞村に屬す。同じく利根の流域に當れり。元栗橋城址あり。城山と稱し、古河公方成氏、下河邊行朝等の城地なりしならんといふ。なほ五霞村字山王山に東昌寺あり。禪宗にして、關宿の城主築田滿助の菩提所なりしといふ。寺に天正十八年の文字ある古制札及び巨鐘一口あり。鐘に文明八年築田持助寄進す云

々の旨を誌せり。山王山より東葛飾郡の關宿町へは南少許にして達す。また東方一水を越ゆれば猿島郡の治所境町あり。

●境町 今、人口約四千五百、街衢殷盛にして商戸多く、また下總國內の一名邑たり。地勢西に長井戸沼を帯び、南方利根川を隔て、關宿町と相對す。古來利根川沿岸の要津として名あり。今日に於ても汽船は日々數回東京及び利根下流の諸津に向つて發す。即ち水路運輸の便は盛なりと雖も、たゞ汽車の線路に隔絶せるを以て陸路交通の利便に乏しきを恨む。

境町と關宿町とは一水僅かに十九町許を隔つるに過ぎず。されど關宿町附近は已に掲出したれば、更に郡の南邊岩井村附近の名勝を記述せんとなす、東葛飾郡の東寶珠花また岩井の西方二里許りにあり。

●岩井村 境町を距ること三里七町、鶴戸沼の東方にあり。古來製茶を以て著はれし地にして、近世また煙草の製造漸く盛ならんとし、專賣支局の設置あり。且つ地は境町と東方水海道町との殆んど中間に位せるを以て、村制なれども自ら一驛市をなし、

旅舎茶店の路傍に連るもの多し。

●將門館址 岩井村大字岩井に字城合といふ地あり。人稱して平將門の館址となし北相馬郡守谷町なる古御所の僞妄なるを説く。即ち今の島といふ地は古への所謂島廣山にて、北原の地は將門記に所謂北山ならんと。或は説を爲して守谷町の古御所を本館となし、この地のものを別營とするあり。恐らくは穩當なる解説ならんか。なほ同所に國玉神社あり。古へ朱印十石を領し平將門の靈を祀る。

●岩井古蹟 岩井の地なほ將門に關する古蹟多し。即ち字宮下と稱する地の圃中に岩井の跡あり。天慶年間平將門が武器を埋めし地と唱へ、今も一凹所を成す。往時はその傍に岩井權現の小祠ありしも今廢絶せられて亡し。また同所延命院に將門の守本尊を珍襲せり。岩井より東南守谷町に至る道路を内裡道といふ。此等は皆な考古家の攻究を要する材料たるべし。

●水海道町 岩井を距ること東方三里五町にあり。結城郡の東南に位し、西に鬼怒川